

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書44

— 多古町水戸塚ノ後1号塚・2号塚、多古町長者屋敷遺跡(1)～(3)、
成田市・多古町矢作牧野馬除土手、成田市一坪田入I遺跡(1)～(4) —

令和5年9月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書44

一 多古町水戸塚ノ後1号塚・2号塚、多古町長者屋敷遺跡(1)～(3)、
成田市・多古町矢作牧野馬除土手、成田市一坪田入I遺跡(1)～(4)一



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第794集として、首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した香取郡多古町水戸塚ノ後1号塚・2号塚ほかの発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、旧石器時代の石器や縄文時代の土器・石器、そして奈良時代の骨蔵器などが出土し、この地域に暮らした人びとの歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

令和5年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 植 野 英 夫

凡 例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道(大栄～横芝)建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を取録したものである。なお末尾の()内は、遺跡コードを示す。

水戸塚ノ後1号塚・2号塚 香取郡多古町水戸塚ノ後1,377-1の一部	(347-024)
長者屋敷遺跡(1)～(3) 香取郡多古町林字当本489-14の一部ほか	(347-016)
矢作牧野馬除土手(大栄十倉三・一畝田地点) 成田市大栄十倉三245-887ほか	(211-106)
矢作牧野馬除土手(大栄十倉三・一畝田地点) 香取郡多古町一畝田字山ノ下27-4ほか	(347-028)
矢作牧野馬除土手(川上・一畝田地点) 成田市大栄十倉三245-50の一部ほか	(211-107)
矢作牧野馬除土手(川上・一畝田地点) 香取郡多古町一畝田字馬場山161-3ほか	(347-029)
一坪田入I遺跡(1)～(4) 成田市多良貝245-528ほか	(211-098)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては第1章第1節に記載した。
- 5 本書は、主任首席文化財主事 今泉 潔が執筆し、編集を主任首席文化財主事 渡邊修一・今泉で行った。
- 6 一坪田入I遺跡(3)出土の黒曜石剥片の産地同定については、株式会社パレオ・ラボに分析を委託し、分析結果を第6章第3節2、第3表に掲載した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県図書館、成田市教育委員会、多古町教育委員会、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の御指導、御協力を得た。
- 8 本書では下記の地形図を使用し、適宜、図郭によって編集・合成を行った。

第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1)(平成4年発行)
第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「多古」(NI-54-19-10-2)(平成4年発行)
第5図 (財)千葉県文化財センター 1986「多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台遺跡・栗根・土持台・林中ノ台・吹入台-」付図1 多古工業団地内各遺跡周辺地形図(1/5000)を使用し、図郭の不足部分を芝山町発行 1/2,500地形図「19」(昭和53年測量・平成18年修正)と多古町発行 1/2,500地形図「IX-LF 03-4」(昭和53年測量・平成10年修正)で補った。
第6図 多古町発行 1/2,500地形図「IX-KF 93-4」「IX-LF 03-2」(昭和54年測量・平成10年修正)および国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所作成現況図
第23図 成田市発行 1/2,500地形図「IX-KF 72-2」「IX-KF 73-1」「IX-KF 72-4」「IX-KF 73-3」「IX-KF 83-1」(平成20年測量・平成23年修正)および多古町発行 1/2,500地形図「IX-KF 93-4」「IX-LF 03-2」(昭和53年測量・平成10年修正)
第31図 成田市発行 1/2,500地形図「IX-KF 72-2」(平成20年測量・平成23年修正)および国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所作成現況図
第45図 地図資料編纂委員会編 1989「明治前期 関東平野地誌図集成」柏書房の「45 新東京国際空港」

- 9 第44図は、千葉県文書館が所蔵する「矢作牧鹿絵図」(あ22)で、同館の使用掲載許可を得て掲載した(許可番号:令和5年5月9日付け 5-県-2)。なお史料の閲覧にあたっては、同館の豊川公裕・石渡克彦両氏から御協力・御助言を得た。
- 10 本書では国土地理院がWeb上で公開している下記の航空写真を使用した。
図版1 国土地理院空中写真CKT201916-C15-13 (令和2年1月撮影)
図版10 国土地理院空中写真CTK921-C20-9 (平成4年10月撮影)
- 11 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第Ⅱ系)で、図面の方位はすべて座標北である。また記録に用いた標高は、東京湾平均海面(T.P.)からの海拔高である。
- 12 土器類の色調等の観察に際しては、小山正忠ほか編 1995『新版 標準土色帖』16版(財)日本色彩研究所を参考とした。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	2
第2章	水戸塚ノ後1号塚・2号塚	6
第1節	遺跡の位置と環境	6
1	周辺の地形	6
2	周辺の遺跡	6
第2節	発掘調査の成果	8
1	1号塚	12
2	2号塚	12
3	骨蔵器埋納遺構	15
4	焼土遺	15
第3節	奈良・平安時代の土器類	17
1	SK001出土土器	17
2	その他の出土土器類	19
第4節	遺構外出土の縄文土器と石器	20
1	縄文土器	20
2	石器	21
第3章	長者屋敷遺跡(1)～(3)	23
第1節	調査地の概要	23
1	周辺の地形と位置	23
2	周辺の調査成果	23
第2節	調査の概要と成果	23
1	調査の概要	23
2	1次調査の概要	23
3	2次調査の概要	25
4	3次調査の概要	32
第3節	出土遺物	32
1	縄文土器	32
2	須恵器・土師器	33

第4章 矢作牧野馬除土手（大柴十余三・一銀田地点）	34
第1節 位置と周辺の地形、歴史的環境	34
1 位置と周辺の地形	34
2 歴史的環境	34
3 周辺の調査例	37
第2節 調査成果	37
第5章 矢作牧野馬除土手（川上・一銀田地点）	41
第1節 周辺の地形	41
1 周辺の地形	41
第2節 調査成果	41
第6章 一坪田入1遺跡（1）～（4）	46
第1節 調査地の概要	46
1 位置と周辺の地形	46
2 周辺の調査成果	46
第2節 調査の概要と成果	46
1 調査の概要	46
2 1次調査の概要	46
3 2次調査の概要	51
4 3次調査の概要	51
5 4次調査の概要	57
第3節 出土遺物	57
1 縄文土器	57
2 石器類	58
第7章 総括	61
第1節 水戸塚ノ後1号塚・2号塚	61
1 2基の塚について	61
2 骨蔵器埋納遺構（SK001）について	61
3 奈良・平安時代の出土土器について	62
4 縄文土器について	64
第2節 長者屋敷遺跡（1）～（3）	64
第3節 矢作牧野馬除土手（大柴十余三・一銀田地点、川上・一銀田地点）	65
1 今回の調査地点と周辺の調査成果との関連について	65
2 古絵図から見た今回の調査地点	65
第4節 一坪田入1遺跡（1）～（4）	67
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	対象遺跡位置概略図	1	(川上・一銀田地点)	35	
第2図	掲載遺跡の位置と周辺の地形(1)	3	第24図	矢作牧野馬除土手(大栄十余三・一銀田地点)	36
第3図	掲載遺跡の位置と周辺の地形(2)	4	第25図	大栄十余三・一銀田地点 1・2トレンチ	38
第4図	グリッドの呼称例	5	第26図	大栄十余三・一銀田地点 3トレンチ	39
水戸塚ノ後1号塚・2号塚			矢作牧野馬除土手(川上・一銀田地点)		
第5図	水戸塚ノ後1号塚・2号塚周辺の地形と調査遺跡	7	第27図	矢作牧野馬除土手(川上・一銀田地点)	42
第6図	水戸塚ノ後1号塚・2号塚(1)	9	第28図	川上・一銀田地点 1・2トレンチ	43
第7図	水戸塚ノ後1号塚・2号塚(2)	10	第29図	川上・一銀田地点 3・4トレンチ	44
第8図	水戸塚ノ後1号塚・2号塚(3)	11	第30図	川上・一銀田地点 5・6トレンチ	45
第9図	水戸塚ノ後1号塚	13	一坪田入I遺跡		
第10図	水戸塚ノ後2号塚	14	第31図	一坪田入I遺跡(1)~(4)	47
第11図	水戸塚ノ後1号塚SK001遺物出土状況図	16	第32図	一坪田入I遺跡(1)	48
第12図	水戸塚ノ後2号塚(SK002~SK004)	17	第33図	一坪田入I遺跡(1) 調査区北部横断面	49
第13図	奈良・平安時代の出土土器	18	第34図	一坪田入I遺跡(1) 調査区南部横断面	50
第14図	縄文土器・石器	21	第35図	一坪田入I遺跡(2)	51
長者屋敷遺跡			第36図	一坪田入I遺跡(3)	52
第15図	長者屋敷遺跡(1)~(3)	24	第37図	一坪田入I遺跡(3) 調査区横断面・縦断面	53
第16図	長者屋敷遺跡(1)	26	第38図	一坪田入I遺跡(3) SK001~SK003	54
第17図	長者屋敷遺跡(1) SX001 断面図	27	第39図	一坪田入I遺跡(4)	55
第18図	長者屋敷遺跡(2)	28	第40図	一坪田入I遺跡(4) SD001~SD002	56
第19図	長者屋敷遺跡(2) SD001~SD002	29	第41図	縄文土器	57
第20図	長者屋敷遺跡(2) 南区4・6・8トレンチ、北区1トレンチ西壁下層層序	30	第42図	石器	59
第21図	長者屋敷遺跡(3)	31	総括		
第22図	出土土器(縄文土器・須恵器・土師器)	33	第43図	灰輪陶器短頸壺の諸例	63
矢作牧野馬除土手(大栄十余三・一銀田地点)			第44図	矢作牧野馬除土手(あ22)	66
第23図	矢作牧野馬除土手(大栄十余三・一銀田地点)	35	第45図	迅速測量図(45 新東京国際空港) 縮尺約5万分の1	66

表目次

第1表	発掘調査一覧	2	第3表	出土石器の測定値および産地推定結果	60
第2表	遺物観察表	22	第4表	一坪田入I遺跡出土石器属性表	60

図版目次

水戸塚ノ後1号塚・2号塚、長者屋敷遺跡(1)~(3)					
図版1	水戸塚ノ後1号塚・2号塚、長者屋敷遺跡(1)~(3) 周辺航空写真		7	2号塚 調査前風景 北東から	
水戸塚ノ後1号塚・2号塚			8	2号塚 表土除去後 東から	
図版2	1 1・2号塚 調査前風景 北東から		図版3	1 2号塚 土層断面 東から	
	2 1号塚 調査前風景 北東から			2 2号塚 土層断面 南東から	
	3 1・2号塚 表土除去後 南東から			3 1号塚 遺物出土状況 東から	
	4 1号塚 表土除去後全景 西から			4 1号塚 遺物出土状況 東から	
	5 1号塚 土層断面 南東から			5 発掘調査風景	
	6 1号塚 土層断面 東から			6 2号塚 発掘調査風景 東から	
				7 1号塚 発掘調査風景 東から	
				8 発掘調査後の植樹	

図版4 土器

図版5 縄文土器・石器、出土土器

長者屋敷遺跡(1)～(3)

- 図版6 1 (1)SX001 表層除去状況 南から
2 (1)SX001 土層断面A-A' 南東から
3 (1)SX001 土層断面B-B' 南西から
4 (1)SX001 北側地山前検出状況 北東から
5 (2)調査前風景 北西から
6 (2)調査前風景 北区 西から
7 (2)北区 3トレンチ 南東から
8 (2)北区 14トレンチ 南西から

- 図版7 1 (2)北区 SD002(11トレンチ) 北から
2 (2)北区 18トレンチ 南西から
3 (2)北区 SD002(20トレンチ) 南東から
4 (2)南区 7トレンチ 東から
5 (2)南区 10・12トレンチ 北から
6 (2)227DS-92付近 下層土層 北東から
7 (2)東方の塚 西から
8 (2)東方の塚上の馬頭観音

- 図版8 1 (2)調査風景 北区 北東から
2 (2)調査風景 南区 北から
3 (3)調査前風景 北側 南西から
4 (3)調査前風景 北東から
5 (3)調査前風景 南側 北東から
6 (3)調査前風景 西から
7 (3)2トレンチ 東から
8 (3)3トレンチ 南から

- 図版9 1 (3)6トレンチ 東から
2 (3)9トレンチ 南西から
3 (3)SD001(9トレンチ) 北から
4 (3)10トレンチ 北から
5 (3)11トレンチ 北西から
6 (3)調査風景
7 (2)出土遺物

矢作牧野馬除土手、一坪田入I遺跡(1)～(4)

図版10 矢作牧野馬除土手、一坪田入I遺跡(1)～(4)
周辺航空写真

矢作牧野馬除土手(大栄十倉三・一畝田地点)

- 図版11 1 調査前風景 南から
2 調査前風景 北から
3 1トレンチ 南西から
4 2トレンチ 南西から
5 2トレンチ 西側溝 南東から
6 3トレンチ 南東から
7 3トレンチ 東側溝 南から

8 調査風景

矢作牧野馬除土手(川上・一畝田地点)

- 図版12 1 調査前風景 南土手 東から
2 1トレンチ 南東から
3 2トレンチ 北から
4 3トレンチ 北から
5 4トレンチ 北東から
6 5トレンチ 北東から
7 6トレンチ 北東から
8 4トレンチ 調査風景

一坪田入I遺跡(1)～(4)

- 図版13 1 (1)全景 西から
2 (1)全景 南から
3 (1)全景 南から
4 (1)調査風景 南東から
5 (1)調査風景 南東から
6 (2)34AC-10-11 北から
7 (2)34AC-10-11 北西から
8 (2)34AC-10-11 南から

- 図版14 1 (3)調査区遠景 西から
2 (3)調査区近景 東から
3 (3)2トレンチ 北から
4 (3)1・3トレンチ 北から
5 (3)9トレンチ 南から
6 (3)13・20トレンチ 南から
7 (3)16トレンチ 南から
8 (3)19トレンチ 南から

- 図版15 1 (3)23トレンチ 南から
2 (3)SK001 東から
3 (3)SK003 南から
4 (3)SK003 土層断面 北から
5 (3)SK002 南から
6 (3)調査風景 南東から
7 (4)調査前風景 南西から
8 (4)調査区遠景 北西から

- 図版16 1 (4)調査前風景 北西から
2 (4)2トレンチ 南から
3 (4)3トレンチ 南から
4 (4)5トレンチ 南から
5 (4)6トレンチ 南から
6 (4)SD001(7トレンチ)南西から
7 (4)SD002(10トレンチ)南西から
8 (4)調査風景

図版17 縄文土器・石器類

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1図、第1表）

首都圏中央連絡自動車道(以下「圏央道」という。)は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善・沿線都市間の連絡強化などを目的として都心から半径40～60kmの範囲に国土交通省が計画した、総延長約300kmの環状の高規格幹線道路である。西方から神奈川県・東京都・埼玉県・茨城県の主要な沿線都市を通して千葉県へ至る。千葉県内の区間は平成4年度から事業化され、これまでに神崎IC～大栄JCT(常総国道事務所)、東金IC～茂原・長南ICおよび茂原・長南IC～木更津IC間(千葉国道事務所及び東日本高速道路株式会社)の工事は終了し開通している。当財団ではこれらに伴う埋蔵文化財発掘調査の結果、令和5年3月までに42冊の報告書を刊行した¹⁾。

大栄～横芝間の18.5kmに関しては、千葉国道事務所が平成26年3月に事業地における埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会へ協議を依頼した。その結果、同年3月以降、埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関で協議を重ねたが、事業計画の変更が不可能としてやむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、調査を公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになった²⁾。

なお、発掘調査の委託契約は、平成26年度～平成29年度が国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、平成30年度からは東日本高速道路株式会社との間で締結され、平成26年度に開始した発掘調査は、現在も継続中である。

本書では5地点の調査成果を報告する。平成29年度に調査を実施した水戸塚ノ後1号塚・2号塚は圏央道(大栄～横芝)区間の中央よりやや南にあり、平成28・29年度に調査を実施した長者屋敷遺跡はそのすぐ北に位置する。同区間の北部に位置するのが、それぞれ2市町にまたがる令和2年度に調査を実施した矢作牧野馬除土手2箇所(大栄十倉三・一銀田地点、川上一銀田地点)になり、さらにその北に位置するのが、平成28年度～令和2年度にかけて調査を実施した一坪田入I遺跡(1)～(4)になる。

各遺跡の発掘調査の調査組織及び担当者等については、第1表に示した。整理作業における調査組織及び担当者等は、以下のとおりである。

令和3年度

文化財センター長 福田 誠

主幹兼調査第一課長 加納 実



第1図 対象遺跡位置概略図

第1章 はじめに

担当職員 主任上席文化財主事 今泉 潔

内容 記録整理～原稿の一部

令和5年度

文化財センター長 木原高弘

調査第一課長 大内千年

担当職員 主任上席文化財主事 渡邊修一・今泉 潔

内容 原稿の一部～報告書刊行

2 調査の方法（第2～4図、第1表）

圏央道(大栄～横芝)建設予定地内に所在する遺跡群の調査は、世界測地系(平面直角座標第Ⅱ系)に基づく方眼網で覆い、40m×40mの区画を大グリッドとした。成田市大栄JCT付近のX=20,920,000m・Y=+50,520,000mの地点を起点(1A-00)とし、南へ算用数字で1・2・3、東へはアルファベットでA・B・C…Z・AA・AB…と呼称した。そして両者を組み合わせて大グリッド名とし、たとえば199CWなどとした。また大グリッド内はさらに4m方眼で100分割して小グリッドとした(第4図)³⁾。それらの呼称は北西隅を00

第1表 発掘調査一覧

水戸塚ノ後1号塚・2号塚

年度	調査回数	対象面積 (m ²)	確認調査面積(m ²)		本調査面積(m ²)		調査期間	担当者	調査課長	文化財 センター長
			上層	下層	上層	下層				
平成29年度		塚2基(810)			810		H30.01.09～H30.03.05	伊木雅人	韓原孝之	上守秀明

長者屋敷遺跡(1)～(3)

年度	調査回数	対象面積 (m ²)	確認調査面積(m ²)		本調査面積(m ²)		調査期間	担当者	調査課長	文化財 センター長
			上層	下層	上層	下層				
平成28年度	(1)	299	299		90		H28.10.03～H28.10.11	沖松信隆	韓原孝之	上守秀明
平成29年度	(2)	5,402	367/5,402	32/1,280	0	0	H29.09.26～H29.10.31	井上哲朗	韓原孝之	上守秀明
平成29年度	(3)	2,065	209/2,065	0	0	0	H29.11.01～H29.11.17	井上哲朗	韓原孝之	上守秀明

矢作牧野馬除土手(大栄十倉三・一掘田地点)

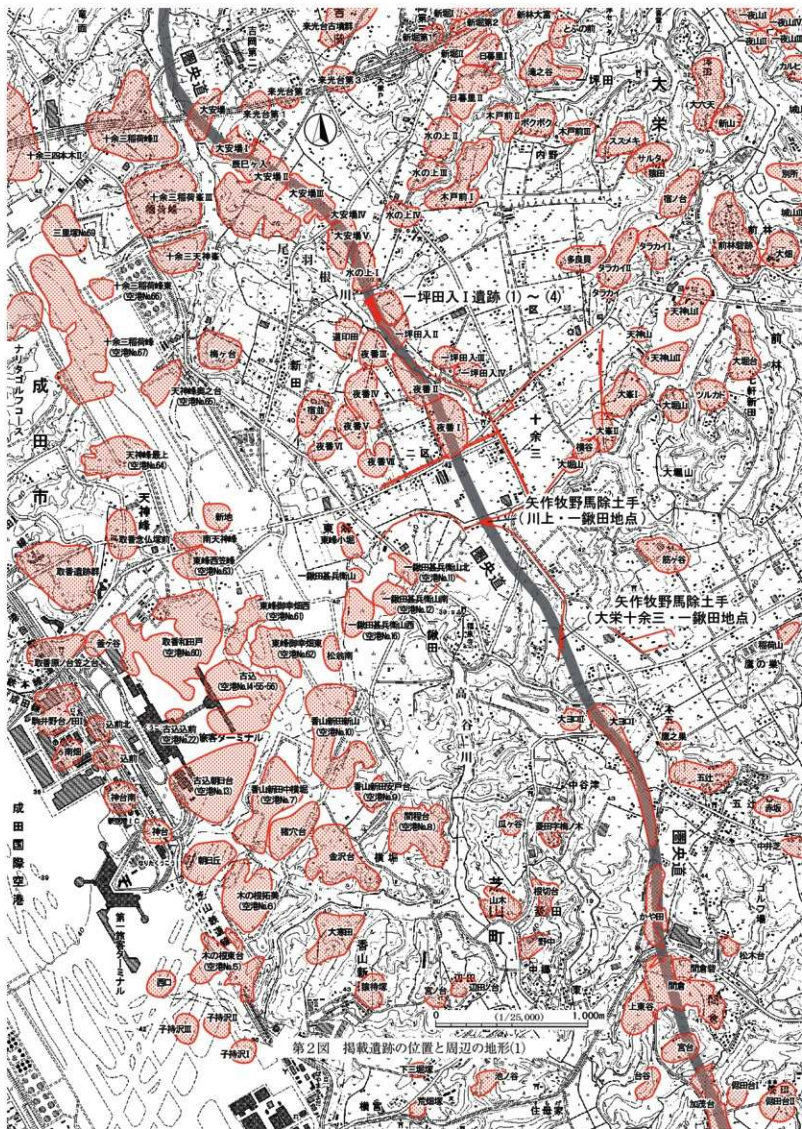
年度	調査回数	対象面積 (m ²)	本調査面積(m ²)		本調査面積(m ²)		調査期間	担当者	調査課長	文化財 センター長
			上層	下層	上層	下層				
令和2年度 (成田市分)		野馬除土手 2倉(642)					R02.10.02～R02.10.12	井上哲朗	田島 新	福田 誠
令和2年度 (幸占町分)		野馬除土手 1倉(821)					R02.10.02～R02.10.12	井上哲朗	田島 新	福田 誠

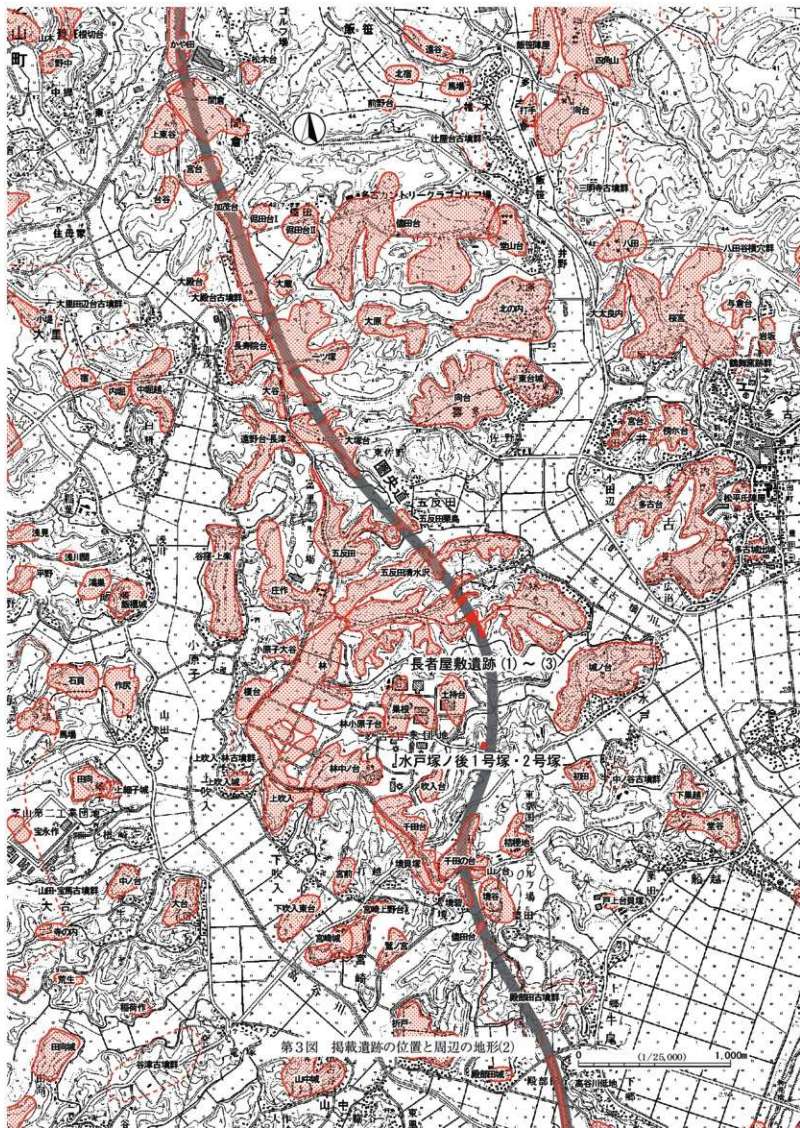
矢作牧野馬除土手(川上・一掘田地点)

年度	調査回数	対象面積 (m ²)	確認調査面積(m ²)		本調査面積(m ²)		調査期間	担当者	調査課長	文化財 センター長
			上層	下層	上層	下層				
令和2年度 (成田市分)		野馬除土手 2倉(2,058)					R02.10.22～R02.11.06	井上哲朗	田島 新	福田 誠
令和2年度 (幸占町分)		野馬除土手 1倉(520)					R02.10.22～R02.11.06	井上哲朗	田島 新	福田 誠

一坪田入1遺跡(1)～(4)

年度	調査回数	対象面積 (m ²)	確認調査面積(m ²)		本調査面積(m ²)		調査期間	担当者	調査課長	文化財 センター長	
			上層	下層	上層	下層					
平成28年度	(1)	3876		372	72	0	0	H28.09.28～H28.10.26	岡田誠哉	韓原孝之	上守秀明
平成30年度	(2)	80	80/80	4/80	0	0	0	H30.11.08～H30.11.14	赤川道行	韓原孝之	高立 桂
令和元年度	(3)	3,078	276/3,078	200/3,078	0	0	0	R01.06.06～R01.07.31	坂本正徳	田島 新	高立 桂
令和2年度	(4)	974	113/974	40/974	0	0	0	R03.02.02～R03.02.12	井上哲朗	田島 新	福田 誠

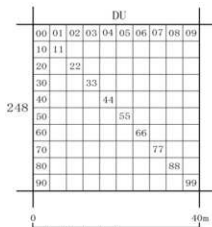




とし、そこから東へ01・02…、南へは10・20…と割り振り、南東隅が99となるようにした。これを大グリッドの呼称と組み合わせで、199CW-55などのように表記した。この呼称方法は調査時に作成した図面や出土遺物の位置に関する記録類に使用した。

調査前には測量業者に基準点測量を委託して現地に基準杭を打設し、現地調査はすべてこの基準点に則して記録作成を行った。なお水戸塚ノ後1号塚・2号塚と矢作牧野馬除土手の調査では、調査対象が地上構築物のため調査に先立って、周辺も含めた地形測量を実施した。

掲載した対象遺跡の周辺の地形や歴史的環境等に関する記述については、調査地点がそれぞれ離れるために、個々の調査地の章立てのなかで行うこととした。



第4図 グリッドの呼称例

- (財)千葉県文化財センター、(財・公財)千葉県教育振興財団 2004～2023『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書』1～42
- 圏央道(大栄～横芝)区間事業地内の38遺跡を北から順に列記すると、以下のとおりである。大安場Ⅰ遺跡、辰巳ヶ入遺跡、大安場Ⅱ遺跡、大安場Ⅲ遺跡、大安場Ⅳ遺跡、大安場Ⅴ遺跡、水ノ上Ⅰ遺跡、一坪田入Ⅰ遺跡、一坪田入Ⅱ遺跡、夜番Ⅱ遺跡、夜番Ⅰ遺跡、矢作牧野馬除土手(3地点)、大ヨロⅠ遺跡、かや田遺跡、間倉遺跡、宮台遺跡、加茂台遺跡、一ツ塚遺跡、大塚台遺跡、五反田栗島遺跡、五反田清水沢遺跡、長者原敷遺跡、水戸塚ノ後1号塚・2号塚、千田の台遺跡、境岩跡、豊田台遺跡、殿部田古墳群、高谷川低地遺跡、向田城跡、木戸台遺跡、吹揚遺跡、大山遺跡、山武焼山貝塚、遠山天ノ作遺跡、四ツ塚遺跡
- この呼称方法は公共測量標準図式第84第4項5で定める、地図情報レベル500における区画番号の設定と同様の手法によるものである。

第2章 水戸塚ノ後1号塚・2号塚

第1節 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形（第3・5・6図、図版1）

調査地は千葉県香取郡多古町水戸塚ノ後1377-1の一部に所在し、1級町道水戸・千田線から多古工業団地への進入路となる多古1270号線の北側台地上に位置する。町道と調査地との比高は約20mになる。なお町道は、かつての往來の線形を直線的に整えたものである。千葉県北部には広大な下総台地が広がり、台地東部は北総台地と呼ばれ、ちょうど新東京国際空港地域を分水嶺として、北は利根川に流入する大小の河川の開析により支谷が複雑に入り込み、南は九十九里浜に注ぐ幾筋もの河川が平行して流れるため、幅の狭い樹枝状に開析された台地が櫛の歯状に延びる。

調査地が位置する台地は、南流して栗山川に注ぐ2本の河川によって南北に細長く開析され、西側が高谷川で、東側が多古橋川になり、多古橋川が栗山川の上流側になる。一帯の台地は瘤が連なるやせ尾根が連続し、平坦面がほとんどない。調査地はその一つのほぼ頂部に位置する。そして東側の多古橋川と栗山川に挟まれた水田地帯には、鳥状になった独立台地があり、そこには湿地帯を天然の要害とした志摩城（鳥城）が築かれ、キリシタンとともに江戸幕府から弾圧された、日蓮宗不受不施派の成等山正覚寺がある。『多古町土地法典』によれば調査地の南100mの地点に「塚ノ前」という小字名を確認できるが、調査対象となった塚との関係については不明である。

なお調査対象地は宗教法人常照山法眼寺の所有地だったので、事前に寺で聞き取り調査を行ったところ、塚が2基あることは知られており、いわれまでは不明だが、別名を「題目塚」ということだった。

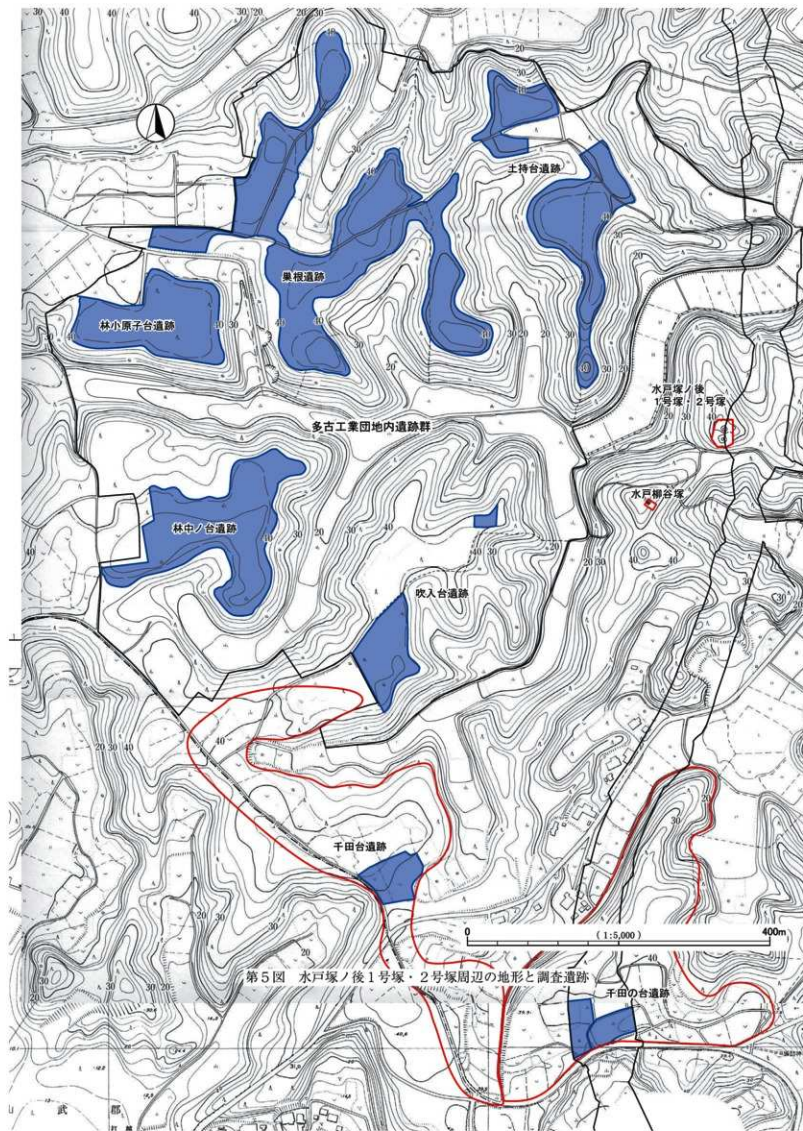
2 周辺の遺跡（第1・3・5・6図）

第5図は、県遺跡分布地図¹⁾に基づき、周辺の主な遺跡の位置・範囲を示したものである。

水戸塚ノ後1号塚・2号塚周辺の遺跡の調査成果としては、調査地のすぐ西側に位置する多古工業団地内遺跡群の5遺跡がもっともまとまった調査成果になる²⁾。この調査成果をもとに、今回の調査成果と関連する事柄について以下で取り上げおきたい。

縄文時代の遺跡としては、高谷川流域・多古橋川流域の兩岸に点在し、多古工業団地内遺跡群の5遺跡からは早期(熱糸文系・沈線文系・条痕文系)～晩期までの土器片が出土している。ほとんどが遺構を伴わず、いわゆる包含層からの出土となる。多数を占めるのは、早期の土器群で多型式にわたり、沈線文系では田戸上層式、三戸式は沈線、条痕文系では子母口式、熱糸文系では井草式・夏島式・稲荷台式・花輪台式があり、充実している。いっぽう中・後期は少ない。なお林中ノ台遺跡で千網式が、吹入台遺跡で荒海式の小片が出土しており、注意を引く。遺構としては、土持台遺跡で5基の炉穴がかなり距離をおいて弧状にみつかっている以外は、すべて陥穴になる。林小原子台遺跡で1基、栗根遺跡で10基、土持台遺跡がややまとまっていて20基、林中ノ台遺跡・吹入台遺跡で各4基となり、生活痕跡はほとんどなく、一帯がおもに狩猟場であったことをうかがわせる。

その後、土地利用の形跡はなく、古墳時代になると土持台遺跡の中央部に、5～6世紀にかけての竪穴住居が3軒見つかかり、後期になると台地のさらに広い範囲に展開する。また林中ノ台遺跡では後期と考えられる、ほとんど間溝だけの円墳が2基見つかっている。集落としては非常に希薄で、7世紀前半には集



第5図 水戸塚ノ後1号塚・2号塚周辺の地形と調査遺跡

落はいったん終焉を迎える。8世紀になると、吹入台遺跡・土持台遺跡で集落の萌芽が見られ、あわせて墓域も形成され、林小原子台遺跡・果根遺跡・土持台遺跡で方形周溝状遺構と骨蔵器を伴う埋納遺構がみつまっている。方形周溝状遺構には有天井の埋葬施設や石櫃を伴う例がある。9世紀以降、果根遺跡・土持台遺跡・吹入台遺跡などで細々と集落は展開するが、10世紀中葉には堅穴住居そのものが確認できなくなる。吹入台遺跡では3間×2間を中心とした側柱建物がまともみつかり、ほかの遺跡とはかなり様相が異なっているのが注意を引く。また土持台遺跡では建築方位を斜めに振った4間×3間で、平面規模がほぼ正方形の側柱建物が1棟みつまっている。時期を特定できる資料が出土していないので詳細は不明だが、吹入台遺跡以外では唯一の掘立柱建物になる。

さらに多古工業団地内遺跡群の南に近接する千田台遺跡³⁾や千田の台遺跡⁴⁾でも、8～9世紀にかけての集落がまとも見つまっている。千田の台遺跡は当該事業の一環として調査が実施され、7世紀末～8世紀初めが集落の一つのピークで、9世紀後半～10世紀にかけて次のピークを迎えて終焉することがわかった。また千田台遺跡では8～10世紀にかけての集落がやや散漫とした状態で展開する。なおこの2遺跡からは墓制に関わる遺構は未検出なので、近距離に位置する多古工業団地内遺跡群の様相とはかなり異なるといえよう。

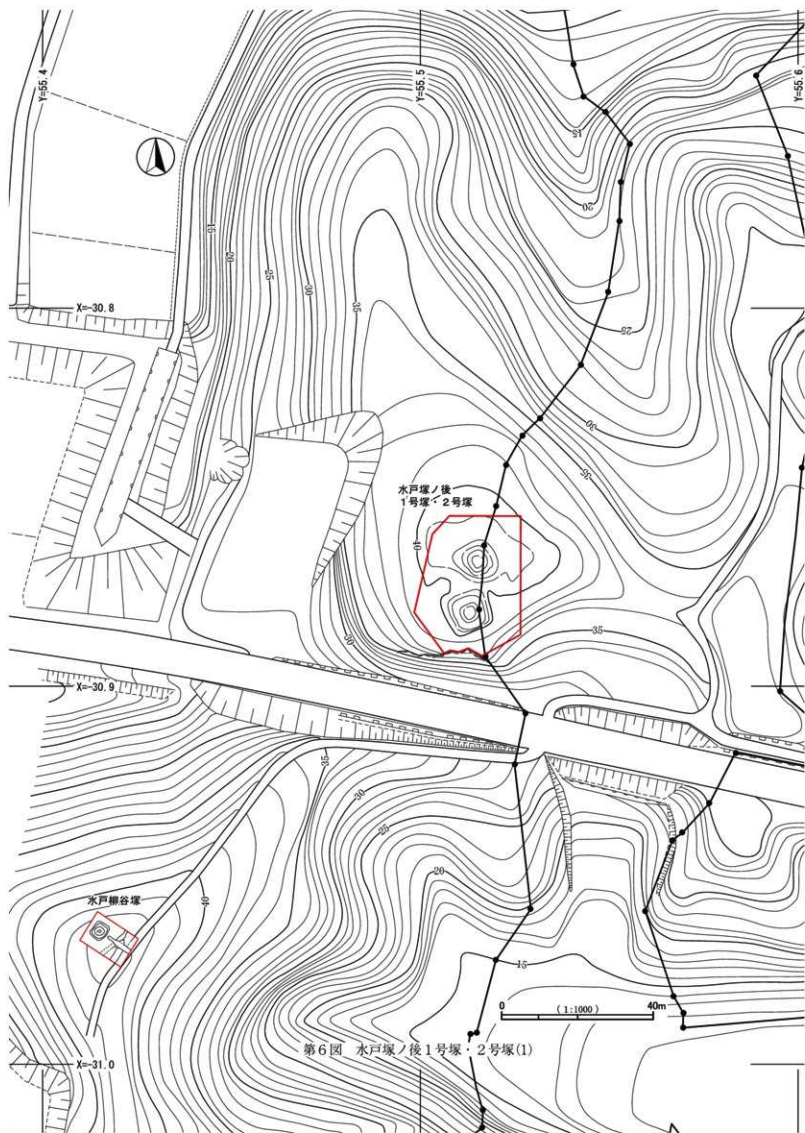
中世以降については、千田の台遺跡でその一郭を台地整形区画し、中世～近世初頭の地下式坑や井戸などをはじめとして多数の土坑が見つまっている。土坑の中には牛や馬を埋葬したものもあり、中世の千田庄との関連も取り沙汰されている。また調査地から南西120mの地点に位置する水戸柳谷塚が調査されている⁵⁾。上半部が円形に推定されている4.5m×3.5mの方形の塚で、高さ約70cmの低丘の塚である。出土遺物等もなく、構築時期については不明である。なお水戸塚ノ後1号塚・2号塚の調査で盛土中に確認できた宝永の火山灰層については、ここでは特に触れられていない。

第2節 発掘調査の成果

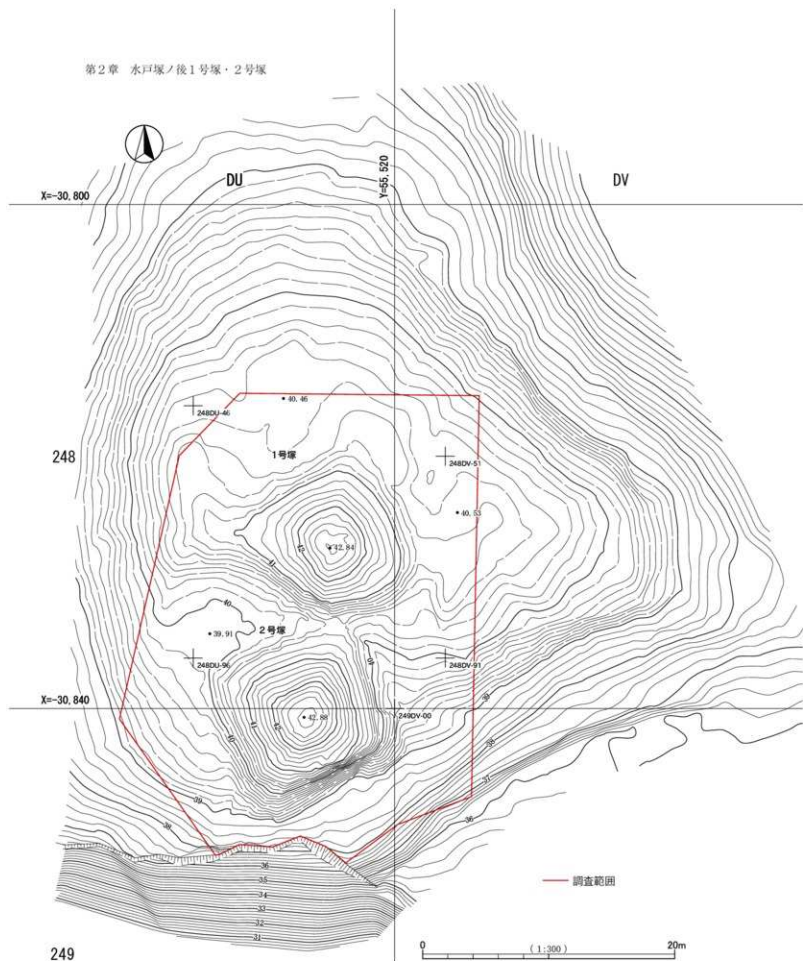
塚2基は台地先端部に南北に並んで位置し、北側に1号塚、南側に位置する塚を2号塚として調査を実施した。また調査途中で新たに見つかった、骨蔵器埋納遺構や焼土を伴う土坑については、整理作業段階で新たに遺構の略号と通し番号を付した。骨蔵器埋納遺構は調査時に1号塚0001としていたものをSK001とし、2号塚南側の裾部でみつかった2箇所3基の焼土遺構(001-002)については、新たに西から1基ずつ順にSK002、SK003、SK004とした。なお土器出土集地点については、該当する土器を特定できないなど実態がよくわからないので、特に遺構の略号は付していない。

なお2基の塚は事業地内に約半分がかり、残り半分が事業地外に法面として残ることになる。工事計画では周辺は深くオープンカットすることになっていて、塚の盛土部分については養生の対象にはなっていない。そのため調査として残る塚半分が将来的に崩落する危険があることから、事業者・地権者の了解を得て、塚2基の全域を調査することとなり、調査対象面積は810m²となった。調査対象範囲全域が山林のため、調査に先立って事業者が森林法第10条の8第1項の規定により「伐採及び伐採後の造林の届出」を町に届け出て、全域の伐木を行った。発掘調査終了後に、対象範囲内にクスギを130本植栽した。

調査は塚の形状にあわせて、塚頂部をとるように、それぞれ土層観察用のセクションベルトを十字に設定した。実際の調査にあたってはベルトを残し、盛土の層位を確認しながら掘り下げ、適宜、断面図を作成し、写真撮影を行い、記録の終了したところからベルト自体も掘り下げていった。傾斜地の掘土には



第6図 水戸塚ノ後1号塚・2号塚(1)



第7図 水戸塚ノ後1号塚・2号塚(2)

排土用塩ビ製シューターを使い、運搬には不整地走行車とバックホウを使って作業の効率化を図った。そして旧表土面、もしくはそれに相当する面まで掘り下げた段階で調査を終了した。実際の調査にあたっては、調査地が高台にあるため、往来については斜面に仮設の昇降階段を敷設した。

1 1号塚（第7～9図、図版2・3）

248DU-68グリッドを中心に位置する。南側の塚裾部が2号塚の北側裾部と接し、塚頂部どうしの間隔は13.5mになる。平面形態は方形を基調とするが、東西方向に間延びした変形ひし形になる。長軸となる東西方向の長さは16.3mで、短軸となる南北方向の長さは14.5mである。長軸の偏角はN-83°-Wで、短軸の偏角はN-9°-Eになり、軸線はほぼ直交する。頂部の標高は42.84mで、塚裾部との比高は約2.2mになる。台地の谷間となる南側の2辺で、塚下半部の等高線の間隔が密になる傾向があるが、全体に顕著な改変等の形跡はない。なお調査結果でもそうだったが、塚の裾部をめぐる溝等の痕跡は確認できず、段築成の形跡もなかった。また何かしらの埋納をうかがわせる痕跡も確認できなかった。

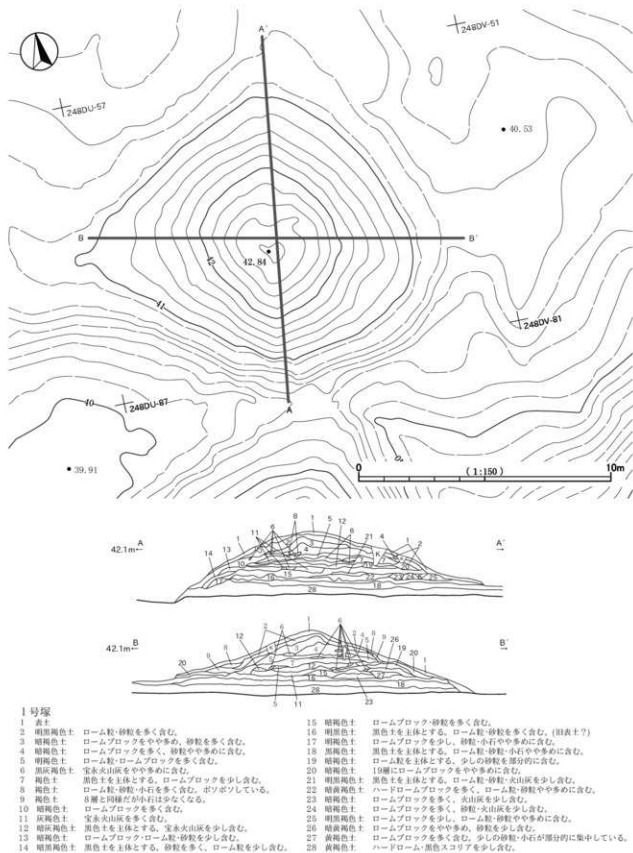
盛土は断面で観察する限り、ロームブロック・ローム粒を含む褐色土・暗褐色土・黒褐色土系の色調の土を、比較的レベルを保ちながら積んでいる。ただし塚周囲には、ローム土を供給したような掘り込み等は特に確認できなかったので、やや離れた地点から供給されたのかもしれない。なお盛土の途中で平坦面を作ったような形跡はなかったので、一気に盛土したのであろう。盛土中には富士山の宝永噴火（宝永4（1707）年）による降灰と考えられる層があり、基本的にはブロック状だが面的な広がりを確認できた部分もある。これによって塚構築の上限を押さえることができる。なお調査時の所見では、下層にはほぼ水平に堆積する明黒色土（16）を旧表土層と考えているが、さらにその下面にも黒褐色土（18）がほぼ水平に堆積しているので、堆積状況からこれらが旧表土層になり、層厚が約30cmの旧表土層を形成していたのであろう。これに従えば、塚の旧表土面からの高さは約1.8mになる。

なお塚構築以前の遺構として、塚の中心より北側の旧表土面上には骨蔵器埋納遺構（SK001）があり、南側の塚裾部近くには土器出土集中地点がある。

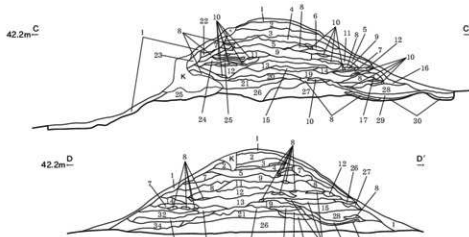
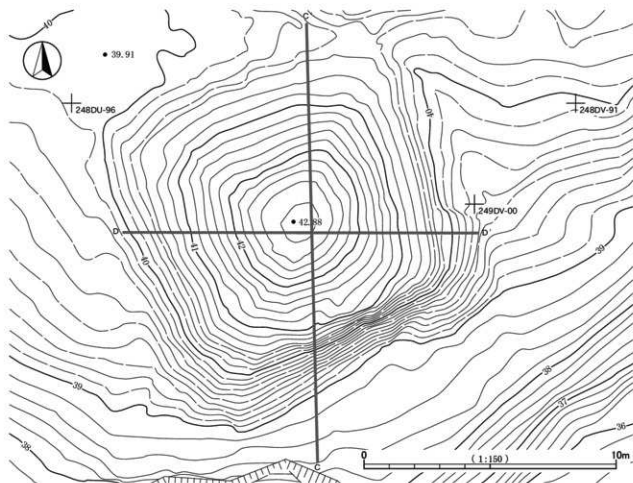
2 2号塚（第7・8・10図、図版2・3）

249DU-08グリッドを中心に位置する。平面形態は四隅がかなり丸みを帯びているものの、方形塚としての形状を比較的良好にとどめている。塚裾部で東西長は12.3m、南北長は11.5mになり、やや東西方向に長い。南北方向の偏角はN-18°-Wになる。塚の南東辺は台地斜面部の等高線の流れに平行するので、塚の軸線が台地の形状に制約されていたことをうかがわせる。1号塚の短軸の偏角はN-9°-Eなので、基準となる軸線どうしに関連性は見いだせない。頂部の標高は42.88mで、裾部との比高は約2.9mになり、塚頂部の標高が1号塚とほぼ同じにも関わらず、2号塚が1号塚より台地先端部に位置することもあって、見かけの高さは2号塚が勝り、断面形状も整った低い山形をなしている。なお南辺下半の等高線がかなり密に立てこんでおり、いっぽうそのすぐ南の台地肩部は、その部分だけ等高線の間隔が広がっている。これは塚南側の盛土の一部が、何らかの理由でその下方の台地肩部に流出したことをうかがわせる。それ以外にとくに塚の形状を大きく改変したような形跡は確認できなかった。1号塚同様、塚の裾部をめぐる溝等の痕跡は確認できず、段築成の形跡もなかった。

盛土は、1号塚の盛土と似た性状のロームブロック・ローム粒を含む褐色土・暗褐色土・黒褐色土系の色調の土になる。また宝永の火山灰土も同じような堆積状況で確認できるので、2基の塚は近接していることもあって、相前後して構築されたのであろう。ただし1号塚と近接していても、1号塚で確認できた旧



第9図 水戸塚ノ後1号塚



2号塚

- | | | |
|----------|----------|-----------------------------|
| 1 表土 | 18 暗黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |
| 2 暗褐色土 | 19 暗褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |
| 3 暗褐色土 | 20 暗褐色土 | ロームブロックは全く食まず。ローム粒・砂粒を多く含む。 |
| 4 暗褐色土 | 21 黄褐色土 | ローム粒・砂粒を主体とする。 |
| 5 暗褐色土 | 22 黄褐色土 | 黒色土を主体とする。砂粒・小石を多く含む。 |
| 6 黒褐色土 | 23 黒褐色土 | 2層ローム粒を少し含む。 |
| 7 黒褐色土 | 24 暗褐色土 | 黒色土を主体とする。ロームブロック・砂粒を少し含む。 |
| 8 黒褐色土 | 25 暗褐色土 | ロームブロック・砂粒を多く含む。 |
| 9 暗褐色土 | 26 暗褐色土 | ロームブロックを多く。火山灰を少し含む。 |
| 10 黒灰土 | 27 暗黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |
| 11 暗黄褐色土 | | 少しの砂粒が部分的に集中している。 |
| 12 暗黄褐色土 | 28 暗褐色土 | ロームブロックを主体とする。砂粒を中や多めに含む。 |
| 13 暗黄褐色土 | 29 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒・砂粒を少し含む。 |
| 14 暗褐色土 | 30 暗褐色土 | ローム粒・砂粒を多く含む。若干の粘性あり。 |
| 15 暗黄褐色土 | 31 暗褐色土 | 火山灰は少なめ。ロームブロックを多く含む。 |
| 16 暗黄褐色土 | 32 暗黄褐色土 | ロームブロックを多く。砂粒を少し含む。 |
| 17 暗黄褐色土 | 33 黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |
| | 34 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒・砂粒を多く含む。 |

第10図 水戸塚ノ後2号塚

表土層に相当する層については、調査時の所見では、塚基底部近くの土層と地山本来の層位との判別が難しかったらしく、2号塚では確認できていない。あるいは塚の立地が台地の先端部に近いこともあって、地山そのものが本来のプライマリーな堆積状況とは異なっていた可能性もある。なお塚南側の裾部で、台地の肩にあたる部分で2箇所3地点の焼土遺構(SK002・SK003・SK004)を確認している。

3 骨蔵器埋納遺構(SK001)

SK001 (第11図、図版3)

248DU-69に位置する。長径44cm、短径41cmの播鉢状の掘方に、土師器の甕・蓋を組み合わせて骨蔵器として埋納した遺構である。骨蔵器内部まで確認面からの深さは25cmになり、掘方底面はⅢ層の中位に達する。掘方と骨蔵器のあいだは木炭を主体とする土で充填していた。据えた掘方規模は0.40～0.48m、確認面から底面までの深さは約25cmである。埋納手順については、以下のとおりと推定してみた。

出土状況図や写真から判断すると、まず土坑掘方に3の土師器甕を内容器として正位で埋置し、その時点で前後はわからないが焼骨を納骨し、その上に2の土師器盤を裏返して蓋をする。そして1の土師器甕の口径は2の土師器盤より小さいので、1の土師器甕の器体全体をあらかじめ大きめの破片に打ち欠いておく。甕は基本的にはひっくり返した位置関係にして、蓋の直上には甕の底面を中心とした破片をのせ、そこから下方へは3の甕側面の周囲に残りの破片を貼り付けたようである。ただし口縁部の破片のなかには、口縁端部を上向きにした状態で出土した破片もあり、この工程は一部では甕本来の位置関係とは関係なく行われたようである。このように2の蓋の上面にさらに甕底部をのせていたことになるので、内容器は二重の蓋に覆れていたことになる。そしてその後、掘形と土器の間に、木炭を含む土砂を充填して埋納行為を完了したと推定する。

4 焼土遺構(SK002～SK004)

SK002 (第8・12図)

249DU-16に位置し、東側にはSK003が近接する。平面形態は南北に長い長円形で、長径65cm、短径50cmで、深さは13cm程度と浅い。主軸をN-15°-Wにとり、主軸は等高線にやや直交する。掘り込みはなだらかで、はっきりとした壁の立ち上がりはない。埋土はローム粒に少量の焼土粒と炭化物が混在する。出土遺物は特になし。なお平面図では遺構の微地形における立地を示すために、現表の地形測量図を重ねて図示している。以下、同じである。

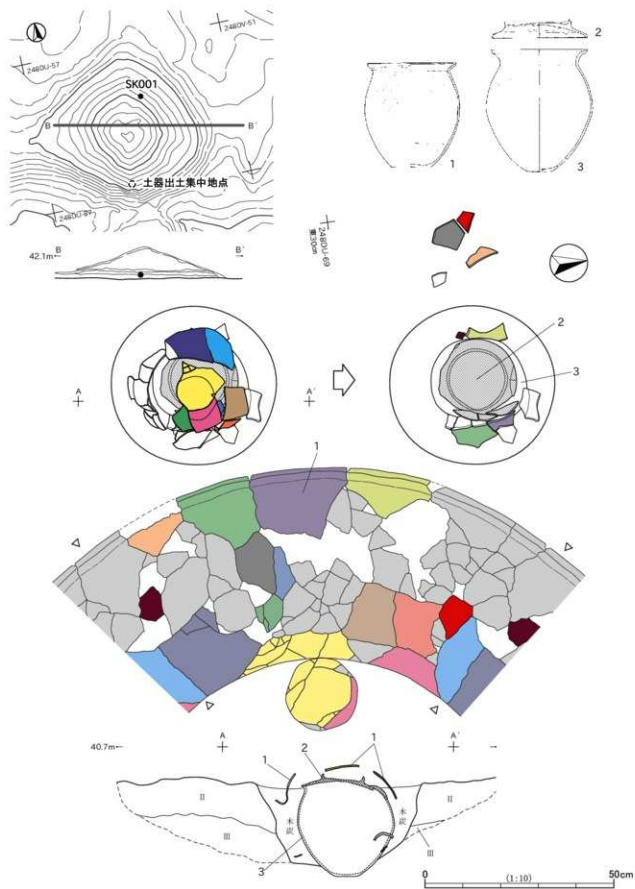
SK003 (第8・12図)

SK002とは15cmほどの間隔をあけて近接する。SK002よりも丸みが少なく、やや方形を基調とした平面形態になる。長径80cm、短径58cmで、深さは22cmほどあり、SK002よりも一回り大きい土坑になる。主軸をN-17°-Wにとり、SK002とはほぼ平行する主軸になる。底面は平坦に整え、壁の立ち上がりは比較的明瞭である。埋土は調査時の所見ではSK002よりも、焼土粒・炭化粒を含む割合が多くなる。ローム粒に少量の焼土粒と炭化物が混在する。出土遺物は特になし。

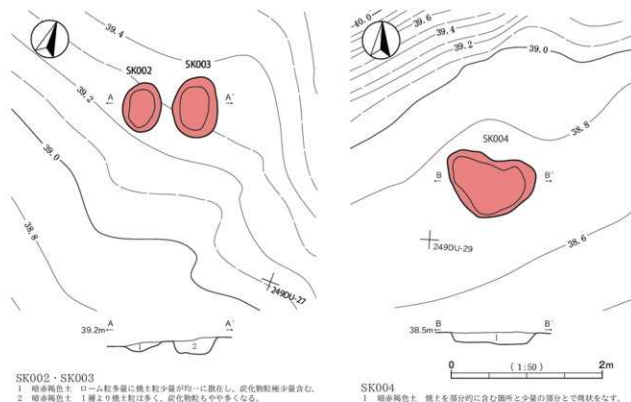
SK004 (第8・12図)

2号塚南辺中央の裾部に位置し、249DU-19にある。SK002・SK003とは約11m離れる。平面形態は隅丸三角形を基調とし、一部が少しくびれることから、横長のハート形にみえる。長軸119cm、短軸78cmで、深さは15cmほどと浅い。短軸の主軸はN-9°-Eになる。底面は比較的平らだが、壁の立ち上がりが不明瞭な掘り込みである。埋土は焼土を斑状に含む。特に出土遺物はない。

第2章 水戸塚ノ後1号塚・2号塚



第11図 水戸塚ノ後1号塚 SK001 遺物出土状況図



第12図 水戸塚ノ後2号塚 (SK002～SK004)

第3節 奈良・平安時代の土器類

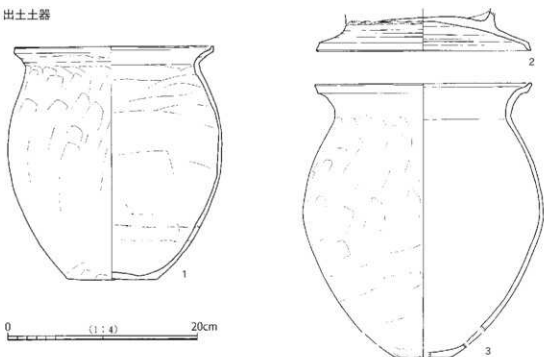
1 SK001出土土器 (第11・13図、図版4、第2表)

1～3の土器器が骨蔵器埋納土坑から、組み合う形で出土したものである。1は最大径が器高の半分ほどにあり、長胴甕という基本的な器形は3と同じだが、底径が口径の半分近くあり、安定感がある。口縁部の立ち上がりは3よりも低く、「く」の字状に開きながら先端部は短く直立して、受け口状になっている。体部外面は上半部を縦方向のヘラズリで、下半を斜め方向のヘラズリで調整している。内面は上部をヘラナデし、それ以下をナデ調整している。全体に薄手のつくりである。

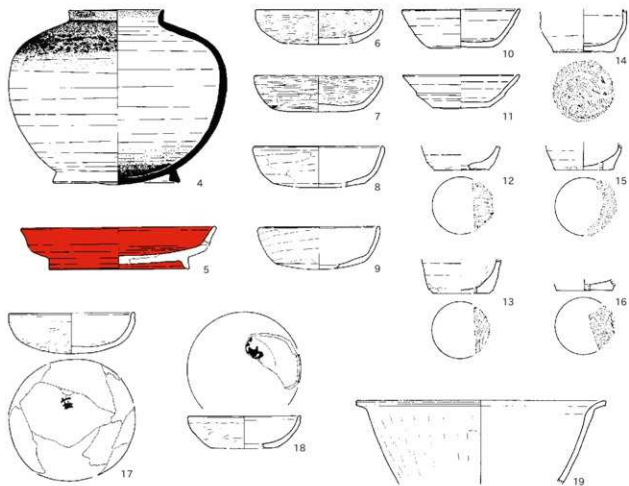
2は土器器の高台付甕である。8世紀中葉～9世紀後半にかけて霞ヶ浦北方の須恵器諸窯でも生産された器種で、その器形を土器器に写したものと考えられる。埋納時には裏返して内容器3の蓋としているので、図では上下を反転して示している。ロクロ成形で、底部外面の中央部にわずかに静止糸切りの痕跡を残す。内面は中央から緩やかに傾斜しながら口縁部に至り、端部がわずかに屈曲して外反する。内面に使用痕跡はほとんど確認できないが、中央付近に器面のはぜた痕跡が少しある。口径は22.7cmと大きく、3の甕の口径とはほぼ同じである。口縁部に亀裂や器面の剥落箇所が目立ち、あるいは甕にかぶせたことに起因するのかもしれない。外面は口縁部の立ち上がりに明瞭な稜をつくる。高台部は器体からすっと立ち上がる形状だが、高台の全周を打ち欠いているので、本来の高さはわからない。なお打ち欠きの単位はほとんど不明瞭だが、一部に打ち欠いた後に打ち欠き面を擦って平滑にした痕跡を残す。

3は骨蔵器の内容器で、土坑から正立状態で出土した。最大径が器高の中ほどにあり、底径が口径に対してかなり小さく、ややずんぐりとした不安定な印象を受ける。体部にやや丸みをもつ長胴甕である。調査時に土坑を半載した状態では、口縁部から底部まで1個体の器体として確認し、出土状況図はそれを図

SK001 出土土器



その他の出土土器



第13図 奈良・平安時代の出土土器

化したものである。しかし土器自体が薄く脆弱で、土圧の影響もあってか細かい亀裂も多く入っており、取上げ時にほとんどが破片に砕けてしまった。そのため整理作業の接合では微妙な接合面を探すのに難渋し、破面接合できない破片も少なからずあった。とくに底部に関しては体部と直接接合する破片を見いだせなかったため、その部分は出土状況図等も参考にしながら推定して図示した。口縁部は外反して端部に稜をつけてさらに外反して受け口状になっている。口縁部はヨコナデで、体部はヘラケズリで仕上げ、上半を縦方向、下半を斜め方向に削る。最終的な調整は器体がかなり乾いた段階で行ったようで、器面に鈍い光沢があり、部分的に面取り風の稜まで確認できる。使用痕跡は希薄で、少なくとも被熱痕跡は内外面とも確認できない。遺存状態は全体の40%前後と見込んだが、口縁部は60%ほど遺存するものの、体部は後ろ正面に相当する部分の半分以上を欠失している。打ち欠いた形跡までははっきりしなかったが、甕の多くの部分を欠いてから骨蔵器として埋納していて、骨蔵器の内容器にもかかわらず、開口部分はかなり大きかったようである。

なお内部からは埋土に混じって、白骨化してほとんど骨粉となったものが1881gあった。ある程度厚みを残すものでは、厚みは1.2~1.9mmあった。遺存状態の最もよい骨片で、長さ44.7mm、幅9.8mmの大きさになる。

2 その他の出土土器類 (第13図、図版4・5、第2表)

4~19は、1号塚の南隅の旧表土層下からまともに出土したものが中心だが、出土状況に関する記録がないため詳細は不明である。土器の小片は塚の盛土中や土器出土集中地点から出土しており、土師器杯類が194点、1.288gあり、ほかに赤色塗彩の杯類が14点、67gあり、皿類と考えられる破片資料はなかった。いっぽう煮炊具の土師器甕類は161点、856gしかなく、食器としての比率から個体あたりの大きさでみると、煮炊具の割合がかなり少なくなる。この傾向は周辺の一般集落の様相と似通っているため、未知の骨蔵器埋納遺構群の存在を物語る資料ではないであろう。

4は球体の体部に短く直立する口縁がつく、壺Aという器種名で知られる、いわゆる葉壺形の灰陶器壺である。8世紀後半以降、おもに骨蔵器として埋納されるようになる。この資料の出土状況は判然としないが、本来はやはり骨蔵器として埋納されたものであろう。しばしば蓋を伴うが、少なくとも蓋となる資料は見当たらなかった。体部下半から底面にかけて強い丸みを帯び、体部最大径は器高の半分以上やや上と、低い位置になることから、肩の張りは弱く見える。底面中央は高台先端よりやや突出し、いわゆる出っ尻状態になっている。口径は底径の3/4のほどしかなく、口がすぼまっている印象を受ける。底部には「ハ」の字状に開く、裾張りの強い高台がつく。高台部の接地面にはナデ調整を行っているが、円弧の6cmほどが重みでうねりが生じ、本来の調整面が残っていない。これは焼成時に窯底の傾斜に対して器体を水平に保つために、高台の下面に窯道具の棒状ツクなどをあてがった痕跡と考えられる。口縁部から肩部付近までロクロナデで、それ以下に回転ヘラケズリを施す。色調は体部上半が灰色(N6/)を基調とし、下半は灰赤色(7.5R6/2)で火色に発色している。

灰軸は外面では口縁部から肩部にかけてみられ、釉だれはほとんど見られない。口縁部には円周の1/4ほどに顕著な軸着がみられ、その下の口縁部と体部との屈曲部分には溜まり状の降灰が環状に軸着している。内面では口縁部上部に淡い降灰を確認でき、底部付近ではガラス状の厚い釉溜まりになっている。また降灰部を中心に石ハゼが少し残る。軸色は茶色味を帯びたオリブ黒色(5Y3/2)を基調とし、ガラス状にやや厚くなった部分ではオリブ黒色(5Y3/1)になる。灰軸の器体への軸着状況を見ると、肩部周辺に

はほぼ均一に軸着しているものの、口縁部では一方向からの部分的な軸着にとどまっているので、窯詰めの際に灰被りする窯内の雰囲気等を想定して配置した、いわゆる原始灰釉段階の製品と考えられる。なお本体上半に重ね焼きの痕跡がなく、底部内面に降灰の厚い軸着状況がみられることから、蓋等の覆いがない開口状態で焼成されることがかえらる。

5以降はすべて土師器になる。5は内外面に赤色塗彩した、ロクロ成形の高台付盤である。口径が推定で20.5cmあり、底径も推定で15cm近くあり、大ぶりののが特徴である。口縁部は破片資料があったが、本体に直接接合するものではなかったので、類似資料を参考に器体の傾きと高さを推定した⁶⁾。内面は層状剝離が著しく、本来の器面がほとんど残っていない。また底部外面も痕跡に爆ぜた痕跡があり、器面は荒れ気味である。また高台の先端は塗彩が剥げており、使用痕跡をうかがわせる。回転痕跡は砂粒を引きずった痕跡が顕著に残る。胎土に特徴的な夾雑物がなく、生産地までは特定できない。

6～9は口径がほぼ似通っており、非ロクロで成形した平底気味の杯である。6はヘラで器面を締めるようなミガキ調整を行い、器面には鈍い光沢がある。7～9は底面と体部の境に比較的是っきりした稜を作り出した器形になる。7は完形に近い資料で、胎土に粒径の大きい赤色粒を含む。8・9はやや器高の高い杯で、ヘラ削りの痕跡が顕著である。胎土に砂粒を多く含み、同一個体の可能性がある。

10・11は体部が逆「ハ」の字状に開く、ロクロ成形の杯である。10は回転糸切り後、無調整で、周囲に回転ヘラ削りを行っている。11は静止糸切り後に手持ちヘラ削りを行っている。体部中に段差が残る。

12～16はロクロ成形で、底面に切り離し痕跡が残り、体部が底面から直立気味に立上る。口縁部がなく器形を決めかねるが、ここではとりあえず小型の鉢とした。内面はいずれも比較的平滑に仕上げ、底面の切り離しは、14が回転糸切りで、12が静止張り引き、13・15・16が静止かけ引きと考えられる。

17・18は非ロクロ成形の墨書のある杯である。17は底部外面の中央近くに、墨痕はかなり淡くなっているが、「萩」あるいは「萩」を候補とする字形を確認できる⁷⁾。18は底部内面に、「神」のしめすへんと旁の上部を残画とするような字形を確認できる。底面に大書しているので、一字の可能性が高い。

19は口縁部が大きく外反し、体部が逆「ハ」の字状に開く、甌上半部の資料である。上半部はタテにヘラケズリを行い、下部は同一個体の破片資料からナナメ方向にヘラケズリを行っていたことがわかる。内面は平滑に仕上げているが、使用によるものであろうか、一部が爆ぜて器面が剥落している。

第4節 遺構外出土の縄文土器と石器

明確な包含層としての存在は確認していないが、塚の盛土中やその周辺から縄文時代早期を中心とする小片が出土している。

1 縄文土器（第14図、図版5）

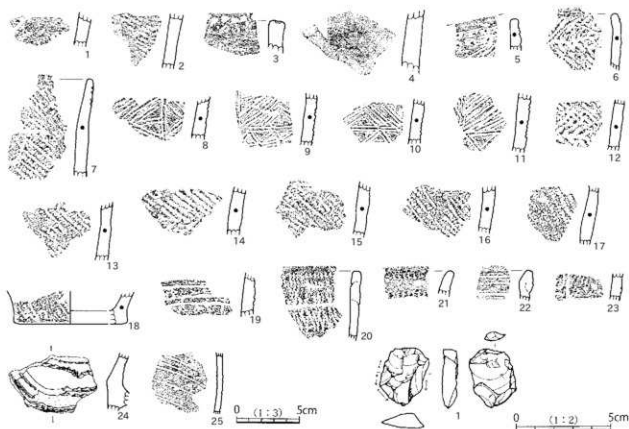
縄文時代早期を主体とした遺物包含層とその周辺から出土したものである。1・2は早期熱糸系土器の体部片で、縄文を横位に施文する。器面の摩滅が著しく原体は不明である。3・4は田戸上層式で、3は肥厚して、断面が角張っている口唇部上面に径の細い半截竹管による列点状の刺突を施し、それ以下の遺存部分には施文はない。4は下部がかなり肥厚しており、底部近くの資料で、施文はない。胎土に粗い砂粒を多く含む。5～18が前期中葉の黒浜式に比定でき、胎土に繊維を含む。5～7は口縁部を残す資料になる。5は断面箱形の口縁形態で、端部直下に幅4mmの平行沈線を短く横方向に2段重ねて施文し、それ以下には斜めの平行沈線を施文する。6は山形に交差する沈線の下に無節R・無節Lの羽状縄文を施文

する。7は縄文RLを横位に施文した後、口縁端部にキザミを入れ、口縁部周辺に刺突を行っている。8～11は胎土や内面の器面の状態から、5と同一個体と考えられる。地文は幅4mmの平行沈線で、タテ・ヨコの直線を区画線としながら、その中に大小の三角形を基調とした沈線を充填する。12～17は地文が縄文のみの資料になる。12の地文は無節R・無節Lの羽状縄文で、結束部分が残る。13は附加条2種を地文とする。14は無節R・無節Lの羽状縄文である。15・16は附加条縄文2種を地文とする。17は単節RLを地文とする。18・19は同一個体と考えられる資料で、底径は9cmほどになる。体部下端まで附加条2種を施文している。19は波状貝殻文を施文した後に、幅6mmの平行沈線を横位に施文する。浮島式である。20・21は口縁部を残す資料で、口縁端部から波状貝殻文を施文する、奥津式である。20は施文が密で、器体の内外面に粘土紐接合痕が残る。21は間隔をあけながら施文し、施文後に横位のナデで一部を磨削している。

22・23は胎土に小礫を多く含むが、器面を平滑に調整した、中期初頭の五領ヶ台式である。22は口縁端部から下に横位の沈線だけが残る資料である。口縁部の断面形状は端部が平らで、その下の内面が緩やかに突出する。23は小片のため定かではないが、細かい単節RLを縦に施文後に渦巻きを基調とする文様を施文する。24は胎土に小礫を非常に多く含む、さらに金雲母片を含む。阿玉台I b式かII式と考えられる。断面三角形の隆帯による楕円形区画文をモチーフに、それに沿って単列の角押文を施文する。区画文内面にも同様の施文を行う。25は斜めの沈線を施文した安行式の粗製土器である。器面にスズが付着する。

2 石器 (第14図、図版5)

248DV-96から出土した、縄文時代の石鏃の素材剥片と考えられる資料を1点図示した。下端を固定した挟み割りを行っており、打面が主要剥離面右上部に残るが、左上部は打撃時の衝撃で剥落している。ま



第14図 縄文土器・石器

た挟み割りの際の不規則な折れによって、末端に2枚の剥離痕が生じている。両側縁には微細剥離痕が残る。石材は青みのある黒筋状の黒曜石で、白色球形の夾雑物を含み、神津島産と考えられる。

- 1 千葉県教育委員会 1998「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)-香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)-」・千葉県ホームページ「ふさの関文化財ナビゲーション」(<http://map.pref.chiba.lg.jp>)
- 2 (財)千葉県文化財センター 1986「多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台・泉根・土持台・林中ノ台吹入台-」・福岡元 1998「林小原子台遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 pp538～541
- 3 (公財)千葉県教育振興財団 2021「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書37-多古町千田の台遺跡(1)-」
- 4 (財)千葉県文化財センター 1996「多古町千田台遺跡-BR/W南側NDB用地埋蔵文化財調査報告書」
- 5 (有)勾玉工房Mogji 2012「水戸柳谷塚-土砂採取事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 6 参考とした資料は市川市北下遺跡田河道SX012出土土器である((公財)千葉県教育振興財団 2017「東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書11-市川市北下遺跡(14)-菅野遺跡(1)～(5)」第50図66 pp74-75)。
- 7 類例としては上総国分僧寺東南部地区693号遺構出土の土師器皿に「萩」と釈読した墨書の例をあげておく(櫻井敦史ほか 2009「上総国分僧寺跡1(本文篇1)」市原市教育委員会(市原市埋蔵文化財調査センター)第582図24 p602)。

第2表 遺物観察表

番号	遺物種別	器種	計測値(cm) (はき測定、口徑は取付位置) 口径 底径 高さ	遺存度	底部 切り離し	胎土	色調 上段・外面、下段・内面	備考
1	10.12 ～ 15	土師器 甕	21.0 9.6 24.7	80%	—	細砂粒多く、雲母粒・炭 粒の大きい赤色粒少し 褐色(5YR6/6)	青磁器の外容器	
2	1.8,9	土師器 高台付甕	22.7 — [4.5]	85%	静止面切	細砂粒多く、雲母粒・炭 い赤色粒少し 粒 に:赤+褐色(5YR6/4)	青磁器の蓋に代用、高台部分 の口となどを打ち欠く。	
3	1A,15, 16	土師器 甕	22.8 (6.0) (29.1)	40%	—	細白色砂粒非常に多く、 雲母粒少し 粒 細白色(2.5Y8/3)	青磁器の内容器	
4	1,2	須恵器 短頸壺	10.0 13.5 18.5	70%	—	細く白い色粒多く、1mm ほどの白色粒少し 灰色(10Y4/1)	口縁から肩部と底部内面に 自然附付	
5	2	土師器 高台付甕	(20.5) (14.9) (4.4)	45%	—	細砂粒多く、1mmほどの 赤色粒少し 粒 に:赤+褐色(5YR7/4)	層状剥離しており、器面が一 部原状に剥落している。	
6	2	土師器 杯	(13.2) — [3.6]	30%	—	細砂粒多く、赤色粒少し 褐色(5YR6/6)		
7	2	土師器 杯	13.4 9.8 3.8	90%	—	細砂粒多く、赤色粒少し 褐色(5YR6/6)		
8	1	土師器 杯	(13.6) (9.7) [4.3]	20%	—	粗砂粒多く、赤色粒・雲 母粒少し 褐色(2.5YR6/6)		
9	1	土師器 杯	(12.6) (9.1) [4.4]	20%	—	粗砂粒多く、赤色粒・雲 母粒少し 褐色(2.5YR6/6)		
10	1	土師器 杯	(12.4) 7.0 4.1	60%	回転面切	粗砂粒多く、粒径の大き い赤色粒少し 浅黄褐色(10YR8/2)		
11	1	土師器 杯	(12.2) 6.0 3.6	30%	静止面切	粗砂粒、細く白い赤色粒 雲母粒 粒 に:赤+黄褐色(10YR2/3)	静止面切り跡に引きの可能 性が強い。	
12	1	土師器 鉢	— (5.9) [2.6]	底部	静止面切	細く白い赤色粒多く、赤 色粒少し 粒 に:赤+褐色(5YR6/4)	口作り成形	
13	1	土師器 鉢	— (6.0) [3.7]	底部	静止面切	細く白い赤色粒と赤色粒 多い 粒 に:赤+褐色(5YR7/4)	口作り成形	
14	1	土師器 鉢	— 6.5 [4.5]	底部	回転面切	細く白い赤色粒と赤色粒 多い 粒 に:赤+褐色(5YR6/4)	口作り成形	
15	1	土師器 鉢	— (6.2) [2.9]	底部	静止面切	細く白い赤色粒と赤色粒 多い 褐色(5YR6/6)	口作り成形	
16	1	土師器 鉢	— (6.0) [1.2]	底部	静止面切	黒色粒多く、赤色粒少し 褐色(5YR6/6)	口作り成形	
17	1	土師器 杯	13.1 — 4.2	70%	—	粗砂粒と雲母粒多く、粒 径の大きい赤色粒少し 褐色(2.5YR6/6)	底部外面に「萩」などを焼繪し する墨書あり。	
18	1	土師器 杯	(11.8) (7.0) 3.4	25%	—	粗砂粒多く、雲母粒・赤 色粒少し 粒 に:赤+黄褐色(10YR6/6)	底部外面に「神」などを焼繪し する墨書あり。	
19	1	土師器 甕	(26.1) — [8.9]	—	—	粗砂粒多く、赤色粒少し 粒 に:赤+褐色(5YR7/4)		

第3章 長者屋敷遺跡(1)～(3)

第1節 調査地の概要

1 周辺の地形と位置(第3・15図、図版1)

長者屋敷遺跡は、台地の東西を南流して栗山川に注ぐ2本の河川によって、南北に細長く開析された十余三台地の中央部に位置する。栗山川の上流側で合流する河川が台地東側を流れる多古橋川で、西側を流れる高谷川はその下流部分で栗山川に注ぐ。台地はこの2河川に注ぐ谷津地形によって東西から樹枝状に細かく台地奥部まで浸食されており、平坦部が限られている。遺跡範囲もそれに応じて東西に細長く、平坦部が少ない。調査地は遺跡範囲のほぼ中央を南北に縦断する位置になる。標高は3次調査地点が最も高く39m前後あり、それ以外は36m程度になる。また谷津との比高が最も高いところで12m前後になる。

調査は3次にわたったため、回数ごとに遺跡名の後に()を付けて表記している。北から順に、長者屋敷遺跡(1)は1級町道染井林線の北側に位置し、所在地は香取郡多古町林字当木489-14の一部ほかになる。(3)は(1)とは谷津を挟んで南約50mに位置し、所在地は多古町林字当木580-2の一部ほかになる。(2)は(3)よりさらに約90m南に位置し、調査区内を町道多古1187号線が横断し、調査区が南北に分断されている。所在地は多古町林字栗割谷829-5の一部ほかになる。

2 周辺の調査成果(第3・15図、図版1)

長者屋敷遺跡の北側の谷津を挟んだ地点には、圏央道関連事業で発掘調査を実施した五反田清水沢遺跡が位置する¹⁾。五反田清水沢遺跡(1)は南北から谷地形が迫って細くなり、台地が分断される。北部の標高がやや高く、平坦面も広がる。調査の結果、縄文時代と古墳時代の集落の様相が明らかとなったが、地形的制約を受けたためであろうか、南北で遺構密度に差がある。北半部では一部で遺構が重複するほどだが、南半部ではかなり散漫な分布状況になる。縄文時代の遺構としては、前期後葉～中期前葉の竪穴住居12軒と陥穴1基、土坑5基などを調査している。古墳時代では前期から中期にかけての竪穴住居を12軒調査し、中期の竪穴住居8軒からは、滑石を素材とする白玉・有孔円板・剣形品などの石製模造品やその未成品が大量に出土した。これらは地域の有力豪族層が組織した工人集団による所産と考えられ、最終的に古墳等の埋葬施設に副葬されたと推定されている。

谷津を挟んでさらに北にある五反田栗島遺跡では縄文時代前期・中期を主体とする遺物包含層を調査している²⁾。土器様相は前述の五反田清水沢遺跡と共通し、両遺跡が緊密な関係にあったことが指摘されており、生活拠点も五反田清水沢遺跡においていた人々が活動範囲を広げた結果と考えられている。また調査地の南には多古工業団地遺跡群が位置するが、概要についてはすでに第2章で触れたので省略する。

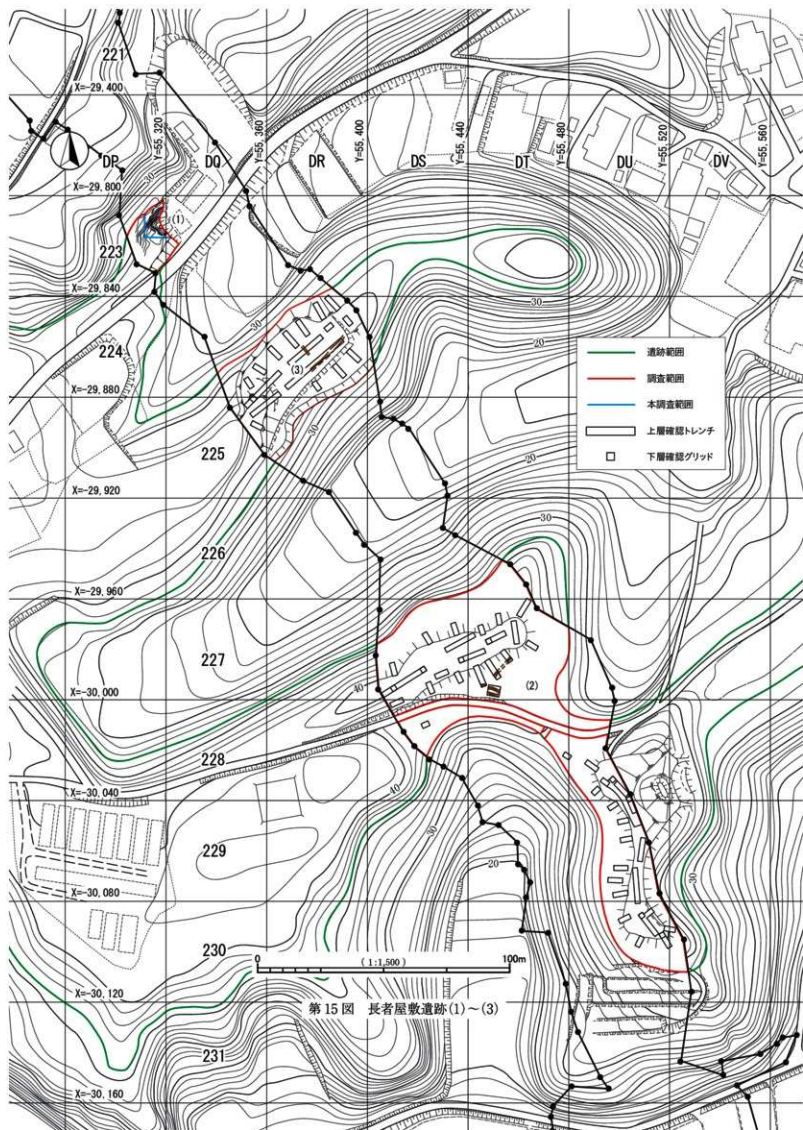
第2節 調査の概要と成果

1 調査の概要(第15～21図、図版1・6～9)

以下では、調査回数の順に沿ってその概要を記載する。出土遺物については、掲載資料数が少ないことから、調査回数に関係なくまとめて掲載することにした。

2 1次調査の概要(第15～17図、図版6)

長者屋敷遺跡のなかでは最も北に位置する地点になる。南に接する1級町道染井林線の路面とは比高3



第15図 長者屋敷遺跡(1)～(3)

mほどの法面となる。東側もすでに路面の高さまで削平され、ビニールハウス等の農業施設が設置されていた。北側は急峻な崖面を形成する。調査対象面積は299m²で、上層については塚状の高まりのある部分を除いて全面表土除去を行って、遺構・遺物の所在を確認した。その結果、塚状の高まり以外、遺構・遺物は確認できなかったので、塚状の高まり部分の90m²が本調査の対象となった。なお下層については、立川ローム層の堆積を確認できなかったために確認調査は実施しなかった。

塚状の高まりは、現況観察をもとに塚を想定して地形測量を手実測で行った。その結果、盛土の半分近くが削平されているものの、等高線のまとまりから塚と判断するに至り、SX001の遺構番号を付与して調査を行った。塚の形状は、遺存している南側がかなり丸みを帯びるものの、遺存範囲で「コ」の字状になる等高線の流れを確認できるので、矩形の平面形態と考えられる。南西辺の裾部の長さは約7m、北西辺は8.6mほどになり、北側にやや間延びした長方形の平面形態になるであろう。ただ塚の最高点が本来中心点となる地点からかなり南に寄っており、北西辺の下半部は南西辺に比べてやや長くなるなど、削平等により形状が改変された可能性もある。見かけの高さは1mほどある。主軸方位は北側台地斜面部の等高線の流れとほぼ平行し、N-35°-Eと斜行する。なお段築成や周囲の溝等の掘り込みについては、断面を確認した範囲でもその痕跡を確認できなかった。

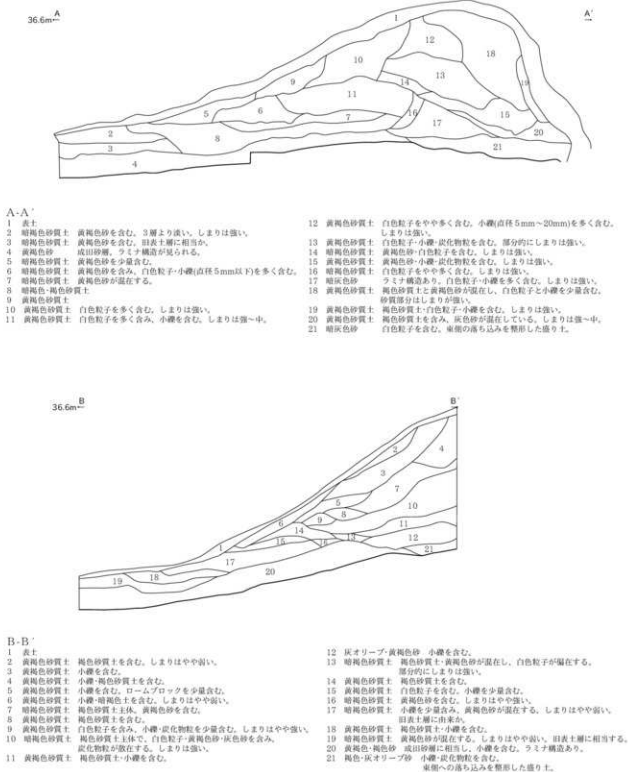
調査は塚の半分が削平され、削平面が急峻な崖面を形成していることから、安全面に配慮しながら、塚の盛土状況等を2箇所断面として観察できるように盛土を面的に除去していった。その結果、地山は黄褐色系の成田砂層に類似した性状で、ラミナ構造を確認できる地点もあった。塚裾部ではその直上に旧表土層と考えられる暗褐色砂質土が部分的に堆積し、本来の塚中央部あたりでは、盛土前に地山を水平に整形した形跡があった。盛土は黄褐色砂質土・暗褐色砂質土を交互に積み上げ、夾雑物としては小礫や炭化物粒などがあつた。焼土は確認していないが、炭化物粒は整地する際に山焼き等を行った痕跡なのかもしれない。なお特徴的な堆積層はなく、伴う出土遺物等も特になく、築成時期等については不明である。

3 2次調査の概要(第18~20図、図版6~8)

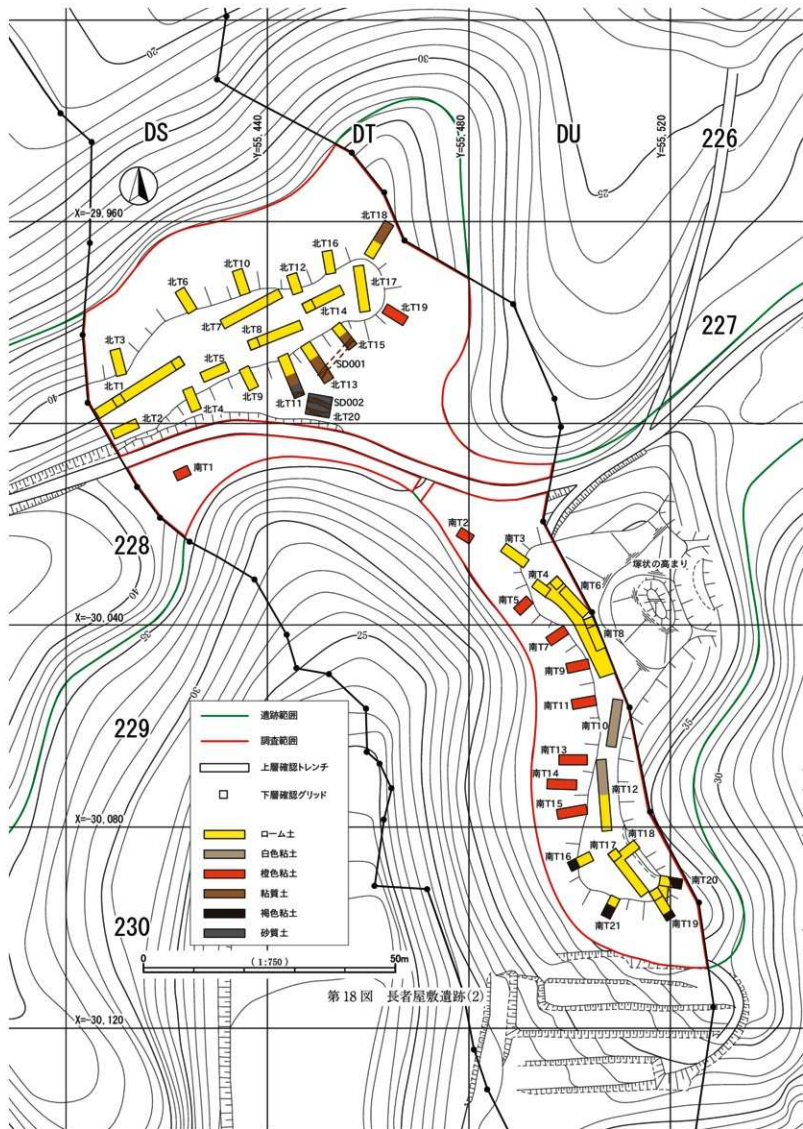
調査地が町道多古1187号線を挟んで、本来連続する台地が南北に分断されるため、南北の2区に分けて調査を実施したことにより、トレンチ番号も区ごとに通し番号を振った。北区の調査対象面積は3,152m²で、南区は2,250m²になり、合計の調査対象面積が5,402m²になる。両区とも瘦せ尾根状の地形になり、北区ではそれが東西方向に延び、南区は南北に延びる。上層のトレンチの設定にあたっては、尾根上では尾根筋方向にトレンチを設定し、斜面部には尾根筋と直交する方向にトレンチを設定した。なお全体図でのトレンチ内の色分けは、トレンチの表土除去時の地山の状況を用例に従って図示したものである。

北区では合計19本のトレンチを設定し、面積は合計284m²となった。南側斜面部で4条の時期不明の溝を確認した以外、遺構等は確認できなかった。溝は幅1mほどで掘り込みも浅いものだが、2条で構成されるSD002は現町道と平行し、埋土中に宝永火灰(宝永4(1707年))と考えられる黒色砂層を含むので、近世の往来に関係する痕跡かもしれない。硬化面等の痕跡ははっきりしなかった。

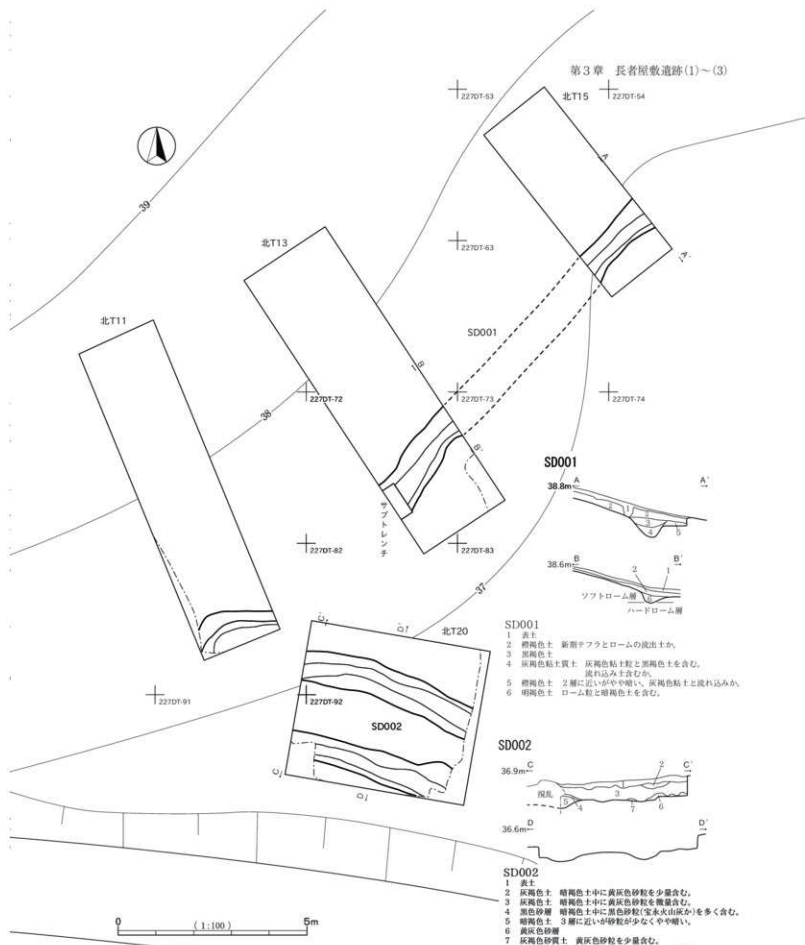
出土遺物はまとまったものはなかったが、縄文時代早期・中期の土器片と10世紀代と考えられる土師器杯の底部破片資料などが出土した。中央の平坦部を中心に立川ローム層が残っていたため、平坦部に4箇所のグリッドを設定して、合計16m²の下層の確認調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物等を確認できず、確認調査で調査を終了した。なおかつて瘦せ尾根上中央の微妙な起伏から、塚等の存在を想定していたが、調査の結果、それをうかがわせる痕跡は確認できなかった。



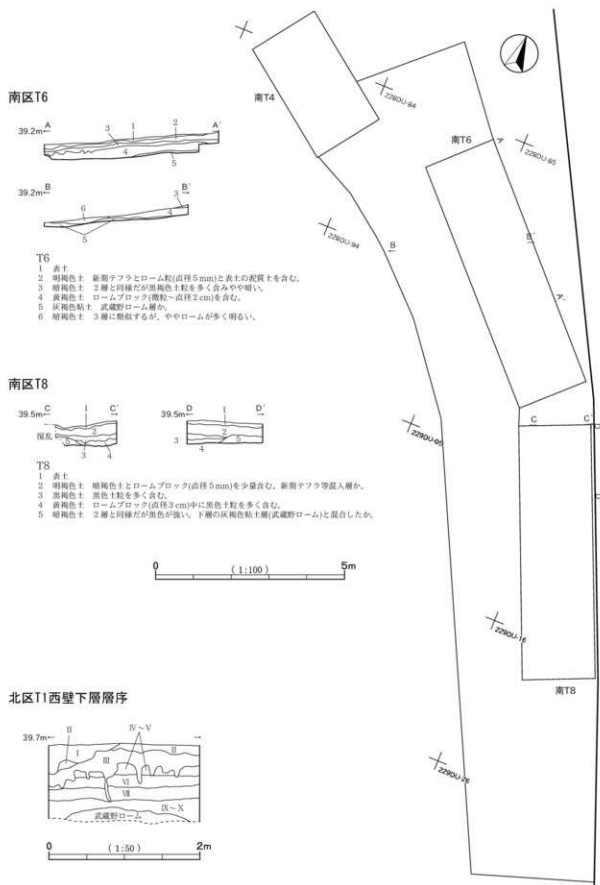
第17図 長者屋敷遺跡(1) SX001 断面図



第3章 長者屋敷遺跡(1)~(3)



第19図 長者屋敷遺跡(2) SD001-SD002



第20図 長者屋敷遺跡(2) 南区4・6・8トレンチ、北区1トレンチ西壁下層層序



第21図 長者屋敷遺跡(3)

南区では合計21本のトレンチを設定し、面積は合計283m²となった。調査区中央の事業範囲の境界に接して塚状の高まりがあり、第18図の略測図で表現した部分にあたる³⁾。塚状の高まり部分は事業範囲からは外れるものの、調査区内にそれに伴う溝等がある可能性もあったので、確認するためのトレンチも設定し、最終的にトレンチは21本となった。なお塚状の高まり部分については、事業範囲の境界付近にやや広めに調査区を設定して精査したが、溝等の掘込みは確認できなかった。下層については立川ローム層が残る範囲に4箇所グリッドを設定し、合計16m²を調査したが、遺構・遺物等とも確認できなかった。トレンチ4・6・8の一郭では、深さ30cmほどで武蔵野ローム層に達し、立川ローム層の堆積が非常に薄いことを確認した。なお南区全体からの出土遺物は極めて少なく、縄文土器の細片や須恵器長頸壺の破片などが出土したのにとどまる。

4 3次調査の概要(第21図、図版8・9)

調査区は北東から南西方向に延びる尾根を南北方向に横断し、調査対象面積は2,065m²である。トレンチは尾根の高いところには尾根筋に平行して、斜面部にはそれとは直交する方向に任意で設定した。トレンチは長短合計で17本となり、合計面積は209m²となった。その結果、平坦部の北東半分は旧地形に土盛りして平坦面を造成し、南東斜面は段成形で上部を削平していたことが明らかになった。調査時の所見では、近世以降に畑地として開墾した際の痕跡と推測している。13トレンチでみつかった溝は断面観察の結果、盛土以前に開削されていたようで、一帯の土地利用に関わる何らかの痕跡になるのであろう。

下層の確認調査については、南西部の標高の最も高い地点に確認グリッドを設定して調査したところ、ローム土と成田層に由来すると考えられる土が混合した、粘性の強い層を確認した。このことからプライマリーな立川ローム層の流出が明らかとなったので、本格的な下層の確認調査は実施しなかった。出土遺物としては、土師器の細片が少量出土したのみで、特に図示できるものはなかった。

第3節 出土遺物

出土遺物としてまとまったものはなく、土器類が主体で、石器類については特に報告するような出土資料はなかった。掲載した資料はすべて2次調査で出土したもので、1次調査では出土遺物がなく、3次調査では土師器の細片を中心に、27片、127g出土したのみであった。

1 縄文土器(第22図、図版9)

1～6は早期後葉の子母口式の土器群である。1は口縁部が残る資料で、口縁上部部に貝殻腹縁による連続刺突の刻みを施す。2は波状口縁の緩やかな突起部が残る。口縁上部部には鋭いヘラ状工具で疎らな刺突を斜位に施す。胴部には先端の割れた工具による刺突を横位に施す。胎土に砂粒を多く含む。3も口縁上部部に鋭いヘラ状工具で刺突を施し、胴部には先端の割れた工具による刺突を横位に施し、2と同一個体の可能性がある。4～6は無文の体部片である。5・6は胎土に繊維を含むと考えられるが、もし繊維を含まないとすると、田戸上層式も視野に入れる必要がある。1～4は北区227DS-59-77から出土し、5・6は北区14トレンチから出土したものである。

7～9は中期の土器群で、7は胴部上半の部分資料で、断面カマゴ形になる隆起線の裾部に皿型文を施し、内部に波状沈線文を充填した区画文が残る。胎土には白色系の粗い砂粒を多く含む、雲母粒をわずかに含む。阿玉台皿式である。南区3トレンチから出土した。8は単節縄文RLを地文とし、磨消を伴わない懸垂文を施した細片である。加曾利E式と考えられる。北区3トレンチから出土した。9は地文

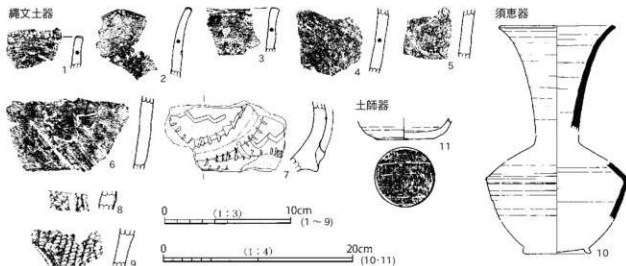
に単節縄文RLを縦に施文し、磨消部を区画する沈線を施文した資料である。加曾利EⅢ式と考えられる。北区227DS-39から出土した。

2 須惠器・土師器 (第22図、図版9)

10は細長い頸部から、口縁部がラッパ状に外反し、端部を素口縁で仕上げた、いわゆるラッパ状長頸瓶である。図示に当たっては、接合して3片の塊となった同一個体の破片を図上で器形復元している。底部付近については、上部の器形復元から推定した。体部上半は肩部が張り鋭角となって、先端にははっきりとした稜を作り出し、風船技法の円盤閉塞法で加圧して変形させたものと考えられる¹⁾。以下、各寸法の推定値は、口径12.4cm、体部最大径15.2cm、頸部高12.4cm、器高24.0cmとなり、数値上は平均的な長頸瓶の数値に収まる。しかし口縁部が大きく開き、プロポーションとしてはアンバランスな印象を受ける器形となる。古い様相を残しているのかもしれないが、ここでは帰属時期を7世紀末~8世紀初頭と考えておきたい。胎土は精緻で、微黒粒を含み、色調は灰黄色(25Y7/2)で、湖西産の製品と考えられる。口縁部先端の内面のわずかな部分に降灰を確認できる。2次調査南区19トレンチから出土した。

なおほかに長頸瓶の高台が残る底部部分と、それと同一個体と考えられる体部片の細片が各1点あったが、小片のため図化は省略した。焼け歪みが顕著で、胎土も10に比べると粗く、白色砂粒を多く含む。色調は灰白色(5Y8/2)になる。胎土の特徴から、やはり湖西産と考えられる。

11は器高の低い、無台のロクロ土師器杯下半部の資料である。粗雑な作りで、底面は切り離し後にヘラケズリで粗く調整したために、体部との境に段差が生じている。底面が切り離し後無調整ではない点気がかりだが、器形の特徴から10世紀後半の資料と考えたい。2次調査北区17トレンチ周辺から出土したものである。なお土師器はほかに、2次調査南区19トレンチ周辺から、細片がややまとまって出土した。



第22図 出土土器(縄文土器・須惠器・土師器)

- 1 (公財)千葉県教育振興財団 2019「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書35-多古町五反田清水沢遺跡(1)~」
- 2 (公財)千葉県教育振興財団 2021「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書39-成田市一坪田入Ⅱ遺跡(3)~(5)-多古町五反田栗高遺跡(1)~」
- 3 塚原節子「南無妙法蓮華經」の題目を梵文字で整えた下に「馬頭観音」と刻んだ石碑が建立されている。なおこの石碑は、多古町史編さん委員会編 1985「多古町史(別冊)-村絵図および石造物所在図」の記載からは漏れているようである。
- 4 北野博司 2001「須惠器の風船技法」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会 pp159-169

第4章 矢作牧野馬除土手（大柴十余三・一畝田地点）

第1節 位置と周辺の地形、歴史的環境

1 位置と周辺の地形（第2・23図、図版10）

野馬除土手（以下の説明では煩瑣を避けて、適宜、野馬除土手を土手と記述する。）自体が行政界となるために、所在地は2市町にまたがる。成田市側の所在地は成田市大柴十余三245-887ほかになり、旧大柴町域となる。多古町側は香取郡多古町一畝田字山ノ下27-4ほかである。土手の北への延長部分は主要地方道横芝下総線が北北東に大きく屈曲する部分の線形と重なり、和田牧場の直線的な西緑の敷地に沿うところまで走行方向を同一とする。また多古町道1007号線とは約90mの間隔をあけて平行する。以下の報告では、行政上の帰属に関係なく記述するが、必要に応じて帰属を用いて記述することがある。

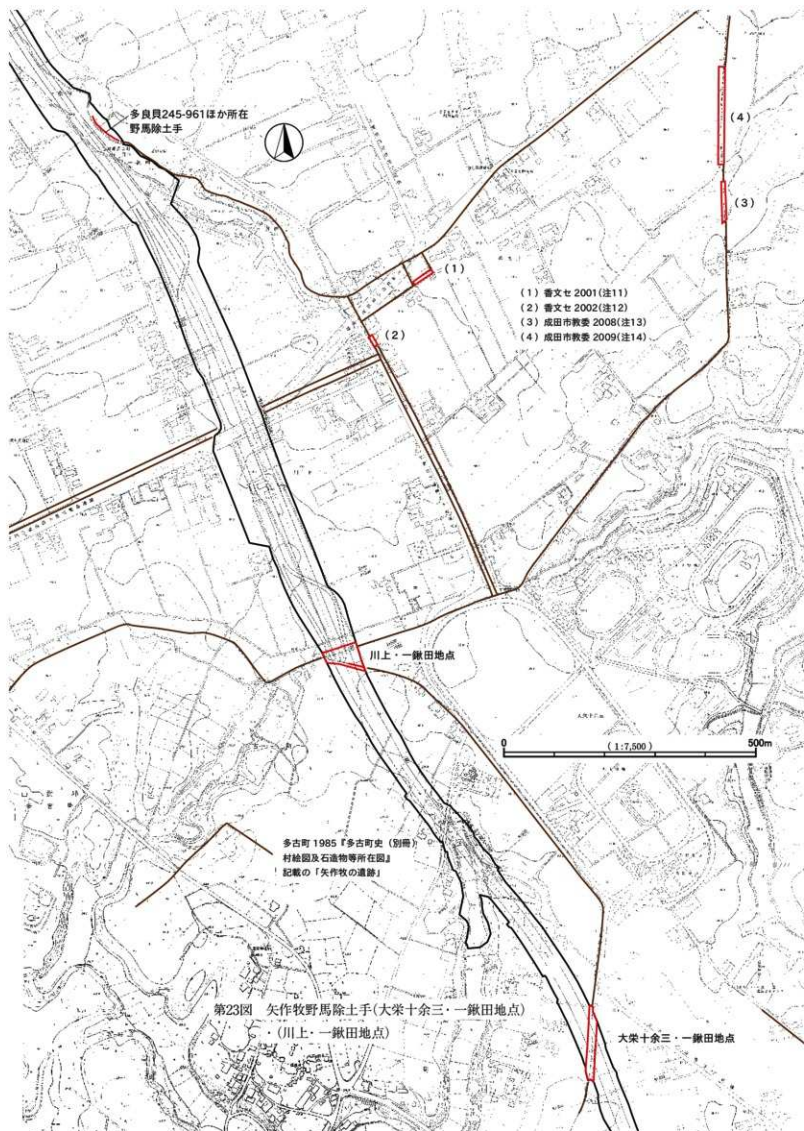
またこの牧の埋蔵文化財包蔵地上の名称は、これまで「旧」を冠していたが¹⁾、他の牧の名称と整合させるために、「旧」1字を削除して矢作牧となっている。

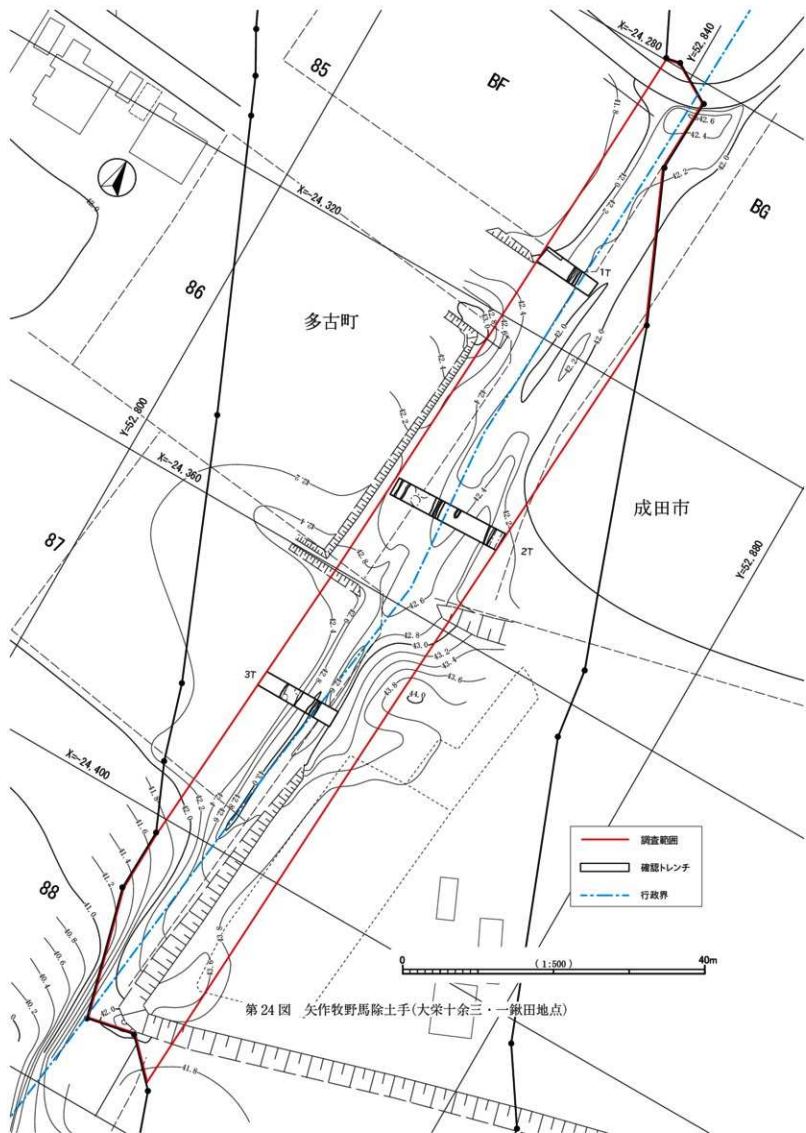
水系を中心にして周辺の地形を記述しておく、旧大柴町域のほぼ中央を北流する大須賀川水系と、北西に流れて、途中、根木名川に合流する尾羽根川水系が利根川に注ぎ、支流の高谷川から南流する粟山川水系が太平洋に注ぎ、調査地周辺の台地一帯はこれら3水系の分水界となっている。調査地の土手は、高谷川の支流によって開析された谷筋の東側に谷筋とはほぼ平行して直線的に敷設されており、さらに谷頭付近で大きく西へ迂回して、次車の川上・一畝田地点へは北北西に880mの地点になり、2条ある土手のうち南側の土手に接続する。調査地は支谷の中ほどにあたり、土手が谷筋と並行する部分では、谷縁辺部から約190m台地内部に入った地点にあたり、標高は約42mの平坦な台地上になる。なお『明治前期迅速図』²⁾にはこの部分に土手としての表記は確認できない。

2 歴史的環境（第23図）

下総台地の樹枝状に開析された広大な台地部は、高燥で、排水の便がよく、自然地形の起伏で適度に空間が限られることなどから、古くより牧経営が行われてきた。江戸時代になると幕府は下総台地の西部に小金牧を、東部には佐倉牧を直営で設置した。これらは將軍家の厩や幕臣向けに軍用馬として供給し、不要な馬を周辺の村々へ農耕馬として使役できるように売却して、農村経営の一助となることをおこなった。佐倉牧には七牧あったことから佐倉七牧と呼ばれたが、享保7（1722）年に享保の改革の一環で経営主体が老中から若年寄に移ったことから、佐倉藩に管理を委託した佐倉三牧方と、幕府が野馬奉行を代々世襲した牧士の綿貫氏に経営を委託した四牧方に分割された。矢作牧は小間子・取香・油田とともに四牧方に属した。矢作牧は佐倉七牧の北半に位置し、面積は32.0km²に復元されている。その面積は佐倉七牧全体のおよそ18%を占めた³⁾。

牧には、古文書に「御野馬除圃土手同堀」「御野馬除堀」「野馬土堤」⁴⁾などとなるように、牧の周囲には野馬が逃亡するのを防ぎ、山犬や狼の害獣から野馬を守るために野馬除土手と呼ぶ溝もちの土手を築き、犬落穴という陥穴を掘る場合もあった。牧内部はさらに野馬捕りの時に野馬を追いやすくするために、勢子土手と呼ぶ幾条もの土手で区切る構造となっていた。野馬を追い込む捕込は、矢作牧では成田市古込地区の古込込前遺跡（No.22遺跡）⁵⁾で見つかった、70m×90mの大きさで土手が方形に回り、内部も土手で4室に区切られた盛土遺構がそれに該当すると考えられている⁶⁾。『酒々井町史』に掲載されている「矢作





捕込図」(鳥田家文書)⁷⁾とは構造が異なることから、享保12(1727)年に古込に築き替えられた捕込と考えられる。なお畝田の権現前に矢作牧捕込の遺構をもとめる見解もある⁸⁾。

これら諸施設の維持管理、そして野馬の生育の監視、そして野馬捕りという重要な行事を担当したのはが牧土で、矢作牧牧土は藤崎半右衛門、丸弥兵衛が世襲により代々その職を継いだ⁹⁾。矢作牧には牧場経営に深いかかりをもつ周辺の28箇村が野付村となり、江戸野馬役所の承認を得て、農閑期を中心に土手の修補や新規築造にあたった。調査地の多古町側の字名がいずれも一畝田なので、旧村名は野付村の一つである一畝田村に当たり、取香村・駒井野村とともに、牧の捕込賄いとして役人の宿泊、捕馬の飼料などの世話役を担った村の一つになる¹⁰⁾。なお近隣の遺跡名ともなっている夜番という小字名は、隣接するやはり野付村の一つである一坪田村が、吉岡村・前林村とともに捕馬の夜番を勤めていたので、役名にちなんだ地名ということになる。この夜番という小字名の広がりから、一畝田村と一坪田村の村境を想定してみると、県道成田小見川鹿島港線周辺が一つの候補になるであろう。

明治になると牧は廃止され、新政府は明治2(1869)年に旧幕臣などの土族授産事業と食料増産・産業振興の一環として、民部省に開墾局を設け、諸牧の現地開発に乗り出した。矢作牧は明治4(1871)年8月から開墾が開始され、矢作牧が最後の入植地となり、それが13番目にあたることから、それがそのまま十倉三村という村名になった。さらに新たな事業として牧羊事業も立ち上げ、旧矢作牧・高野牧・内野牧域を下総国牧羊場とした。ただその後、管理権の移動に伴って規模が徐々に縮小され、一部が御料牧場として存続し、下総御料牧場はその跡地の1つであった。

3 周辺の調査例 (第23図)

周辺の牧関連の調査例を4例掲載しておく。いずれも部分的な調査のため土手の構造等に関する情報は限定的である。(1)・(2)は尾羽根川の水源から東側に位置する。そこは牧内部がさらに分割され、土手がやや込み入って敷設されたと思定されている一画になる。いずれも土手の高まりは残っていない。(1)は北東-南西方向に走行する土手東側の調査で、溝2条を確認している¹¹⁾。(2)は(1)とは土手の走行方向が直角になる位置関係である¹²⁾。土手北側の調査で幅1.9m、深さ35cmの溝を確認している。

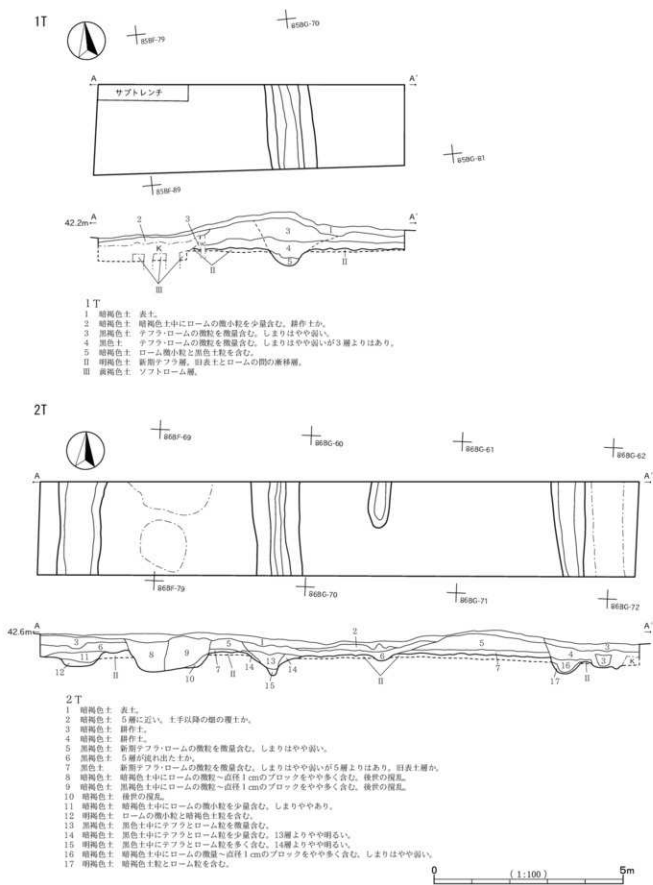
(3)・(4)は(1)・(2)の土手を取り込む、大きい台形区画の東辺に敷設された土手で、250mにわたって土手が残る。土手は幅約2m、高さは見かけで約1mになる。両調査地点はほぼ連続した調査成果になり、(3)は谷頭を横断する位置に敷設された土手で、西側に浅い溝を伴っていることが明らかになった¹³⁾。(4)は(3)の北側に位置するが、事業範囲が土手中央までだったため東半分については不明だが、西側についてはやはり溝を伴うことが明らかになった¹⁴⁾。溝幅は20~25mで、深さは1.2mほどあり、かなりしっかりした掘り込みを確認している。

なお圏外関連事業地内には、ほかに尾羽根川右岸の台地縁辺部に成田市多良貝245-961ほかに所在する野馬土手があったが、試掘の結果、土手や溝の所在を確認することができなかったため、慎重工事の取り扱いとなった。

第2節 調査成果

事業地内の南北に走行する長さ150mと成田市側で北へさらに分岐した部分が54mあり、2条204mの野馬除土手が調査対象で、調査対象面積は成田市側が821m²、多古町側が642m²で、合計1,463m²となった。調査は幅2mのトレンチを土手に直交して3本設定し、北から順にトレンチ番号を付して調査を行った。

第4章 矢作牧野馬除土手（大栄十余三・一畝田地点）



第25図 大栄十余三・一畝田地点 1・2トレンチ

調査面積は合計70m²である。以下、トレンチの番号順に記述しておく。なお出土遺物はなかった。

1 トレンチ（第24・25図、図版11）

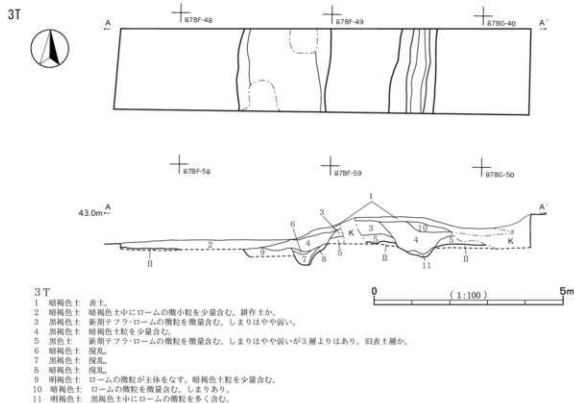
土手としての高まりは見かけで50cmあるが、土手の断ち割り面で観察の結果、本来の盛土は確認できず、土手の崩落土、あるいは土手を均した際に攪乱された層と判断した。西側はほとんどトレンチャーによって攪乱され、東側は比較的プライマリーな堆積状態で、東半分でローム層上位のⅢ層とその上にⅡ層の明褐色土層を確認し、その直上の層厚20cm前後の黒褐色土が旧表土層に相当すると考えられる。土手の高まり直下で、土手と平行する幅1mほどの溝の掘り込みを1条確認した。3層が旧表土であれば、深さは45cmほどになる。

2 トレンチ（第24・25図、図版11）

見かけで30cmほどの高さの土手を東部で確認した。7層が旧表土層と考えられ、その直上の最大厚40cmの黒褐色土層が土手の盛土と考えられる。溝は3条確認し、1トレンチで確認した溝に連続するのは、位置的に真ん中の溝になる。西側の溝は幅1m、深さは30cmほどで、底面がやや平らになった掘り込みである。中央の溝は断面が薬研状に近い掘り込みである。幅1.2m、深さは50cmほどあり、比較的掘り込みがしっかりした溝である。もっとも東に位置する溝は、土手の盛土を切って間割されており、調査時の所見では、本来土手に付随していた溝を後世に筆境の溝として掘り直された可能性があるかと判断している。幅は80cmで深さは30cmほどある。それにしたがえば土手本来の下底幅は、6.5mほどに復元できる。

3 トレンチ（第24・26図、図版11）

見かけで60cmほどある土手を東部で確認した。Ⅱ層の直上に堆積する5層が旧表土層と考えられ、その直上に最大厚40cmで堆積する黒褐色土層が土手本来の盛土になるであろう。トレンチ東部でみつかっ



第26図 大栄十余三・一銀田地点 3トレンチ

た溝が、1・2トレンチで見つかった溝に連続すると考えられる。ただしこの部分では、かなりルーズな印象を受ける掘り込みで、幅は1.2mで、深さが55cmになる。埋土自体は盛土相当層まで立ち上がっている。後世に掘り返されている可能性がある。断面形態は逆台形に近い。またトレンチ中央でみつかった溝状の掘り込みは、断面を確認した部分ではほとんどが攪乱されていたために詳しいことはわからないが、掘り上げりの実測図等からは、幅2.3m、深さが25cmほどで、底面が比較的平らな溝と考えられる。溝は土手と平行することから、野馬土手に関連する溝の可能性があるが、東側の溝とは1.5mほどの間隔しかないのが気にかかる。

- 1 千葉県教育委員会 1986『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)―千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区』、藤下昌信 1986『牧』、『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会、千葉県教育委員会 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)改訂版―香取・海上・匝瑳・山武地区』、嶋田浩司 2006『房総の近世牧跡 県内遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 pp52-55など
- 2 地図資料編纂委員会編 1989『明治前期関東平野地誌図集成 1880(明治13)年～1886(明治19)年』柏書房 No.45
- 3 相原晴次 1987『野間牧場と牧土』、『酒々井町史 通史編』上巻 酒々井町役場 pp418-482
- 4 大栄町史編さん委員会 1994『牧に関する史料』、『大栄町史 史料編Ⅲ 近世2』大栄町
- 5 新田浩三 1994『空港予定地内所在遺跡の名称の変更について』、『研究連絡誌』第40号(財)千葉県文化財センター pp11-17
- 6 (財)千葉県北総公社 1971『三塚塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査』、菅野貞男 2002『佐倉七牧と農民の夫役』、『大栄町史 通史編中巻 近世』大栄町 pp381-453、(財)千葉県文化財センター 2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ―東峰御幸畑東遺跡(空港No.62 遺跡)』、小久貫隆史 2006『牧とその遺構』、『房総の近世牧跡 県内遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会、千葉県県土整備部・(公財)千葉県教育振興財団 2013『成田市 天神峰中央所在野馬土手―県単道路改良(幹線道路網整備)委託埋蔵文化財調査報告書―』
- 7 酒々井町史編さん委員会 1976『47 矢作牧捕込土手普請 付図』、『酒々井町史 史料集(二)(佐倉牧関係)』酒々井町役場 pp84-87
- 8 『角川日本地名大辞典』編纂委員会 1984『大栄町』、『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店 p1264
- 9 大栄町史編さん委員会 1994『牧に関する史料』、『大栄町史 史料編Ⅲ 近世2』大栄町
- 10 菅野貞男 2002『佐倉七牧と農民の夫役』、『大栄町史 通史編中巻 近世』大栄町 pp381-453
- 11 (財)香取都市文化財センター 2001『旧矢作野馬除土手(3-040)』、『事業報告Ⅹ』p15
- 12 (財)香取都市文化財センター 2002『旧矢作野馬除土手(2)(3-051)』、『事業報告ⅩⅡ』p16
- 13 成田市教育委員会 2008『旧矢作野馬除土手跡』、『平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書』pp6-8
- 14 成田市教育委員会 2009『旧矢作野馬除土手跡(多良貝地区)』、『平成20年度成田市内遺跡発掘調査報告書』pp15-17

第5章 矢作牧野馬除土手（川上・一銀田地点）

第1節 周辺の地形

1 周辺の地形（第2・23図、図版10）

野馬土手自体が前章の十余三・一銀田地点と同様、行政界となるために、所在地は2市町にまたがる。成田市側の所在地は成田市大栄十余三245-50の一部ほかになり、旧大栄町域となる。多古町側は香取郡多古町一銀田字馬場161-3ほかとなる。以下の報告では、前章同様、煩雑を避けて土地の帰属に関係なく記述するが、必要に応じて帰属を用いて記述することがある。

調査地から北へ約700mの地点に、北西に流れて利根川に注ぐ尾羽根川の水源地となる、現在、ウォータークラークとして整備されている多良貝池があり、その間はほぼ平坦な台地が続く。また南南西400mの地点と西南西110mの地点には、太平洋に注ぐ高谷川の支流によって開析された谷頭部が迫り、まさに分水界のただなかに位置するといっただろう。調査地の歴史的環境、周辺の調査例等については、前章と同じ牧に帰属し、調査地点もさほど離れていないので、記述は省略した。

第2節 調査成果

土手の形状が東側に約35°の角度でV字状に開き、調査区の西端で一つになる野馬土手2条が調査対象である。以下の説明では便宜上、北側の土手を北土手、南側を南土手として呼称する。

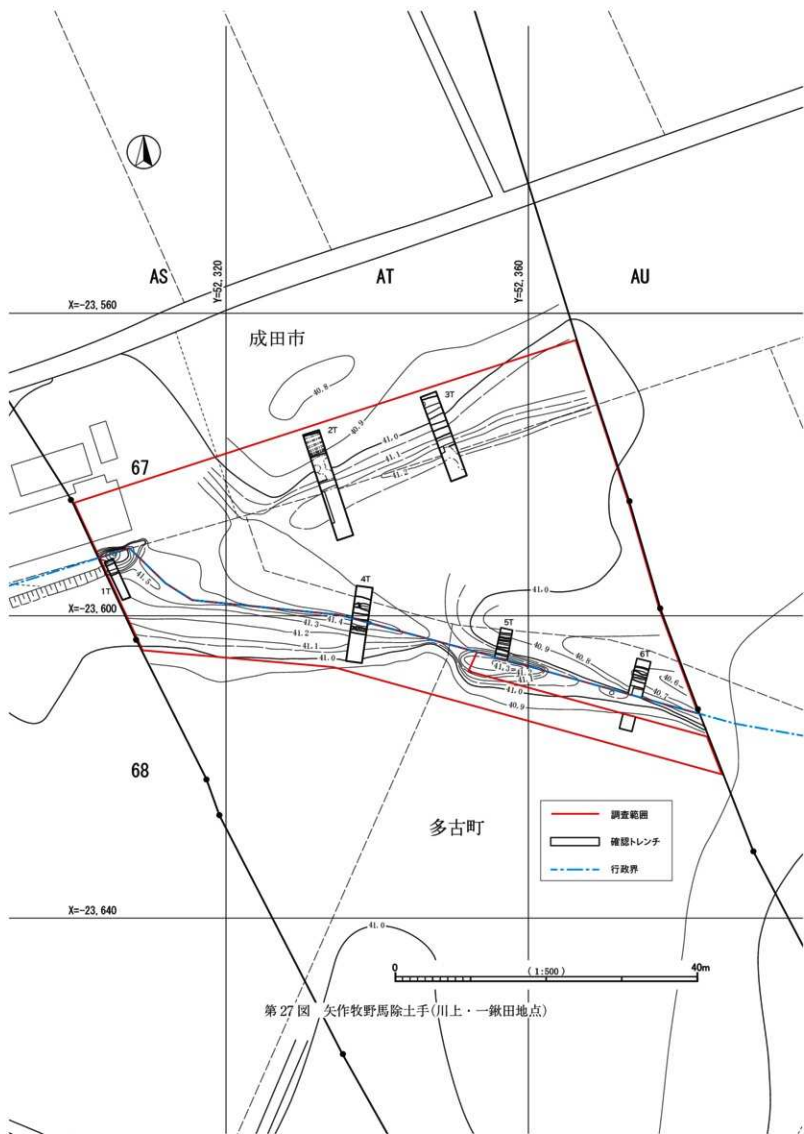
北土手は調査区の北辺に沿って長さ67mあり、南土手は調査区の南辺に沿って長さ80mあり、合計147mの土手の調査を行った。南土手の一部が多古町に属し、調査対象面積は成田市側が2,058㎡、多古町側が520㎡で、合計2,578㎡である。調査は前章の大栄十余三・一銀田地点と同様、幅2mのトレンチを土手に直交するように設定し、調査順にしたがってトレンチ番号を付した。南土手に4本、北土手に2本の、計6本のトレンチとなり、調査面積は計97㎡になった。以下、トレンチの番号順に記述しておく。なお南土手の延長は、約820m南に位置する、大栄十余三・一銀田地点の土手へと接続する。

1 トレンチ（第27・28図、図版12）

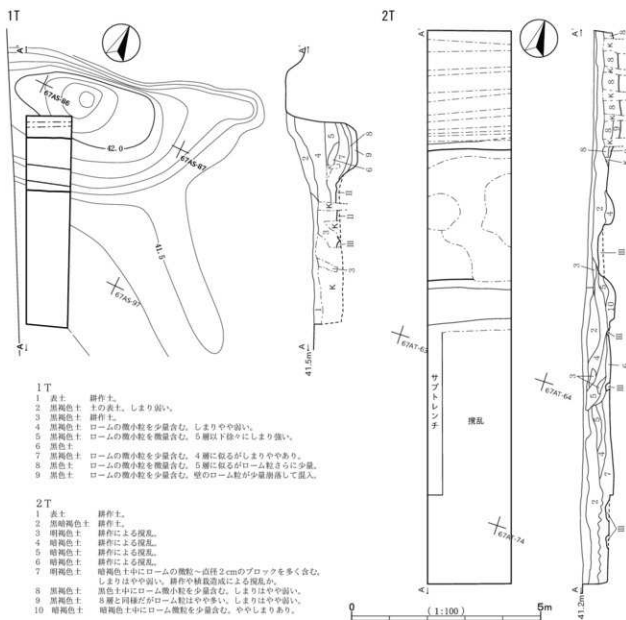
最も西端に設定したトレンチで、土手の見かけ上の高さは1mほどあるが、民地と接していたために、安全を期してトレンチは土手の途中までとした。トレンチの断面観察の結果、土手の裾部分の直下で溝を確認し、かろうじて溝の立ち上がりを確認することができた。それによると上端幅は1.4m、下端幅0.8mで、深さ50cmほどの底面が平坦な溝になる。埋土は黒色系の土砂が堆積していた。溝の直上に堆積する高まりは、土手本来の盛土を切り崩したものが、崩落土のいずれかであろう。なお溝の走行方向から考えて、この土手は北土手に接続する。断面観察の結果、溝はⅡ層を切りこんで開削されていたことがわかった。

2 トレンチ（第27・28図、図版12）

北側土手のほぼ中央に設定したトレンチで、1トレンチから29m東の地点になる。トレンチ中央に、痕跡程度の土手の高まりがある。トレンチ全体にトレンチャーなどの耕作痕が著しく、サブトレンチで確認したところ、トレンチのほぼ中央で、土手と平行する溝の落ち込みを、その直下で確認した。溝の南側立ち上がりの大部分は削平されていたが、溝の上端幅は1.5mほどに復元でき、下端幅は0.7mになる。深さは45cm前後で、平坦な底面から緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色系の土であった。



第 27 図 矢作牧野馬除土手(川上・一鐵田地点)



第28図 川上・一鉄田地点 1・2トレンチ

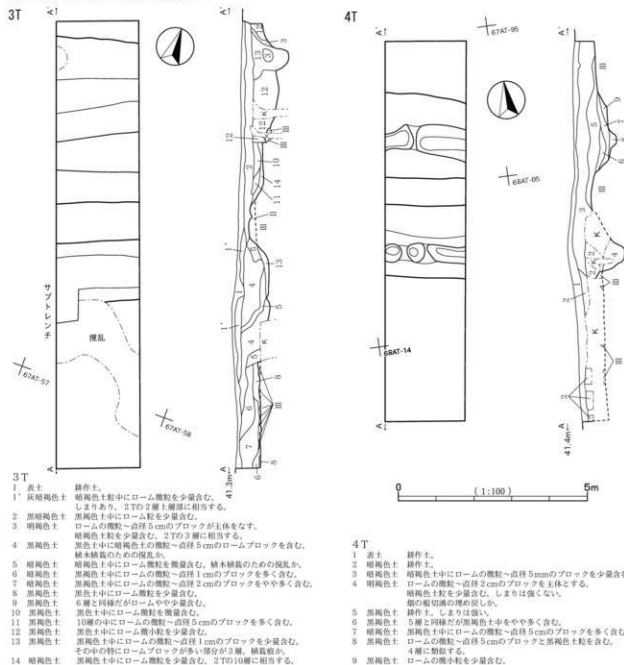
3トレンチ（第27・29図、図版12）

北側土手の最も東に設定したトレンチで、トレンチ中央付近に土手の高まりが痕跡程度に残る。2トレンチ同様、耕作痕や植栽痕が顕著で、Ⅱ層やⅢ層（ソフトローム）の堆積状態から、溝の立ち上がりを確認した。溝南側の立ち上がりは比較の明瞭だが、反対側はわずかな立ち上がりしか残っていないかった。溝下端幅は0.8mほどで、上端幅は1.9mに復元でき、1トレンチに比べて、溝の上端幅はやや広がる。壁の立ち上がり形状などはよく似るので、連続する溝と考えるとよいだろう。

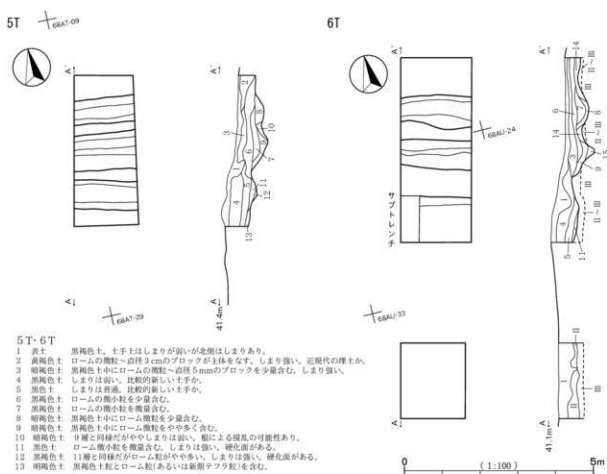
このように北土手では、2・3トレンチの調査成果で明らかのように、土手に伴う溝は判明したものの、土手の高まりは痕跡程度だった。自然営為による崩落もあるであろうが、おもに後世の開墾等で、土手を崩して均したが、均しきれなかったために痕跡のような高まりだけが残ったと考えられる。

4 トレンチ (第27・29図、図版12)

南側土手の西約3分の1の地点に設定したトレンチである。1 トレンチからは約30m東に位置し、トレンチの東約8mの地点では、土手の幅が細ることを確認した。トレンチ中央付近に、高さ30cmほどの緩やかな高まりがあり、土手の痕跡と考えられる。トレンチの南半分はトレンチャーが縦横に入り、攪乱も著しく、土手に伴うと考えられる溝の上面にも及んでいた。溝は深さに比べて幅が狭く、上端幅が1mほどに復元でき、深さは皿層の上面から75cmになる。下端幅は35cmほどで、断面形状は逆「ハ」の字状になる。またトレンチ北側の溝状の落ち込みは、上端幅2.1mあり、下端幅1.4mで、底面中央にはさらに走行方向に平行する細長く、深さ20cmほどの掘り込みを伴う。埋土にロームブロックを多く含む性状から、後世の掘り込みの可能性もある。



第29図 川上・一畝田地点 3・4トレンチ



第30図 川上・一飯田地点 5・6トレンチ

5トレンチ(第27・30図、図版12)

5・6トレンチは、土手の高まりの中央に行政界がとおり、それに接して多古町側に赤道があり、その部分は調査対象外となった。土手の北側に設定した5トレンチは、長さ4mほどである。調査時の所見では、3条の土手と平行する溝を確認し、その上面を覆うように堆積する土層を、新しい土手の盛土の可能性があるとす。南側の溝は幅70cm、深さ20cmと小規模である。残り2条の溝は近接し、断面「W」字状になる。南側は上端幅1.2m、深さ40cmで、「V」字状の掘り込みとなっている。北側の溝は上端幅80cmで、深さが20cmほどのやや丸みを帯びた掘り込みになっている。

6トレンチ(第27・30図、図版12)

赤道を挟んで、2本のトレンチからなる。この部分は土手の高まり自体が低く、30cmほどの高さしかない。南側のトレンチはほぼ2m四方だが、30cmほどの表土下に新規テフラ層、ソフトローム層の堆積を確認したので、溝等の掘り込みは確認できなかった。北側トレンチでは5トレンチから連続すると考えられる溝3条を確認した。最も南側に位置する溝は、幅が1.3m以上あり、深さは20cm程度である。北側の溝2条はやはり両者接近しており、「W」字状の断面形態である。南側の溝は上端幅1.0mほどで、断面「V」字状になっている。深さは60cm近い。北側の溝は緩やかに立ち上り、上端幅0.9m、深さは35cmほどになる。なお2本の土手は調査区の西端で1本になるわけだが、東西方向の土手はその部分でほとんど平坦になってしまい、土手の合流形態については不明である。

第6章 一坪田入 I 遺跡(1)～(4)

第1節 調査地の概要

1 位置と周辺の地形(第2・31図、図版10・13～16)

調査地は成田市多良貝245-528ほかに所在し、旧大栄町域の南西部にあたる。一帯の主要河川である、北流して縄文時代晩期の荒海貝塚付近で根木名川に合流して、利根川に注ぐ尾羽根川右岸に位置し、標高39mの台地縁部の低位段丘上にある。谷部との比高は11m前後になる。調査地の南東約750mの地点には、尾羽根川の水源地となる、現在、グリーンウォーターパークとして整備されている多良貝池があり、尾羽根川の最上流部近くに位置することになる。調査地周辺は樹枝状に開析され、尾羽根川の上流部ということもあって緩やかな谷地形を形成し、浸食の度合いは低いようである。ただ対岸の夜番Ⅰ・Ⅱ遺跡の圏央道関連の発掘調査では、台地斜面下部に客土が厚く堆積しているのを確認している地点もあり¹⁾、地点によっては地形の改変が顕著で、現況が旧状とかなり異なる場合があるので注意を要する。

2 周辺の調査成果(第2図)

圏央道関連事業の路線が尾羽根川の谷筋に沿って計画されたこともあって、周辺には関連事業で発掘調査を実施した遺跡が所在する。周辺のおもだった遺跡の発掘調査成果を取り上げておく。

調査地の南側台地上には一坪田入Ⅱ遺跡が隣接し、調査の結果、縄文時代早期～晩期の包含層を確認し、早期の燃糸文系土器が主体であることがわかった²⁾。遺構としては陥穴1基を調査している。調査地北側の小支谷と市道23-2093号線を隔てて位置する水の上Ⅰ遺跡では、調査対象面積が狭かったこともあって、縄文土器が少し出土しただけであった³⁾。また対岸の尾羽根川水源地の周辺に位置する夜番Ⅰ・Ⅱ遺跡では、旧石器時代と縄文時代における土地利用の一端が明らかとなった⁴⁾。下層は、夜番Ⅰ遺跡で石器集中地点が12箇所あり、第1文化層に野辺山型細石刃石核を伴う石器群があった。夜番Ⅱ遺跡では石器集中地点が9箇所あり、Ⅰ層上部から重厚状ブロックが2箇所みつかった。縄文時代では夜番Ⅰ遺跡で早期の燃糸文系の礫・礫片が大半を占める遺物集中地点が1箇所みつかり、ほかに陥穴が3基あった。夜番Ⅱ遺跡では早期～中期、晩期の遺物包含層を確認したが、主体となるのは中期加曽利EⅡ式であった。またやや下流に位置する大安場Ⅰ遺跡では、早期の鶴ガ島台式を主体とする、前期～晩期にかけての遺物包含層を調査している。遺構としては陥穴2基などがあった。

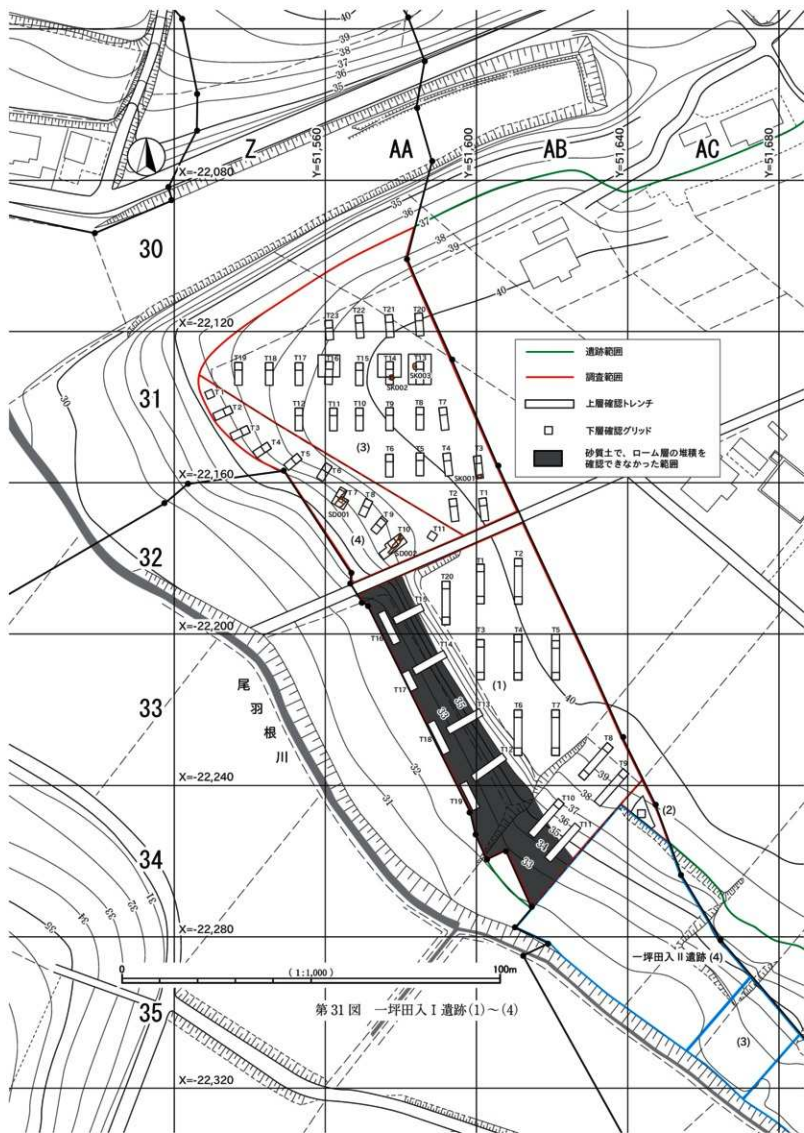
第2節 調査の概要と成果

1 調査の概要(第31・32図、図版13～16)

調査は4次にわたり、上層と下層の確認調査を行った。次数は遺跡の後に()付きの算用数字で表記している。以下、調査回数ごとにその概要を記載する。出土遺物については、掲載資料数が少ないことから、回数に関係なくまとめて掲載することにした。なお圏央道関連事業としての一坪田入Ⅰ遺跡の発掘調査は、1次調査区と2次・4次調査区の間を生活用道路部分を除いて、これですべて終了となる。

2 1次調査の概要(第31～34図、図版13)

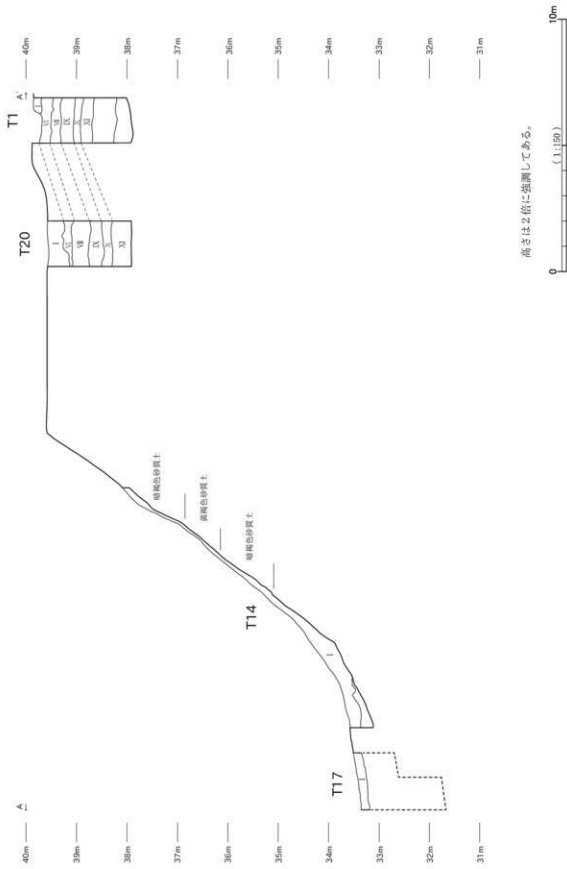
台地縁部から尾羽根川の河岸から25mほどの、台地平坦部と緩斜面部が調査対象範囲で、南北に長い調査区になる。調査対象面積は3,876m²で、台地平坦部は43%ほどである。南端部は調査区の南辺に平行



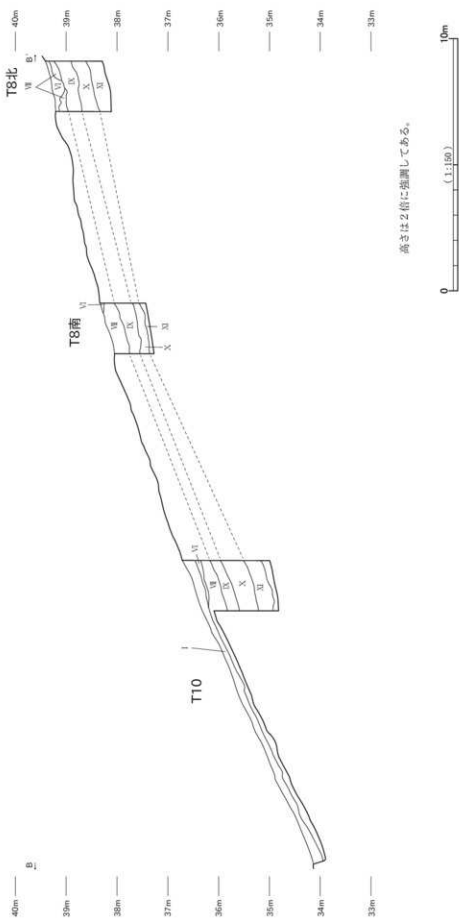
第 31 図 一坪田入 I 遺跡 (1) ~ (4)



第32図 一坪田入I遺跡(1)



第33図 一坪田入I遺跡(1) 調査区北部横断面



第34図 一坪田入I遺跡(1) 調査区南部横断面

して幅20mで削平され、緩やかな斜面が台地奥部まで達している。上層の確認トレンチは全部で19本設定し、台地平坦部では座標に沿って、南北方向のトレンチ1~7を設定し、20トレンチを追加して、8本のトレンチとなった。斜面部では等高線と直交する方向に任意に設定し、最下段部では等高線と平行する方向にトレンチを設定した。その結果、上層の確認調査面積は合計372m²になった。そして台地平坦部を中心に下層の確認グリッドを18箇所設定し、調査面積の合計は72m²になった。調査では、掘削壁の層位観察を行い、適宜、図化していった。

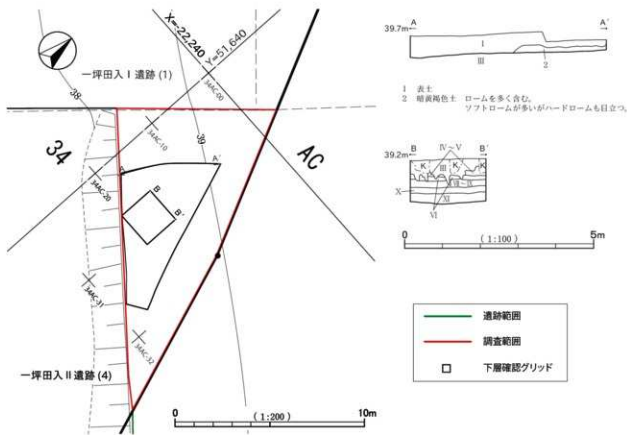
確認調査の結果、斜面部の標高36m以下は、地山が砂質土になり、ローム層の堆積を確認できなかった。台地上では、表土下にはVI層からしか確認できず、すでに大きく削平されていることが判明した。ただ各グリッドで確認した立川ローム層の堆積状況は、尾羽根川に向かって緩やかに傾斜しているので、現状の地表面はほぼ平坦だが、本来この平坦部でも緩斜面を形成していたことがうかがえる。そして武蔵野ロームに相当する層になると、その性状は粘性の強い暗褐色系のハードローム層となる。

3 2次調査の概要(第31・35図、図版13)

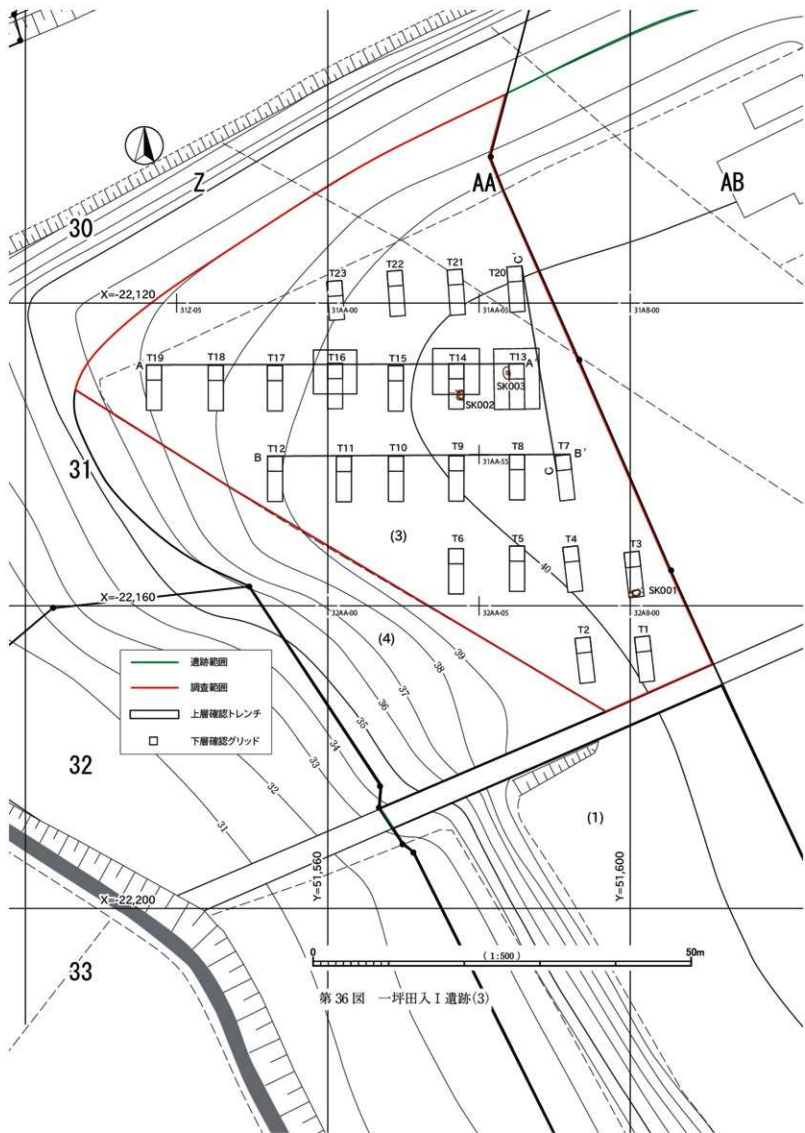
1次調査区の南東端に接し、調査区の西辺は一坪田入II遺跡(4)と接する。調査対象面積は80m²と狭小である。ここでは比較的プライマリーな下層の層序を確認できた。出土遺物は縄文土器の破片が1点出土したのとどまる。

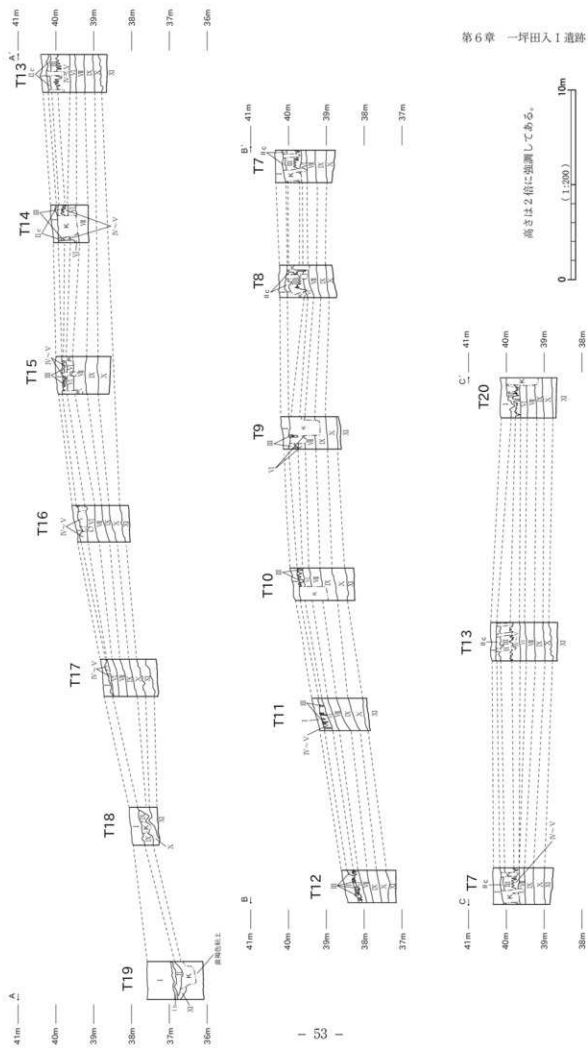
4 3次調査の概要(第31・36~38図、図版14・15)

1次調査区とは生活用道路を挟んだ北側になる。調査区北側は台地奥部まで深く侵食した谷地形の肩部までとなり、調査区全体が谷地形に向かって緩やかに傾斜する。調査対象面積は3,078m²で、上層の確認



第35図 一坪田入I遺跡(2)

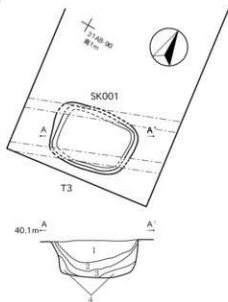




第6章 一坪田入I遺跡(1)~(4)

第37図 一坪田入I遺跡(3) 調査区横断面・縦断面

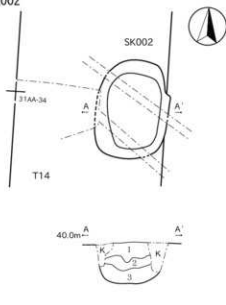
SK001



SK001

- 1 黒色土 ハードローム粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 ハードローム粒とソフトローム粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 ハードローム粒とソフトローム粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 ハードローム粒を含む。しまりはよい。

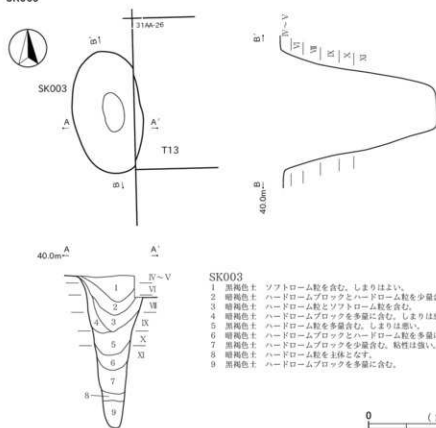
SK002



SK002

- 1 黒褐色土 ハードロームブロック(5mm大)を少量含む。
- 2 黒褐色土 ハードローム粒とソフトローム粒を含む。
- 3 黒褐色土 ハードロームブロック(1~2cm)を少量含む。ハードローム粒を多量に含む。

SK003

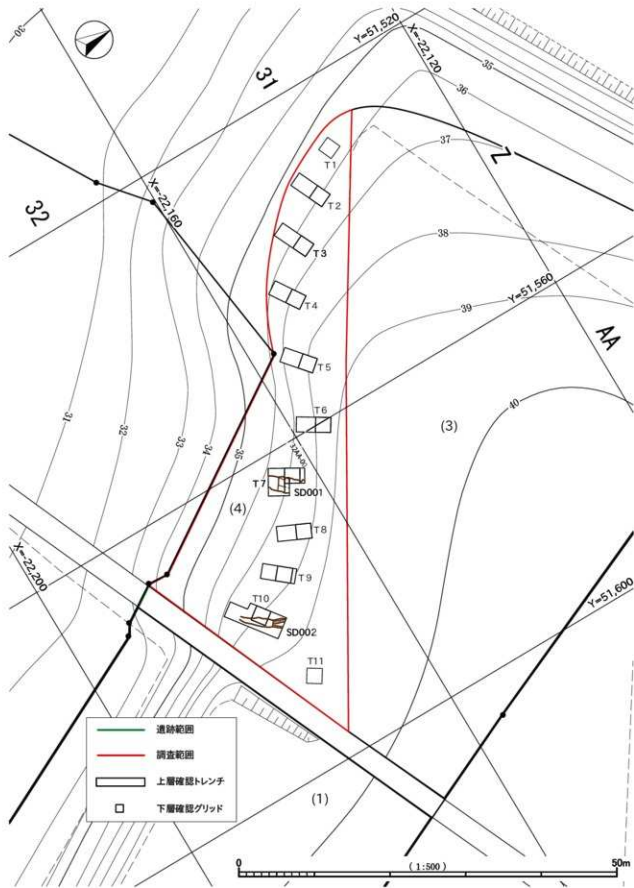


SK003

- 1 黒褐色土 ソフトローム粒を含む。しまりはよい。
- 2 暗褐色土 ハードロームブロックとハードローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ハードローム粒とソフトローム粒を含む。
- 4 暗褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。しまりは悪い。
- 5 黒褐色土 ハードローム粒を少量含む。しまりは悪い。
- 6 暗褐色土 ハードロームブロックとハードローム粒を多量に含む。
- 7 黒褐色土 ハードロームブロックを少量含む。粘性は強い。
- 8 暗褐色土 ハードローム粒を主体とする。
- 9 黒褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。

0 (1:50) 2m

第38図 一坪田入I遺跡(3) SK001~SK003



第39図 一坪田入1遺跡(4)

トレンチは、座標の南北方向を基本に23本のトレンチを設定した。調査面積は276m²となった。調査の結果、3トレンチで土坑1基(SK001)、14トレンチで土坑1基(SK002)、13トレンチで陥穴1基(SK003)を確認した。また出土遺物も、一坪田入I遺跡のなかでは最も多くの縄文土器が出土した。

下層は上層トレンチの一角を利用して、23箇所グリッドを設定し、合計200m²の確認調査を行った。その調査結果によれば、現地表面の傾斜のなりに下層の層序も傾斜して堆積し、標高が高い13トレンチなどではⅢ層の上面にⅡc層とした新規テフラ層を確認できたものの、それ以外の地点ではほとんど流出していることがわかった。トレンチ18・19のように、斜面縁辺部の標高38m以下になると本来の立川ローム層の堆積を逸脱し、その下は黄褐色粘土層になるようである。

SK001 (第36・38図、図版15)

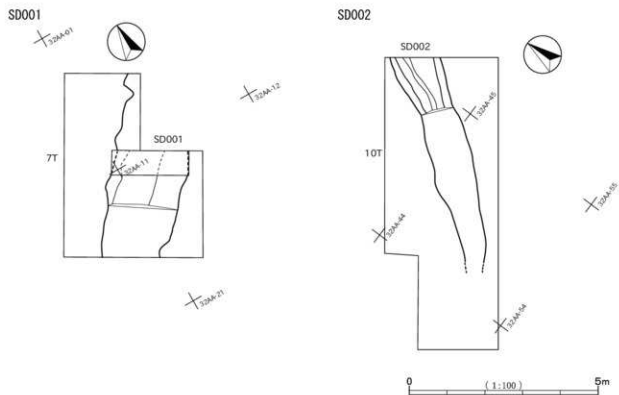
3トレンチの南端で確認した。一部トレンチャーの攪乱があるが、長軸1.1m、短軸0.8mの隅丸長方形の平面形態である。深さは50cmほどあり、壁は垂直に近い掘り込みで、底面は比較的平坦である。主軸方位はN-93°-Eになる。出土遺物はなかった。

SK002 (第36・38図、図版15)

14トレンチの南半の壁際で確認した。SK001同様、一部トレンチャーの攪乱があるが、長軸1.3m、短軸0.9mの、隅にかなり丸みをもった長方形の平面形態で、深さは55cmほどあり、壁は丸みをもって立ち上がる。主軸方位はN-0°-Eになる。出土遺物はなかった。

SK003 (第36・38図、図版15)

13トレンチで下層確認調査の際に確認した陥穴である。平面形態は長円形で、長径1.63m、短径0.93mになる。深さは2.1mあり、武蔵野ローム層まで縦に細長く掘り込まれている。主軸方位はN-9°-Wで、



第40図 一坪田入I遺跡(4) SD001・SD002

等高線には平行する。堆積土は下層に行くにしたがって黒褐色土が多くなるが、多くは暗褐色土がしめる。埋土から縄文土器が数点出土したが、時期幅があり縄属時期の決め手とはならなかった。

5 4次調査の概要(第31・39・40図、図版15・16)

3次調査区の西に接し、調査区のほとんどが緩斜面になる。調査対象面積は974m²で、トレンチは等高線と直交するように任意で10本設定し、調査面積は113m²となった。下層は10箇所のグリッドを設定して、合計40m²調査した。7・10トレンチで等高線と直交する溝状遺構を確認しただけで、それ以外の遺構は確認できなかった。また出土遺物も少なく、縄文土器が数点出土しただけであった。

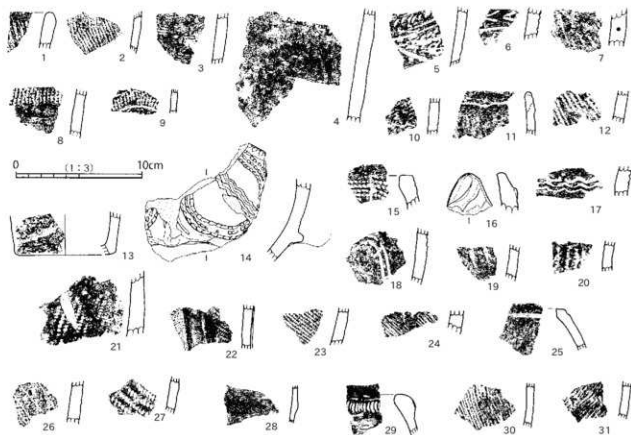
第3節 出土遺物

出土遺物としては縄文土器と石器があったが、いずれも遺構に伴う出土状況ではなく、断片的な単独出土資料ということになる。

1 縄文土器(第41図、図版17)

出土資料は6が1次調査、8・15が4次調査で出土したものである。それ以外はすべて3次調査出土で、特に断らない限り13トレンチからの出土になる。

1~7は早期の土器群である。1・2は撚糸文系で、1は口縁部が残る。いずれも地文は撚糸文Rを施文する。2は胎土に細かい雲母粒を多く含むのが特徴である。3~6は沈線文系で、3・4が三戸式、5・6が田戸下層式になる。3は貝殻条痕文を横位に施文したものである。4は無文の比較的大型な破片資料で、直径2mmほどの細礫を多く含む、さらに雲母粒も多く含む。5・6は横位の沈線文間に斜位の短沈



第41図 縄文土器

線文を施すのを基本とし、SK003から出土した5ではそれが多段構成となって、斜めの浅い凹線文が加わる。6では斜位の短沈線文が「ハ」の字状になる。7は条痕文系で、繊維の含有が顕著である。胎土に白色の細礫を少し含む。

8~13は前期後半以降の土器群になる。8・9は貝殻腹縁を押し引きで施文した興津式になる。9では貝殻文は擦り消され、沈線の区画文が加わる。かなり薄手の作りで、小型の器種を想像させる。10は無節Lの縄文と結節回転文を施文している。前期末に位置づけられる。11~13は五領ヶ台式で、11は製作時における口縁端部の処理が横皺状になって残る。器面には捺痕をわずかに確認できる。12は細沈線を縦方向に密に施文する。13は平底の底部が部分的に残る。12・13は胎土に雲母粒を多く含む。

14~24は中期中葉以降の土器群で、14~20は阿玉台式になり、文様のバリエーションが多様になるので、文様の描出に留意しながら記述しておく。14は波状口縁が残る胴部上半の資料である。口縁部に隆帯で楕円形区画文を表出し、隣り合う区画文帯との交点を三角錐状に突出させている。口縁区画文内部には復列の角押文を区画に沿わせ、区画内中央には鋸歯状の復列文を斜めに施文する。15は口縁部直下に、櫛歯状工具による押し引き文を横位に施文する。16は口縁部の三角形に突起した部分が残る。表面には斜めに隆帯を付加する。17は頸部近くに櫛歯状工具による波状沈線文を施文したものである。18は半截竹管で逆「U」字状文を施文する。19は疎らに爪形文を施文している。SK003出土である。20は貝殻腹縁による刺突を横方向に展開する。14・15・17・18が阿玉台式になる。

21~24は加曽利E式になる。21は底部近くの資料で、単節RLの縄文を縦に施文する。22は垂下する2本の微隆起文帯の間の単節RLの縄文を磨消したものである。23は同じ単節RLの縄文のみが残る資料である。22・23は胎土・色調が似通っており、出土地点も23がSK001出土で、22はSK001が位置するトレンチ出土になるので、同一個体と考えてよいであろう。24は斜めに細い条線を施文したものである。21は加曽利E式前半で、22・23が加曽利E式後半の資料になるであろう。

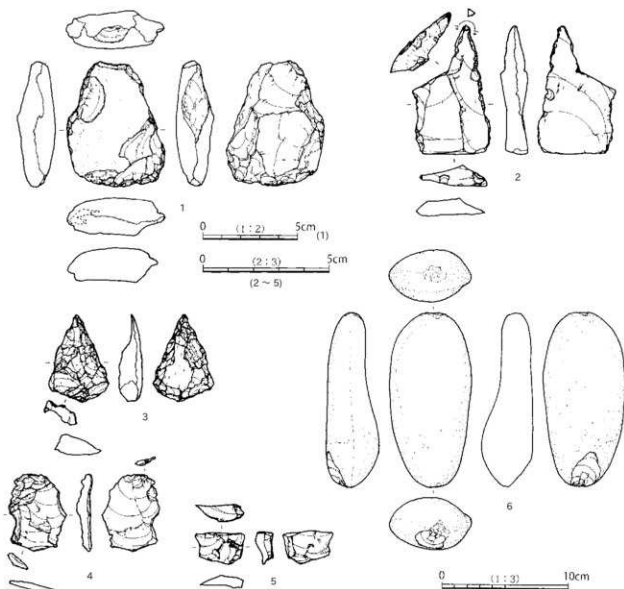
25~27は後期中葉加曽利B式の資料になる。25は球形状深鉢の口縁部資料である。口縁端部を断面三角形に整え、その直下に沈線を巡らす。26は細い沈線を、間隔をあけて斜めに施文する。27は単節RLの縄文を横方向に施文したものである。

28・29は安行式で、28は横位の微隆帯上に単節RLの縄文を施文した精製土器である。29は口縁部が内湾気味で、断面が玉縁状にやや肥厚する粗製土器になる。口縁部には紐線文が巡り、紐線は工具によって連続刺突を施し、それ以下に横位の条線を施し、その後山形の沈線文を加えている。30・31は燃糸文Rを施文した晩期後半の土器で、いずれも薄手の作りである。

2 石器類 (第42図、図版17、第3・4表)

1次・3次調査で20点余りの石器類、礫・礫片が出土した。それらは石器集中地点を形成しない一括資料や単独出土の資料で、出土状況から帰属時期を判断するのは難しい。これらから完形及び比較的遺存状態が良好な6点を抽出して図示した。出土地点・計測値等については表に掲載した。

1は局部磨製石斧である。最大長は7cmに満たない。刃先は剥離による調整のみで、磨り調整を施さず、刃部が鈍角の状態で遺棄されたものである。正面の研磨面が作成時本来の器面になるであろうか。この種の局部磨製石斧は立川ローム層IX層前後で台形椀石器とともに出土する例が多く、当該資料も石材の特徴からも後期旧石器時代初頭に帰属すると考えられる。色相は黒色、暗～淡緑色、灰褐色が混在し、極く微弱ながら磁性をもつ角閃片岩で、比重は3.01になる。なお石材はこれまで蛇紋岩としていたものだが、近



第42図 石器

年は鉾物鑑定による構成物質名での呼称が浸透しているので、ここではそれによった。

2は器面の風化度合から、旧石器時代の石刃を縄文時代以降に加工したと推定される石錐(採種器)である。主要剥離面の中心に細い棒状、あるいは先端が尖った加工具で垂直に加撃し、節理面から「く」の字状に割れが生じている。その突出した一端を機能部とし、三ツ目錐状に整えている。端部には磨耗光沢がある。図では縁辺の微細剥離痕、器面の光沢がみられる部位を矢印で示した。石材は褐灰色の珪質頁岩で、器面には錆色の変色痕が入る。縄文時代の加工痕は濃灰色であり、多重のパatinaを確認できる。

3は石錐の未成品である。先端部は両側縁からの調整により尖鋭となるが、基部には厚みのある素材面が残る。濃淡のある灰色のチャート製である。4は頭部調整痕のある剥片で、器厚が薄いため縁辺に欠損が目立つ。二次加工痕或使用痕は認められない。石材は、褐灰色を基調とし濃灰色の紡錘状の斑紋を含む嶺岡産珪質頁岩である。5も剥片で、上部は折れて遺存しない。末端は背面側へと回りこむ。石材は黒曜石で、青みがかった透明感のある石基にφ2mmほどの斑晶を少量含む。6は複数の機能をもつ円礫製

加工具である。長軸の両端部に、器形を大きく変えるほどではないが、潰れ状の敲打痕が残る。正面の平坦面は磨耗してゆるやかに凹む。下端には下方からの剥離痕がみられるが、他の部分との色の違いは明らかで、後世の使用で割れが生じたのであろう。色調は正面が淡黄褐色、表面は青灰白色、剥離面はザラ感のある緑灰色になる。φ1mm前後の斑晶が散在する流紋岩で、磁性はない。

なお5の黒曜石剥片は、エネルギー分散型蛍光X線分析による元素分析の結果、神津島恩馳島群と判別された。測定値は以下のとおりである。

第3表 出土石器の測定値および産地推定結果

K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb 分率	Mn*100 Fe	Sr 分率	log Fe K	判別群	エリア
224.1	1129	1389.0	408.3	555.0	340.3	877.8	18.72	8.13	25.44	0.79	恩馳島	神津島

第4表 一坪田入I遺跡出土石器属性表

番号	種類	図版	調査 次数	グリッド	遺物 番号	図録	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	42	17	(3)	9T	1	局部磨製石斧	角閃片岩	68.78	50.78	20.49	83.23	緑色岩小。
2	42	17	(3)	13T	2	石鏃	流紋岩	51.59	29.74	10.13	11.42	
3	42	17	(3)	遺跡一括	1	石鏃未成品	チャート	34.48	23.37	9.32	6.35	
4	42	17	(3)	8T	1	剥片	黒曜岩緑頁頁岩	30.74	23.12	5.09	2.78	
5	42	17	(3)	遺跡一括	1	剥片	黒曜石	13.75	19.87	7.23	1.55	上部欠損。神津島産小。
6	42	17	(3)	16T	3	円錐形加工具	流紋岩	137.11	63.72	40.51	468.59	
7			(1)	7T	1	礫片	流紋岩	21.99	16.48	7.33	2.10	
8			(1)	8T	1	不明	細晶片岩	81.87	38.53	18.54	74.89	雲母片岩
9			(1)	8T	1	不明	チャート	48.82	26.49	17.06	23.31	赤~緑色の付着物あり。
10			(1)	10T	1	礫	砂岩	26.53	22.92	5.17	4.42	
11			(1)	10T	1	礫	流紋岩	23.42	17.47	5.39	3.17	
12			(1)	20T	1	砕石	不明	32.31	14.72	16.43	9.17	
13			(3)	遺跡一括	1	礫	多孔質安山岩	69.97	48.28	38.92	98.52	
14			(3)	遺跡一括	1	不明	黒曜岩緑頁頁岩	28.57	33.78	22.91	20.81	
15			(3)	遺跡一括	1	不明	緑色岩?	32.02	27.91	24.73	24.76	
16			(3)	遺跡一括	1	礫片	流紋岩	29.21	21.08	11.79	7.32	
17			(3)	遺跡一括	1	礫片	頁岩	25.04	24.62	18.27	7.12	
18			(3)	遺跡一括	1	礫片	頁岩	16.31	15.52	12.06	3.15	
19			(3)	14T	1	砕石	不明	17.99	15.07	7.66	1.96	
20			(3)	14T	2	不明	不明	21.88	17.72	10.07	3.44	炭化物付着
21			(3)	16T	2	礫	チャート	42.21	26.74	24.53	37.85	
22			(3)	16T	4	石鏃未成品	黒曜岩緑頁頁岩	36.72	30.97	14.51	13.05	中に炭化あり。
23			(3)	20T	1	礫	安山岩	44.62	43.24	15.68	30.97	

1 (公財)千葉県教育振興財団 2019「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書34-成田市大安場I遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場IV遺跡・大安場V遺跡・水の土I遺跡・一坪田入II遺跡・夜香II遺跡・夜香I遺跡-」

- 注の1に同じ。
- 注の1に同じ。
- 注の1に同じ。
- 注の1に同じ。

第7章 総括

第1節 水戸塚ノ後1号塚・2号塚

1 2基の塚について

2基の塚は、盛土中に宝永火山灰と考えられる土砂を含むことから、18世紀前半の築造と考えた。1号塚は1辺が15mを超えやや大型で、2号塚は平均的な規模になるであろう。2基の塚を近接して築く例はあまり多くはないが、近隣では成田市芦田台1・2号塚の例がある¹⁾。そこでは1辺10m前後の方形の塚が東西に2基並ぶ。周辺の畑地面積を記録した古絵図中の同所に、庚申信仰に由来する3基の塚がみえることから、道教思想を背景に、出土銭貨から17世紀中葉以降に築造されたと考えられている。水戸塚ノ後1号塚・2号塚の場合、塚構築に関する伝承等が伝わっていないので、構築の目的は定かではない。しかしその2基という基数から、三山塚や十三塚には該当しないので、道教思想に根ざした庚申塚の可能性はあるかもしれない。

もう一つの可能性を調査地の北東約800mに位置する、常照山法眼寺との関係から探っておきたい。既述のように調査地は、小湊誕生寺の末寺で日蓮宗一致派に属す法眼寺の地所に含まれる。『多古町史』²⁾によれば、明治時代の「社寺明細帳」では由緒不詳とするが、現在の過去帳に「文化明治両度の火災により、その一切を焼失」とあることで、不詳の理由が明らかになる。その後再建事業の際に、「応安二(1369)年己戌五月六日と刻まれた題目板碑を掘り出した。」とあり、「日蓮宗寺院大鑑」³⁾には板碑と同じ紀年を創立とし、「開山親照院日勝。潮師法縁。(大観には開山日宝とある)」と開祖も明らかにしている。いっぽう天保14(1843)年に本山へ提出した文書では「宝永三丙戌年正月十五日、一、開山 智乘院日寶大徳」とする。同所には弘化5(1848)年正月建立の「當寺開祖智上院日寶大徳 施主檀那中 當寺三十二世智叔(花押)」という、本山への提出文書と同内容を刻む題目塔がある。なおこうした経緯の一端が伝承されて、塚を「題目塚」と呼んだ可能性もある。

このように同寺の開山に関して2説ある。同地には寛文12(1672)年3月銘の石造多宝塔があり、開山が宝永期以前になるのは確実なので、『多古町史』では2説を整合的に理解して、開山が題目板碑の応安2(1369)年で、開祖を日勝とし、日宝(寶)を中興の祖として、その時期を宝永3(1706)年と推定している。ここではとりえず首肯できる内容と判断する。調査した2基の塚は『多古町史』でいう中興期の早い時期に相当するので、法眼寺の中興、あるいは富士山の宝永噴火を契機に仏事の一斑として寺域のはずれに塚を築造したことも考慮する必要があるであろう。塚の構築に関して、現時点ではこれ以上の根拠を持ち合わせていないので、いくつかの可能性を指摘するのにとどめたい。

2 骨蔵器埋納遺構(SK001)について(第11・13図)

1号塚盛土下でみつかったSK001は、土器を複数個体利用した骨蔵器埋納遺構である。時期的には、第13図2(以下、第13図を略して遺物番号のみを記載する。)の蓋とした土師器高台付盤が、底面が緩やかに湾曲して深みがあるなど新しい要素もあるものの、口径が22.7cmと大きく、口径に対する底径比も72%あることから、8世紀中葉に位置づけおきたい。これは伴出した甕の年代観とも大きな隔たりはないと考える。なおこの台付盤は佐波利腕被せ蓋が祖型なので⁴⁾、埋納にあたって器種本来の機能を果たしたといえよう。

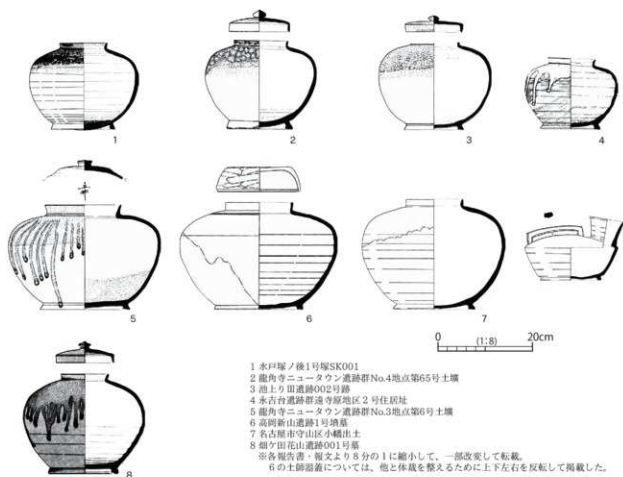
骨蔵器埋納遺構で、SK001のように甕類を埋納器の身とし、器高の低い食膳具をその蓋とする器種構成は、県内では我孫子市新木南遺跡⁵⁾に、須臾器高台付盤の口縁を下にして蓋に転用した例がある。県外では茨城県土浦市石橋南遺跡第2号火葬墓⁶⁾、八幡臨遺跡4号火葬墓⁷⁾等がある。前者は須臾器高台付盤を裏返し、後者では口縁部を上に乗けていた。いずれも9世紀前半と考えられている。また無台土師器皿を蓋とした例では、多古工業団地内遺跡群土持台遺跡94号跡⁸⁾や多古台遺跡群No.3地点K-1⁹⁾などにあり、9世紀前半と考えられる。なお土持台遺跡の容器は、壺Aを土師器にうつした特殊な製品になる。土師器皿と甕の組合せでは、佐原市(現香取市)大倉発見の火葬墓¹⁰⁾があり、特注と考えられる皿型土師器との組合せ例では、栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点第1号土塚¹¹⁾がある。埋納用以外の器種で構成された土器群では、日常雑器類で一般的な煮炊具と食膳具の皿や皿という組合せを骨蔵器として埋納する行為のなかで、そのセット関係を成立させたことになる。SK001例はこれらに先行すると考えられるので、香取海周辺ではSK001例以降も、連綿と同じような作法が受け継がれていったことを示しているといえよう。

SK001例のように、内容器に蓋をした上にさらに土器類で覆った例には、近隣では小原子台遺跡20・21号跡例がある¹²⁾。20号跡では内容器の壺を鉢で蓋をし、それらを外容器の甕に納め、さらに甕を逆さにかぶせていた。21号跡では蓋にした土師器甕と身の土師器甕は、口径がほぼ同じなので、甕の口縁部周辺を打ち欠いて入れ子にしている。使用した4個体の土器の総高が87cmあり、埋納遺構の深さが44cmとその半分なので、土器を打ち欠くことで重ねる容器どうしの取まりを調整していたことになる。なお内容器の土師器甕は特異な器形で、これ用に特に洗えた製品であろう。21号跡では外容器に須臾器甕を使用しており、器種に異同があるものの埋納方法は変わらない。このように調査地周辺にはさらに入念な骨蔵器の埋納方法があって、今回の調査例はそれに1例を加えることができたといえよう。

3 奈良・平安時代の出土土器について (第13・43図)

今回の報告資料で最も注目されるのは、4の灰軸短頸壺(以下、「塚ノ後例」という。)であろう。胎土・焼成・釉色の特徴から猿投窯の製品としてよいであろう。そして口縁部から器体上半部の降灰の溶着状況から、灰軸の初源形態¹³⁾である原始灰軸の段階と考えた。詳細は灰軸陶器の編年大系のなかで評価すべきで、多岐にわたる検証は今後に委ねることとする。調査地を含む、木更津市域の東京湾岸から内陸の香取海周辺にかけては「灰軸骨蔵器ベルト地帯」¹⁴⁾とも称されるように、灰軸短頸壺を用いた古代火葬墓の調査例が集中する。そこでそれらの調査例から、器形の特徴やこれまでに提示されている年代観等と比較検討しながら、その位置づけについて簡単に触れておきたい(第43図)。

まず器形、大きさが塚ノ後例に近い資料に、栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点第65号土塚出土の灰軸短頸壺¹⁵⁾(以下、「龍角寺65号例」という。)と、栄町池上りⅢ遺跡002号跡出土の灰軸短頸壺¹⁶⁾(以下、「池上り例」という。)がある。いずれも擬宝珠形のつまみをもつ灰軸の蓋を伴う。なお池上り例の報文で、すでにこの資料が龍角寺65号例に類似することを指摘している。これら2資料を塚ノ後例と比較すると、器体下半部の球状の膨らみ具合は池上り例に近く、底径は龍角寺65号例に近いなど、細部でそれぞれ異同はある。しかし器高・口径・器体最大径・底径の各寸法は塚ノ後例とはほとんどミリ単位の差なので、同一規格の製品群といえよう。釉の溶着状態は、龍角寺65号例では「上半部にはくすんだ緑色の灰軸が掛かっている。」とあり、池上り例では「外面上半に灰軸が掛かっており、特に頸部より肩部にかけてはその量が多く、濃い緑色を呈している。」とある。いずれも顕著な釉だれの形跡はなく、やはり原始灰軸段階の製



第43図 灰軸陶器短頸壺の諸例

品であろう。龍角寺65号例が8世紀末と考えられている¹⁷⁾。県内では同形でさらに小ぶりの資料が、袖ヶ浦市永吉台遺跡群遠寺原地区2号住居址出土資料¹⁸⁾（以下、「遠寺原例」という。）にあり、O-10号窯式期を想定している。しかし同じ器高の「赤羽根出土蔵骨器」（愛知県）¹⁹⁾を参考にすると、こちらは塚ノ後例と同様に下半部に丸みがあり、NN-32号窯式期に遡る可能性も指摘されている。遠寺原例はこれよりも明らかに体部下半の丸みに欠けるので、O-10号窯式期でも新しい段階としたい。なお下総町青山甚太山遺跡では壺Aを模した、器高15cmの須恵器の骨蔵器²⁰⁾があり、8世紀後半に位置づけられている。

ほかに近い時期の資料として、龍角寺ニュータウン遺跡群No.3地点第6号土壇出土²¹⁾（以下、「龍角寺6号例」という。）と佐倉市高岡新山遺跡1号墳墓出土²²⁾（以下、「高岡新山例」という。）がある。これらは器高に対して体部最大径が約1.5倍あり、肩部が大きく張り出す特徴がある。龍角寺6号例は9世紀初頭に位置づけられている。高岡新山例は、O-10号窯式期の古い段階として8世紀第4四半期とするが、口縁の上端部を平坦に作り出した形跡があり²³⁾、O-10号窯式期でも新しい段階で、龍角寺6号例とさほど時期差はないものと考えられる。また成田市細ヶ田山遺跡001号墓の灰軸短頸壺²⁴⁾は、O-10号窯式期からIG-78号窯式期として8世紀末～9世紀前半とするが、体部上半がすでにで肩部になり、口径もかなりすばまり、器高も高くなっており、これらよりも新しい要素が多くなるといえる。

灰軸短頸壺は周知のように7世紀末頃に金属器を模倣した須恵器にはじまり、中世まで連続と生産されていく。形態変遷の大きな流れに、個体の大型化とそれに伴って重心が高くなるという傾向がある。それ

を踏まえれば器高が20cmに満たない塚ノ後例を含む一連の灰軸短頸壺は、龍角寺6号例・高岡新山例よりも先行すると考える。そして甕式認定や暦年代等の微妙な問題はあがるが、NN-32号甕式期の特徴もまだ残していると判断し、O-10甕式期の古段階で、8世紀末より前の8世紀第4四半期という年代観を提示しておきたい。

なお参考までに愛知県名古屋守山区小幡出土の灰軸短頸壺を取り上げておく²⁵⁾。この壺の各寸法は塚ノ後例の約1.3倍で、体部最大径の器高に占める高さの比率もほぼ同じになる。プロポーションが相似するものの器高が高い分、塚ノ後例よりも後出的である。報告者はIG-78号甕式期からK-14号甕式期にかけての製品として9世紀初頭と考えているが、共存した灰軸平瓶からIG-78号甕式期とする意見もある²⁶⁾。比定したIG-78号甕式期の甕式としての問題もあるが、塚ノ後例の下限を考える上で参考にした資料である。

これ以外の土器類では5の赤色塗彩された土師器高台付盤状杯が搬入品で、形態・口径から8世紀前葉の資料となる。非ロクロ成形で内外面にミガキ調整を行った6・7は8世紀第3四半期で、17もこの時期と考えられ、墨書土器としては比較的早い段階の文字資料になる。8・9は8世紀第4四半期で、18もほぼ同じであろう。ロクロ土師器では10が9世紀第1四半期、11を9世紀第2四半期と考えておきたい。

4 縄文土器について

今回の調査では遺構こそなかったが、少ないながらも縄文土器が出土したので、周辺の調査例から土器様相を概観しておきたい。まず調査地の西に位置する多古工業団地遺跡群²⁷⁾では、早期～晩期の土器が少量出土しただけで生活痕跡は希薄で、報告書ではキャンプサイトと評価している。最もまとまっているのが土持台遺跡で、遺跡の北区からは早期の燃糸文系(井草式から稲荷台式)・沈線文系(田戸上層式)・条痕文系(子母口式)が出土し、南区ではそれらに加えて前期の黒浜式・浮島Ⅱ式も出土している。今回の出土資料の土器様相は、南区の土器様相に比較的近い。調査地と南区とは至近距離にはなるが、急峻で深い谷地形を挟んで対峙する。そうした地理的環境にもかかわらず、一つの活動エリアが形成されていたといえよう。

なお土持台遺跡では長軸60～90cmの炉穴を5基調査している。また近隣の千田台遺跡²⁸⁾でも同様の遺構を2基調査している。2号塚南裾部にあった、焼土遺構3基(SK002～SK004)は規模的にこれらと似通っており、当該期の土器も出土しているので、炉穴という評価も可能かもしれない。

第2節 長者屋敷遺跡(1)～(3)

今回、報告した範囲は、痩せ尾根の鞍部を横断するような調査だったため、台地の平坦面が非常に少なく調査成果も限られている。そこで長者屋敷遺跡と小支谷を挟んで北側に位置し、周辺では中心的な存在になる五反田清水沢遺跡²⁹⁾(1)の調査成果を参考に、長者屋敷遺跡の調査成果をまとめておきたい。

五反田清水沢遺跡(1)では、既述のように縄文時代前期後葉～中期前葉の竪穴住居12軒と陥穴・土坑などがある。遺構群は調査地の北側に集中し、竪穴住居は一部で重複するほどである。その後、古墳時代前期～中期の竪穴住居が12軒あり、中期では石製模造品の工房もあった。近隣では多古町林遺跡長井戸地区³⁰⁾、芝山町上吹入遺跡・下吹入遺跡群東台遺跡³¹⁾などに同時期の工房の調査例がある。長者屋敷遺跡には古墳時代中期の出土資料はなく、この痩せ尾根上にこうした集落が営まれた可能性は低いであろう。

そこで五反田清水沢遺跡(1)の縄文時代の調査成果と比較してみる。ここでは、時期的には早期～晩期

後半までの土器群が出土し、前期後葉～中期前葉にまとまる傾向がある。長者屋敷遺跡出土量は非常に断片的だが、早期の土器群が優位をしめ、続いて中期となり、時期的に五反田清水沢遺跡(1)と重なる部分がある。両遺跡は台地基部では一続きとなり、五反田清水沢遺跡と枝分かれする地点で、南北から谷頭が競りあがって、急激に尾幅幅が狭くなる。遺物出土量の多寡が土地利用の結果を反映しているのであれば、こうした地形の制約が人の往来にも影響を与えたのではないだろうか。またそこから遺跡範囲の先端部まで瘦せ尾根が続くのも、土地利用という点ではマイナスに作用したのであろう。

第3節 矢作牧野馬除土手(大栄十餘三・一畝田地点、川上・一畝田地点)

1 今回の調査地点と周辺の調査成果との関連について(第23図)

報告した2地点の土手は、それぞれ土手に沿って行政区界が設定されていた。これは見方を変えれば、土手本来の機能を失っても、現代の行政上の境界概念として引き継がれたことを意味する。それを踏まえて、以下で総括しておく。なおここでは地点名が長く煩雑なので共通する一畝田地点を省くことにし、大栄十餘三・一畝田地点を十餘三地点、川上・一畝田地点を川上地点とした。

まず2地点と周辺の調査成果について、土手の連続性を視覚的に再確認し、構造的な異同を指摘しておきたい。川上地点北側の東西方向に延びる土手は、その東約260m地点から始まる土手で区画された、台形の大区画の南辺へと続き、さらにその先で南北に方向を変えた1辺の一部が、成田市教育委員会により調査が行われている(第23図(3)・(4))。土手を横断して調査した(3)の調査成果によると、土手の西側には溝状のくぼみがあり、東側にはその形跡はない。ここだけをみれば区内側に溝を伴う。川上地点の東西土手でも北側で溝と思しき痕跡を横断面で確認しているが、南側では溝らしい痕跡は確認していない。川上地点とは距離的にかなり離れるものの、視覚的に土手は連続し、溝の普請に共通性もうかがえるので、大区画の延長線上に位置する土手と考えて差し支えないであろう。なお成田市教育委員会調査箇所のも最も遺存状態の良い地点では、溝底から土手頂部まで2mある地点もあり、土手がもう少し高かったことを考えれば、土手としての機能は十分果たしていたと考えられる。

十餘三地点の土手と川上地点の南側土手は、かなりの部分が現道と重なり、おそらく路面の施工に伴って、土手の高まりを消失したものと考えられる。十餘三地点では土手の西側で、土手に伴う溝らしき落ち込みを確認しているが、川上地点では北側で溝らしい掘り込みを確認している。地点によって、溝の取りつくりが異なるが、現状ではほとんど現道に沿うので、その連続性は疑いないであろう。

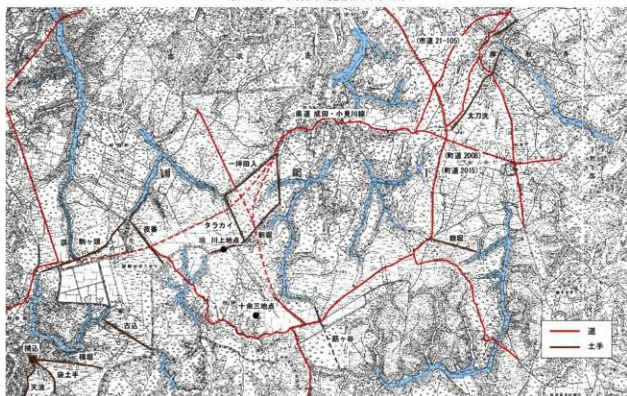
2 古絵図から見た今回の調査地点(第44・45図)

今回の報告にあたって、千葉県文書館が所蔵する矢作牧に関する^{あろもて}宛絵図3点(「あ17」、「あ22」(繪買家文書)、「あ23」)を閲覧した。いずれも製作年代不詳で表現内容に精粗の差はあるものの、「あ17」「あ22」は矢作牧全体を、「あ23」は断裂して牧の東半分だけを図示していた。「あ22」(第44図)は勢子土手を記載し、道や谷筋などの付帯情報も数多くあり、地形的な特徴も把握しやすかったので、これをもとに今回報告した2地点の土手について、絵図上の土手との照合を試みてみた³⁰⁾。その際に現況図では土地改変の度合いが著しいので、迅速図³¹⁾を用いた(第45図)。絵図と比較しやすいうように、因郭を調整し、絵図の道路・谷筋・土手と思しき部分を彩色して補筆してある。

絵図「あ22」は、記載された字名を現地形図に落とすと、東西9.5km、南北7.8kmの範囲を、およそ1万分の1の縮尺で牧全体を図化していることがわかり³⁰⁾、有効な精度はあると判断した。絵図の画面中央に



第44図 矢作牧漁絵図(あ22)



第45図 迅速測量図(45 新東京国際空港) 縮尺約5万分の1

向かっていくつもの谷頭が迫り、矢作牧が分水嶺一帯の地形を利用して展開していたことがわかる。そこで絵図の方位の指示と字名それから支谷の形状から判断して、絵図中央に見える字前林周辺の支谷が大須賀川の上流部にあたり、その西(左手)の支谷が尾羽根川の上流と考えられ、この一帯が今回報告した箇所周辺のあたると考えられる。

そこで絵図の右半分の道が迅速図上の道とある程度同定することが可能という見通しのもとに、絵図の次の2本の道に注目してみた。1本は絵図上半に大須賀川上流部の谷頭群を北側から取り囲むようにめぐり、「U」の字状の道である。牧東部の幹線だったようで、そこにいくつかの支道が交差する。これを現道に重ねると、絵図の北東からの書き出し部分が、現在の成田市道伊能・赤池線(21-105)になり、さらに下って多古町道2008号線・2015号線に接続すると考えられる。絵図にみえる「道祖神」の表記も現地地形図の同じ場所に字名として記載があり、同定は妥当と考える。もう1本は大須賀川上流部の支谷群を横断する単純な曲線の道で、迅速図では屈曲が多いが、主要地方道成田小見川鹿島港線に相当するであろう。これら2本の道は、絵図「あ17」「あ23」でも同じ線形の道を確認でき、牧内外の往来を担う幹線であったと考えられる。なお絵図ではタラカイ土手と夜番土手の間に複雑に交差する道を描くが、迅速図でそれらの道を比定することはできなかった。

絵図中央に目を移すと、一坪田入土手、タラカイ土手、新堀土手の3本の土手に囲まれ、支谷の表現と重なった1辺を欠いたため三角形に表示した区画がある。迅速図では逆台形の区画に相当し、前項の説明で台形の大区画としたものになる。この位置関係から、(財)香取郡市文化財センター調査地点(1)は絵図の一坪田入土手になり、同調査地点(2)はタラカイ土手、成田市教育委員会調査地点(3)・(4)は谷部分を中心とした調査だったので、区画の1辺が欠けたあたりに相当し、新堀土手になるであろう。したがって川上地点の北側土手もその延長なので、やはり新堀土手でよいだろう。いっぽう十余三地点の土手は、絵図での表記を確認できず、土手名は不明になる。なお絵図ではこの三角形の区画のなかに交差する3方向の道を描くが、迅速図には該当する道は確認できない(破線部分)。迅速図ではこの地目を灌木地と表記しているので、測量時点で低木が帯を覆っていて、地表観察が困難で図化できなかった可能性がある。

第4節 一坪田入I遺跡(1)~(4)

一坪田入I遺跡は、遺跡の南を流れる尾羽根川の上流域に位置する。圏央道の路線が川筋近くに計画されたこともあって、圏央道関連事業でその右岸を中心に、連続と続く遺跡が調査対象となっている。その調査成果は下層はともかく、上層については遺構が希薄で縄文時代の包含層が主体となる傾向がある。したがって一坪田入I遺跡の上層の調査成果については、尾羽根川上流域の調査成果がまとまった段階で、それらの総体の中で調査成果の評価を行うのが妥当と考え、ここでの総括は省略する。

1 (財)千葉県文化財センター 1985「成田市芦田台1・2号塚-県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-」

2 多古町史編さん委員会 1985「水戸・石成」『多古町史(下巻)』多古町 pp496-500

3 日蓮宗寺院大鑑編集委員会編 1981「法眼寺[山号]常照山」「日蓮宗寺院大鑑」大本山池上本門寺 p172

4 後藤健一 2015「出土遺物の分類と編年」『遠江湖西塗跡群の研究』六一書房 pp99-102

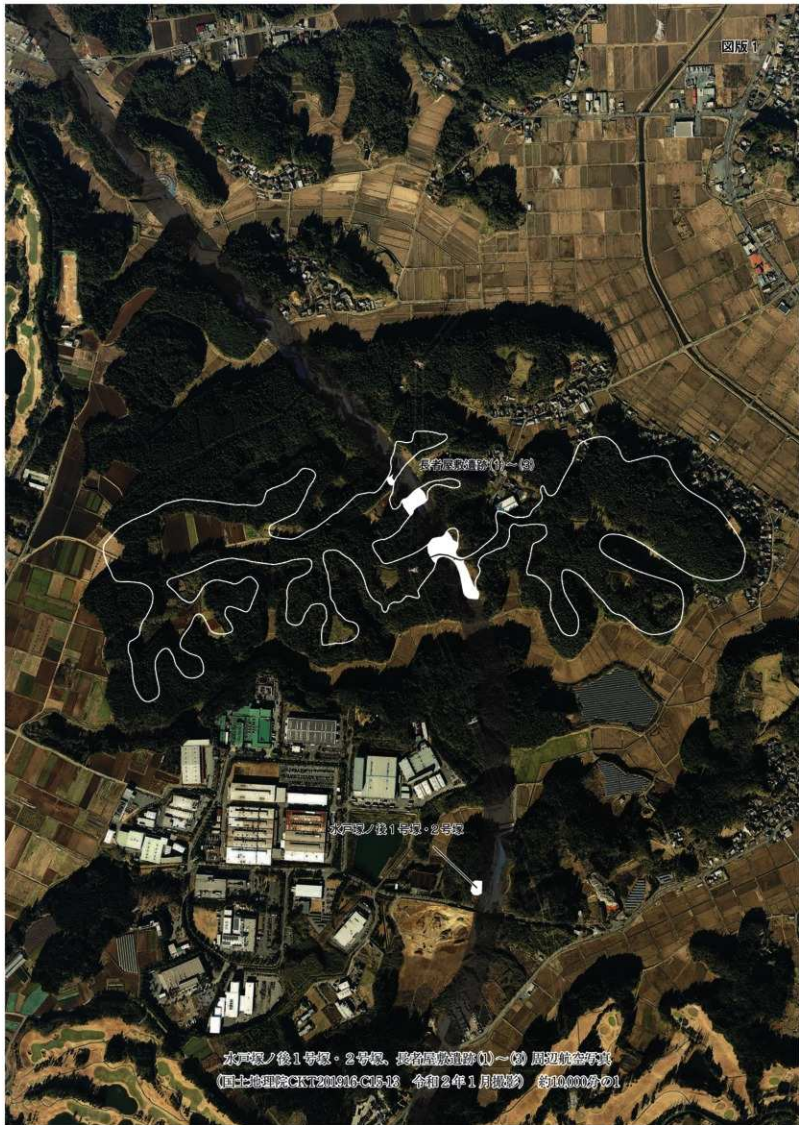
5 我孫子市教育委員会 1991「新木南遺跡」我孫子市埋蔵文化財小報第7集。なお報告では9世紀中葉とするが、須恵器高台付盤の口径が約20cmあり、口径に対する底径の比率も72%あり、SK001出土例とはほぼ同時期に想定しておきたい。

6 土浦市道路調査会 2009「石橋南遺跡-田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第7集

第7章 総括

- 7 土浦市遺跡調査会 2009『八幡脇遺跡-田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集
- 8 (財)千葉県文化財センター 1986『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台・栗根・土持台・林中ノ台・吹入台-』
- 9 (財)香取都市文化財センター 2002『多古台遺跡群Ⅱ-No.3地点の調査』
- 10 鈴木文雄 1985『佐原市大倉発見の平安時代火葬墓について』『研究連絡誌』第12号(財)千葉県文化財センター pp10-14
- 11 龍角寺ニュータウン遺跡調査会 1982『No.4地点の調査』『龍角寺ニュータウン遺跡群-千葉県印旛郡采田龍角寺ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告-』
- 12 類例の参照にあたっては、おもに東日本埋蔵文化財研究会編 1995『東日本における奈良・平安時代の墓制-墓制をめぐる諸問題-』第5回東日本埋蔵文化財研究会を参考とした。
- 13 斎藤孝正 1982『猿投堂における灰軸陶の展開』『考古学ジャーナル』No.211 ニュー・サイエンス社 pp47-52
- 14 吉澤 悟 2003『茨城県北浦町出土の灰軸短頸壺について』『MUSEUM』第586号 東京国立博物館 pp6-22
- 15 注の11前掲書『No.4地点の調査』なお計測値「底部(高台径)18.7cm」は誤りで、掲載図から測りなおした。
- 16 千葉県立房総のむら 1989『池上りⅢ・五丹歩遺跡』『千葉県立房総のむら年報』3。なお口縁端部を欠くために器高を18cmと推定しているが、高さ18cmは頸部の立ち上がり部分なので、掲載図から再計測して器高を19cmに改めた。
- 17 注の12前掲書第Ⅱ分冊、松田富美子『龍角寺ニュータウン遺跡群』pp265-268
- 18 (財)君津都市文化財センター 1985『水吉台遺跡群-榑ヶ浦町-』
- 19 注の12前掲書第Ⅲ分冊、北村和宏『赤羽根出土蔵骨器』p107
- 20 (財)香取都市文化財センター 2000『青山甚太山遺跡』
- 21 注の11前掲書、『No.3地点の調査』。
- 22 (財)印旛都市文化財センター 1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅰ』
- 23 斎藤孝正 2000『日本美術 越州窯青磁と緑釉・灰軸陶器』No.409 至文堂 pp35-36
- 24 (財)千葉県文化財センター 1989『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 25 橋崎彰一 1993『名古屋市守山区小幡出土の灰軸陶器』『愛知県陶磁資料館研究紀要』12 愛知県陶磁資料館 pp46-49
- 26 注の12前掲書第Ⅲ分冊、北村和宏『小幡出土蔵骨器』p105
- 27 注の8前掲書。
- 28 (財)千葉県文化財センター 1996『多古町千田台遺跡-BR/W南側NDB用埋蔵文化財調査報告書』
- 29 (公財)千葉県教育振興財団 2021『五反田栗島遺跡(1)』『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書39-成田市一坪田Ⅱ遺跡(3)-(5)・多古町五反田栗島遺跡(1)』
- 30 多古町林遺跡調査会 1985『林遺跡調査報告書』
- 31 下吹入遺跡調査会・芝山町教育委員会 1987『下吹入遺跡群発掘調査報告書』
- 32 矢作牧西部の一部について、以前、同様の試みがあったので、それも参考とした(黒沢 崇 2013『成田市 天神峰中央所在野馬土手-県単道路改良(幹線道路整備)委託埋蔵文化財調査報告書-』(公財)千葉県教育振興財団 p8、第6図)。
- 33 明治10年代後半に作成された地図資料(地図資料編纂委員会編 1989『明治前期 関東平野地誌図集成』柏書房)。
- 34 矢作牧の規模はおおよそ東西13.0km、南北10.5kmに推定されている(嶋田浩司 2006『矢作牧』『房総の近世牧跡 県内遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 p52)。

写 真 图 版



大平尾ノ後1号棟・2号棟

大平尾ノ後1号棟・2号棟

大平尾ノ後1号棟・2号棟、地名地価図(0)～(9)周辺航空写真
(国土院地価センター2016-C05-12 令和2年1月現在) 約1000分の1



1 1・2号塚 調査前風景 北東から



2 1号塚 調査前風景 北東から



3 1・2号塚 表土除去後 南東から



4 1号塚 表土除去後全景 西から



5 1号塚 土層断面 南東から



6 1号塚 土層断面 東から



7 2号塚 調査前風景 北東から



8 2号塚 表土除去後 東から



1 2号塚 土層断面 東から



2 2号塚 土層断面 南東から



3 1号塚 遺物出土状況 東から



4 1号塚 遺物出土状況 東から



5 発掘調査風景



6 2号塚 発掘調査風景 東から



7 1号塚 発掘調査風景 東から



8 発掘調査後の植樹





縄文土器・石器



出土土器



1 (1)SX001 表層除去状況 南から



2 (1)SX001 土層断面A-A' 南東から



3 (1)SX001 土層断面B-B' 南西から



4 (1)SX001 北側地山面核出状況 北東から



5 (2)調査前風景 北西から



6 (2)調査前風景 北区 西から



7 (2)北区 3トレンチ 南東から



8 (2)北区 14トレンチ 南西から



1 (2)北区 SD002(11トレンチ) 北から



2 (2)北区 18トレンチ 南西から



3 (2)北区 SD002(20トレンチ) 南東から



4 (2)南区 7トレンチ 東から



5 (2)南区 10・12トレンチ 北から



6 (2)227DS-92付近 下層土層 北東から



7 (2)東方の塚 西から



8 (2)東方の塚上の馬頭観音



1 (2) 調査風景 北区 北東から



2 (2) 調査風景 南区 北から



3 (3) 調査前風景 北区 南西から



4 (3) 調査前風景 北区から



5 (3) 調査前風景 南区 北東から



6 (3) 調査前風景 西から



7 (3) 2 トレンチ 東から



8 (3) 3 トレンチ 南から



1 (3) 6トレンチ 東から



2 (3) 9トレンチ 南西から



3 (3) SD001(9トレンチ) 北から



4 (3) 10トレンチ 北から



5 (3) 11トレンチ 北西から



6 (3) 調査風景



7 (2) 出土遺物

図510

一俣田入丁道筋(1)一(4)

一俣田入丁道筋

久保牧子馬場土手
(0)上：一俣田(1)上

久保牧子馬場土手
(0)下：一俣田(1)下

久保牧子馬場土手・一俣田入丁道筋(1)一(4) 馬場保存会
(国土地理院CKT924X-C20-0 平成4年10月撮影) 巻10の10分01





1 調査前風景 南から



2 調査前風景 北から



3 1トレンチ 南西から



4 2トレンチ 南西から



5 2トレンチ 西側溝 南東から



6 3トレンチ 南東から



7 3トレンチ 東側溝 南から



8 調査風景



1 調査前風景 南土手 東から



2 1トレンチ 南東から



3 2トレンチ 北から



4 3トレンチ 北から



5 4トレンチ 北東から



6 5トレンチ 北東から



7 6トレンチ 北東から



8 4トレンチ 調査風景



1 (1)全景 西から



2 (1)全景 南から



3 (1)全景 南から



4 (1)調査風景 南東から



5 (1)調査風景 南東から



6 (2)34AC-10・11 北から



7 (2)34AC-10・11 北西から



8 (2)34AC-10・11 南から



1 (3)調査区遠景 西から



2 (3)調査区近景 東から



3 (3)2トレンチ 北から



4 (3)1・3トレンチ 北から



5 (3)9トレンチ 南から



6 (3)13・20トレンチ 南から



7 (3)16トレンチ 南から



8 (3)19トレンチ 南から



1 (3)23トレンチ 南から



2 (3)SK001 東から



3 (3)SK003 南から



4 (3)SK003 土層断面 北から



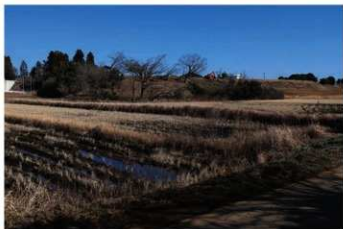
5 (3)SK002 南から



6 (3)調査風景 南東から



7 (4)調査前風景 南西から



8 (4)調査区遠景 北西から



1 (4) 調査前風景 北西から



2 (4) 2トレンチ 南から



3 (4) 3トレンチ 南から



4 (4) 5トレンチ 南から



5 (4) 6トレンチ 南から



6 (4) SD001(7トレンチ) 南西から



7 (4) SD002(10トレンチ) 南西から



8 (4) 調査風景



縄文土器



石器類

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゆうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいりょうきょうこうくしょ						
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書						
副書名	多古町水戸塚ノ後1号塚・2号塚、多古町長者屋敷遺跡(1)～(3)、成田市・多古町矢作牧野馬除土手、成田市一坪田入1遺跡(1)～(4)						
巻次	44						
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告						
シリーズ番号	第794集						
編著者名	今泉 潔・渡邊修一						
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043(422)8811						
発行年月日	西暦2023年9月27日						
	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
水戸塚ノ後1号塚・2号塚	千葉県香取郡多古町水戸塚ノ後1377-1の一部	12347	024	35度43分13秒 140度26分49秒	20180109～ 20180305	塚2基(810m ²)	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
長者屋敷遺跡(1)	千葉県香取郡多古町林字当木489-14の一部ほか	12347	016(1)	35度43分47秒 140度26分41秒	20161003～ 20161011	299 m ²	
長者屋敷遺跡(2)	千葉県香取郡多古町林字栗綱谷829.5の一部ほか	12347	016(2)	35度43分40秒 140度26分48秒	20170926～ 20171031	5,402 m ²	
長者屋敷遺跡(3)	千葉県香取郡多古町林字当木580-2の一部ほか	12347	016(3)	35度43分45秒 140度26分43秒	20171101～ 20171117	2,066 m ²	
矢作牧野馬除土手(大塚1・2号、O11～O15、敷十余三―一畑田地点)	千葉県成田市大塚十余三245-887ほか	12211	106	35度46分44秒 140度25分04秒	20201002～ 20201012	野馬除土手2条 642 m ²	
矢作牧野馬除土手(大塚1・2号、O11～O15、敷十余三―一畑田地点)	千葉県香取郡多古町一畑田字ノ下27-4ほか	12347	028	35度46分44秒 140度25分04秒	20201002～ 20201012	野馬除土手1条 821 m ²	
矢作牧野馬除土手(川上―一畑田地点)	千葉県成田市大塚十余三245-50の一部ほか	12211	107	35度47分09秒 140度24分44秒	20201022～ 20201106	野馬除土手2条 2,058 m ²	
矢作牧野馬除土手(川上―一畑田地点)	千葉県香取郡多古町一畑田字馬場1161.31ほか	12347	029	35度47分09秒 140度24分44秒	20201022～ 20201106	野馬除土手1条 520 m ²	
一坪田入1遺跡(1)	千葉県成田市多良貝245-528ほか	12211	098(1)	35度47分54秒 140度24分16秒	20160928～ 20161026	3,876 m ²	
一坪田入1遺跡(2)	千葉県成田市多良貝245-958の一部ほか	12211	098(2)	35度47分53秒 140度24分17秒	20181108～ 20181114	80 m ²	
一坪田入1遺跡(3)	千葉県成田市多良貝245-521ほか	12211	098(3)	35度47分57秒 140度24分14秒	20190606～ 20190731	3,078 m ²	
一坪田入1遺跡(4)	千葉県成田市多良貝245-521ほか	12211	098(4)	35度47分56秒 140度24分14秒	20210202～ 20210212	974 m ²	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水戸塚ノ後1号塚・2号塚	塚、墓域、 包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代	骨蔵器埋納遺構 1基	縄文土器、石器(石鎌・赤土片) 土師器・須恵器・灰輪陶器、 墨書土器(「葎?」「神?」)	灰輪陶器は壺A といわれる、 壺蓋型の短頸壺 である。
長者屋敷遺跡 (1)～(3)	包蔵地 包蔵地	近世 縄文時代 古墳時代終末から 奈良・平安時代	塚 2基 なし なし	なし 縄文土器(早期中葉) 土師器・須恵器(長頸壺)	
矢作牧野馬除土手 (大栄十倉三・一畝田 地点)	生産遺跡	近世	野馬土手 1条 溝 2条	なし	土手が現在の 行政界で、その 成田市分。
矢作牧野馬除土手 (大栄十倉三・一畝田 地点)	生産遺跡	近世	野馬土手 1条 溝 1条	なし	その多古町分。
矢作牧野馬除土手 (川上・一畝田地点)	生産遺跡	近世	野馬土手 4条 溝 6条以上	なし	その成田市分。
矢作牧野馬除土手 (川上・一畝田地点)	生産遺跡	近世	野馬土手 1条 溝 1条	なし	その多古町分。
一坪田入1遺跡 (1)～(4)	包蔵地 包蔵地	旧石器時代 縄文時代	なし 陥穴 1基	局部磨製石斧 縄文土器、石器(石鎌・石鎌未 成品、円鏝加工具)	
要 約	<p>水戸塚ノ後1号塚・2号塚は、いずれも方形を基調とした平面形態である。盛土中に宝永火山灰層を確認し、近世の塚と考えられる。1号塚下の旧表土面近くから、骨蔵器を伴う埋納遺構(SK001)がみつかった。そこでは正立した土師器壺を内容器として、土師器高台付盤をその蓋とし、さらにその上を倒位の土師器壺の破片が覆っていた。また1号塚の南裾部分から、灰輪陶器壺を含む土器類が集まって出土した。灰輪陶器はいわゆる壺Aといわれるもので、原始灰輪の段階の製品と考えられる。長者屋敷遺跡では瘦せ尾根を縦断するように調査し、縄文土器などが出土したものの、生活痕跡は希薄であったことがわかった。矢作牧野馬除土手は、周辺の開発等によってかなり改変を受けて、遺存状態は悪かった。調査成果を「矢作牧野馬除土手」と照合した結果、川上地点の土手は絵図の新堀土手に相当すると考えられる。十倉三地点の土手は該当する土手がみつけれなかったもので、絵図作成時期とずれのかもしれない。一坪田入1遺跡は、主要河川である尾羽根川の水面近くに位置し、遺構は希薄で、陥穴1基を調査したにとどまる。3次調査で後期旧石器時代初頭に帰属すると考えられる、やや小ぶりの局部磨製石斧が出土したのは特記できる。また3次調査13トレンチから縄文時代早期・前期後半の縄文土器群がややまとまって出土した。</p>				

千葉県教育振興財団調査報告第794集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書44

-多古町水戸塚ノ後1号塚・2号塚、多古町長者屋敷遺跡(1)～(3)、
成田市・多古町矢作牧野馬除土手、成田市一坪田入I遺跡(1)～(4)-

令和5年9月27日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 東日本高速道路株式会社
千葉県美浜区若葉2-9-3

公益財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 ラ イ フ
千葉県成田市不動ヶ岡1128-15
